

# 識名シマ御嶽遺跡

—真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告—

1997年3月

那覇市教育委員会

しき な し 一 ま う たき  
識 名 シ 一 マ 御 獄 遺 跡

—真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告—



上：調査地区全景

下：南側より遺跡を望む（中央の緑のタンクが真地配水池で今回調査した地区）

## 序

この報告書は、那覇市水道局の真地配水池建設工事に伴う埋蔵文化財「識名シーマ御嶽遺跡」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

発掘調査は1993年10月に開始し、1994年1月に完了しました。遺跡の上面は戦後の盛土や識名靈園などの造成工事によって破壊されましたが、それでも多くの成果が得られました。

特に、沖縄の12世紀から16世紀にかけての集落を考える上で重要なピット跡や、溝跡・土留め状遺構等がセットで確認されたことは画期的なことだと考えられます。

その他に、本遺跡で使用された土器・石器・中国製陶磁器等の貴重な資料が数多く発見されています。

のことより、この地が遙かな時代より、人々が延々と生活を営んでいたことが窺えます。

末尾になりましたが、本報告書が「識名シーマ御嶽遺跡」の理解と、広く埋蔵文化財に対する認識と理解を深める資料として活用されることを願います。

なお、発掘調査及び資料整理にあたり、多大なるご協力を頂いた関係各位に対して深く感謝申し上げます。

那覇市教育委員会

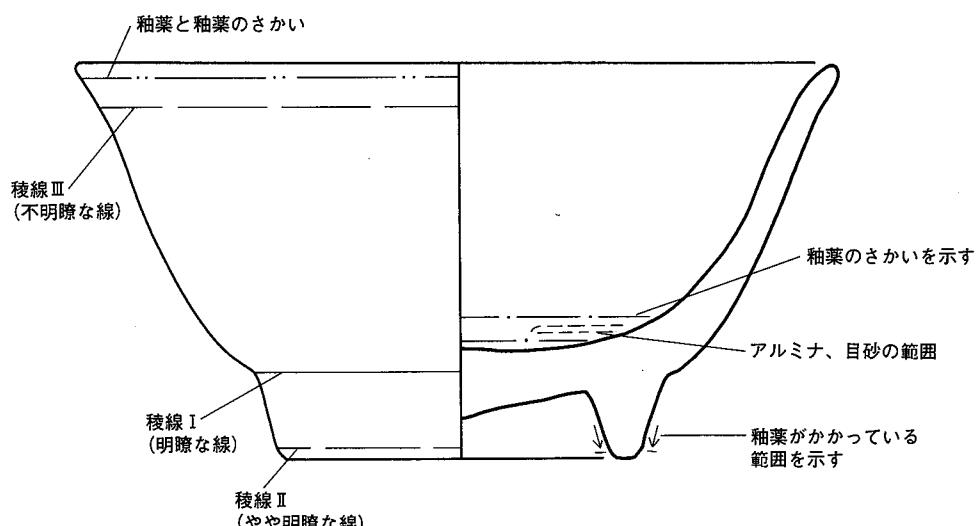
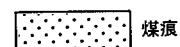
教育長 嘉手納 是 敏

## 例 言

1. 本報告書は平成5年度に実施した「識名シーマ御嶽遺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 調査は「真地配水池建設事業」に伴うもので、那覇市水道局の委託を受けて那覇市教育委員会が実施した。
3. 石質の同定は、神谷 厚昭氏（沖縄県立博物館）による。記して感謝申し上げる次第である。
4. 本書の執筆と編集は下記のとおりである。

編集	島 弘
執筆	渡久地 政嗣 第V章 q・r
	城間 千栄子 第V章 t
	島 弘 第I～V章 a～p・s・u, 第VI章
5. 本書に掲載した空中写真および地形図・国土基本図は、国土地理院発行のものを複製した。
6. 出土した資料については、すべて那覇市教育委員会文化課で保管している。

## 凡 例



## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しきな しー まうたき いせき						
書 名	識名シーマ御嶽遺跡						
副 書 名	真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告						
卷 次							
シ リーズ名	那覇市文化財調査報告書						
シ リーズ番号	第34集						
編 著 者 名	島 弘・城間千栄子・渡久地政嗣						
編 集 機 関	那覇市教育委員会文化課						
所 在 地	〒900 沖縄県那覇市樋川2-8-8 TEL 098-853-5775						
発 行 年 月 日	西暦 1997年 3月 29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
しきな しー ま うたき 識名シーマ 御嶽	おきなわけんなはしあざ 沖縄県那覇市字 真地	市町村 47201 453-17 454 455	遺跡番号 26度 12分 8秒	北緯 ° / ° 127度 42分 57秒	東經 ° / ° 19931018 ~ 19940131	776	真地配水池 建設事業に 伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
識名シーマ 御嶽	集落遺跡	グスク時代	土留め状遺構 集石遺構 ピット群	土器 石器 カムイ窯須恵器 白磁 青磁 青花 天目 褐釉陶器 等			

## 目 次

序

例言

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至るまでの経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査体制及び成果の記録	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第Ⅲ章 調査経過	5
第Ⅳ章 層序と遺構	6
第1節 層序	6
第2節 遺構	9
第Ⅴ章 出土遺物	19
a. 土器	20
b. 石器	24
c. カムイ窯須恵器	30
d. 白磁	33
e. 青磁	36
f. 青花	44
g. 天目	44
h. 褐釉陶器	47
i. タイ産土器	47
j. 瓦	47
k. 鉄鏃	50
l. 鉄釘	50
m. カンザシ	50
n. 煙管	50
o. 沖縄産陶器	52
p. 円盤状製品	60
q. 銭貨	65
r. 土製品	65
s. 羽口	66
t. 獣・魚骨類	69
u. 貝類	73
第Ⅵ章 まとめ	75

## 挿図目次

- 第1図 那覇市の位置
- 第2図 那覇市及び周辺の後期一ヶスク  
時代の主要な遺跡 ..... 3
- 第3図 識名シーマ御嶽遺跡の位置 ..... 4
- 第4図 グリッド設定及び発掘調査地区 ..... 7
- 第5図 層序断面図 ..... 8
- 第6図 遺構配置図 ..... 9
- 第7図 遺構平面図 ..... 11
- 第8図 遺構平面図(完掘状況) ..... 13
- 第9図 ピット断面図 ..... 15
- 第10図 土留め状遺構の断面図 ..... 16
- 第11図 集石遺構(変遷) ..... 17
- 第12図 集石遺構の断面図 ..... 18
- 第13図 土器：後期土器、グスク土器 ..... 23
- 第14図 石器：石斧、軽石製品 ..... 27
- 第15図 石器：すり石、用途不明品 ..... 28
- 第16図 石器：滑石製品、円形石器、黒曜石、  
チャート製品、  
化石サメ歯製品 ..... 29
- 第17図 カムイ窯須恵器：壺・鉢 ..... 32
- 第18図 白磁：碗・皿 ..... 35
- 第19図 青磁：碗 ..... 41
- 第20図 青磁：碗・皿 ..... 42
- 第21図 青磁：盤・壺・瓶 ..... 43
- 第22図 青花：碗・皿・壺  
天目：碗 ..... 46
- 第23図 褐釉陶器：壺 高麗系瓦：平瓦  
タイ産土器：蓋 把手? ..... 49
- 第24図 鉄鎌、鉄釘、カンザシ、煙管 ..... 51
- 第25図 施釉陶器：碗・皿・水注・秉燭  
壺・鉢・小碗 ..... 58
- 第26図 無釉陶器：皿・火入れ・擂鉢・  
鉢・厨子甕  
陶質土器：鍋・土瓶・炉・フライパン状製品 ..... 59
- 第27図 円盤状製品 ..... 63
- 第28図 円盤状製品 ..... 64

- 第29図 錢貨 ..... 67
- 第30図 土製品：土玉、羽口、不明 ..... 68

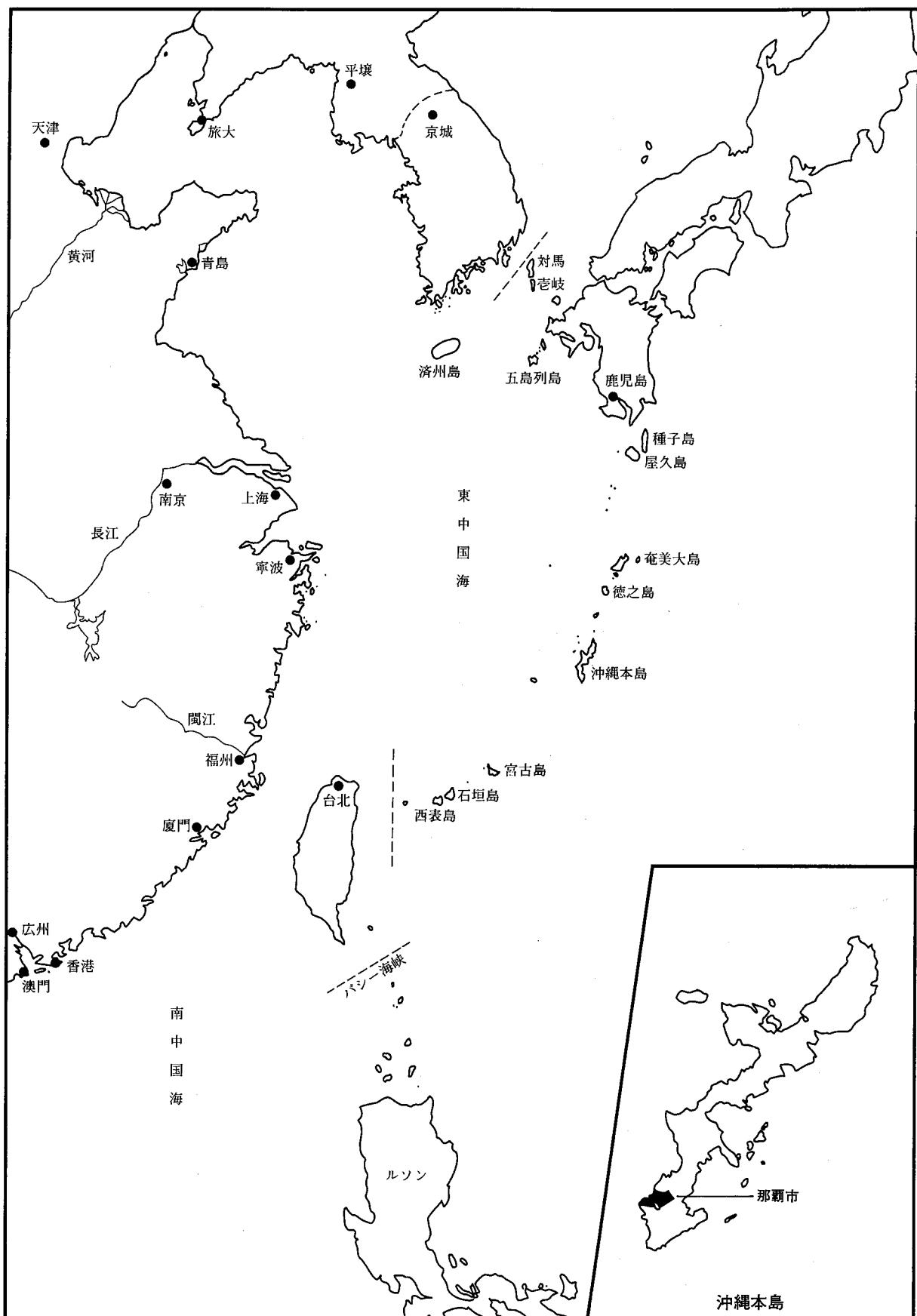
## 表目次

- 第1表 出土遺物一覧 ..... 19
- 第2表 土器出土一覧 ..... 19
- 第3表 土器分類表(胴部) ..... 21
- 第4表 土器観察一覧 ..... 22
- 第5表 石器集計一覧 ..... 25
- 第6表 石器出土一覧 ..... 26
- 第7表 カムイ窯須恵器観察一覧 ..... 30
- 第8表 白磁観察一覧 ..... 33
- 第9表 青磁観察一覧 ..... 37
- 第10表 青花観察一覧 ..... 44
- 第11表 褐釉陶器観察一覧 ..... 48
- 第12表 カンザシ観察一覧 ..... 50
- 第13表 沖縄産陶器観察一覧 ..... 55
- 第14表 陶質土器観察一覧 ..... 57
- 第15表 円盤状製品種類・大きさ別出土状況 ..... 60
- 第16表 円盤状製品計測一覧 ..... 61
- 第17表 錢貨観察一覧 ..... 65
- 第18表 魚骨出土一覧 ..... 70
- 第19表 ニワトリ骨出土一覧 ..... 70
- 第20表 ヒト骨出土一覧 ..... 70
- 第21表 イヌ骨出土一覧 ..... 70
- 第22表 イヌ歯牙出土一覧 ..... 70
- 第23表 ウマ骨出土一覧 ..... 70
- 第24表 ブタ骨出土一覧 ..... 71
- 第25表 ブタ歯牙出土一覧 ..... 72
- 第26表 ウシ骨出土一覧 ..... 72
- 第27表 ウシ歯牙出土一覧 ..... 72
- 第28表 ヤギ骨出土一覧 ..... 70
- 第29表 ヤギ歯牙出土一覧 ..... 70
- 第30表 貝類出土一覧 ..... 74

## 図版目次

- 図版1 上：北より遺跡を望む（中央の円形部が調査地区）  
下：調査地区の全景（右上の建物は讃名の納骨堂）
- 図版2 上：発掘調査風景（表土剥ぎの状況）  
中：〃（遺物包含層の露出状況）  
下：〃（遺構露出状況）
- 図版3 上：6ラインの層序と土留め状遺構の露出状況  
中：おー4グリッド層序の近景  
下：集石遺構と土留め状遺構
- 図版4 上：集石・土留め状遺構の半裁全景  
中：〃の半裁状況  
下：〃の完掘状況  
(地山にピットが露出)
- 図版5 上：土留め状遺構の全景（東側より）  
中：溝跡の断面状況と土留め状遺構  
下：帶状遺構の近景
- 図版6 上：遺構完掘状況（北西側より）  
下：〃（北東側より）
- 図版7 上：土留め状遺構と出土遺物  
中：後期土器と牛骨出土状況  
下：石器（用途不明品）出土状況
- 図版8 土器
- 図版9 石器
- 図版10 石器
- 図版11 石器
- 図版12 カムィ窯須恵器
- 図版13 白磁
- 図版14 青磁
- 図版15 青磁
- 図版16 青磁
- 図版17 青花、天目
- 図版18 褐釉陶器、高麗系瓦、タイ産土器
- 図版19 鉄鏃、鉄釘、カンザシ、煙管
- 図版20 施釉陶器

- 図版21 無釉陶器  
陶質土器
- 図版22 円盤状製品
- 図版23 円盤状製品
- 図版24 錢貨
- 図版25 土製品
- 図版26 獣・魚骨類
- 図版27 〃
- 図版28 〃
- 図版29 〃
- 図版30 貝類



第1図 那覇市の位置



# 第Ⅰ章 調査に至るまでの経緯

## 第1節 調査に至るまでの経緯

本遺跡は昭和31年5月20日に多和田真淳氏によって発見された遺跡で、「祝部式土器と越来城跡と共に赤土器が出土する遺跡」と紹介されている周知の遺跡<sup>#1</sup>である。「祝部式土器とは現行のカムイ窯須恵器で越来城跡の赤土器とはグスク土器」に該当するものと思われる。

さて、那覇市水道局では、那覇市識名一帯の高台において安定した給水を行うために配水池施設の建設工事の計画を行った。同計画の段階で、那覇市真地の建設工事地内において埋蔵文化財の有無について平成4年9月30日付けで照会がなされた。

当教育委員会では当該地域については、周知の埋蔵文化財「識名シーマ御嶽遺跡」が近接しており、試掘調査が必要であるとの回答を行った。その後調整の結果、平成4年11月25日に試掘調査を実施した。

試掘調査は当教育委員会が主体になり、建設工事予定地内（約600m<sup>2</sup>）を対象にバックホーを用いて6本トレンチ掘りを行った。その結果、当該予定地内においてグスク時代の遺物包含層が検出され、本遺跡がかなり広範囲に及んでいることが確認された。

当教育委員会は試掘調査の結果を踏まえて、那覇市水道局と埋蔵文化財「識名シーマ御嶽遺跡」について、速やかに協議を行った。協議の結果、工事計画の変更は極めて困難であり、やむを得ず記録保存の措置をとることになった。

その後、那覇市水道局は平成5年9月10日付けで文化庁長官に文化財保護法第57条の3の規定に基づき「埋蔵文化財発掘通知」を提出した。

これについて当教育委員会は文化庁の指導により、同年10月1日付けで「工事着手前に発掘調査を実施」するように送付通知した。

その結果、調査に要する経費は那覇市水道局が負担し、調査を当教育委員会が委託により実施することになった。

調査は平成5年10月18日より開始された。

## 第2節 調査体制及び成果の記録

### (1) 調査体制

発掘調査及び報告書作成は次の体制により実施された。

事業主体	那覇市教育委員会	教育長	嘉手納 是 敏
事業所管	文化課	課 長	高江洲 隆（平成5～7年度）
	〃	〃	金 正 紀（平成8年度）
調査総括	〃	主 幹	金 正 紀（平成5～7年度）
事業事務	〃	主幹兼係長	古 塚 達 朗（平成8年度）
〃	〃	係 長	新 城 和 範（平成4・5年度）
〃	〃	〃	仲 間 健 幸（平成6年度）

事業事務 那覇市教育委員会 文化課 係長 佐久川 馨 (平成7・8年度)  
〃 〃 〃 主任主事 手登根 朗 (平成5年度)  
〃 〃 〃 我那霸 生男 (平成6~8年度)  
〃 〃 〃 主事 當銘 優子 (平成5~8年度)

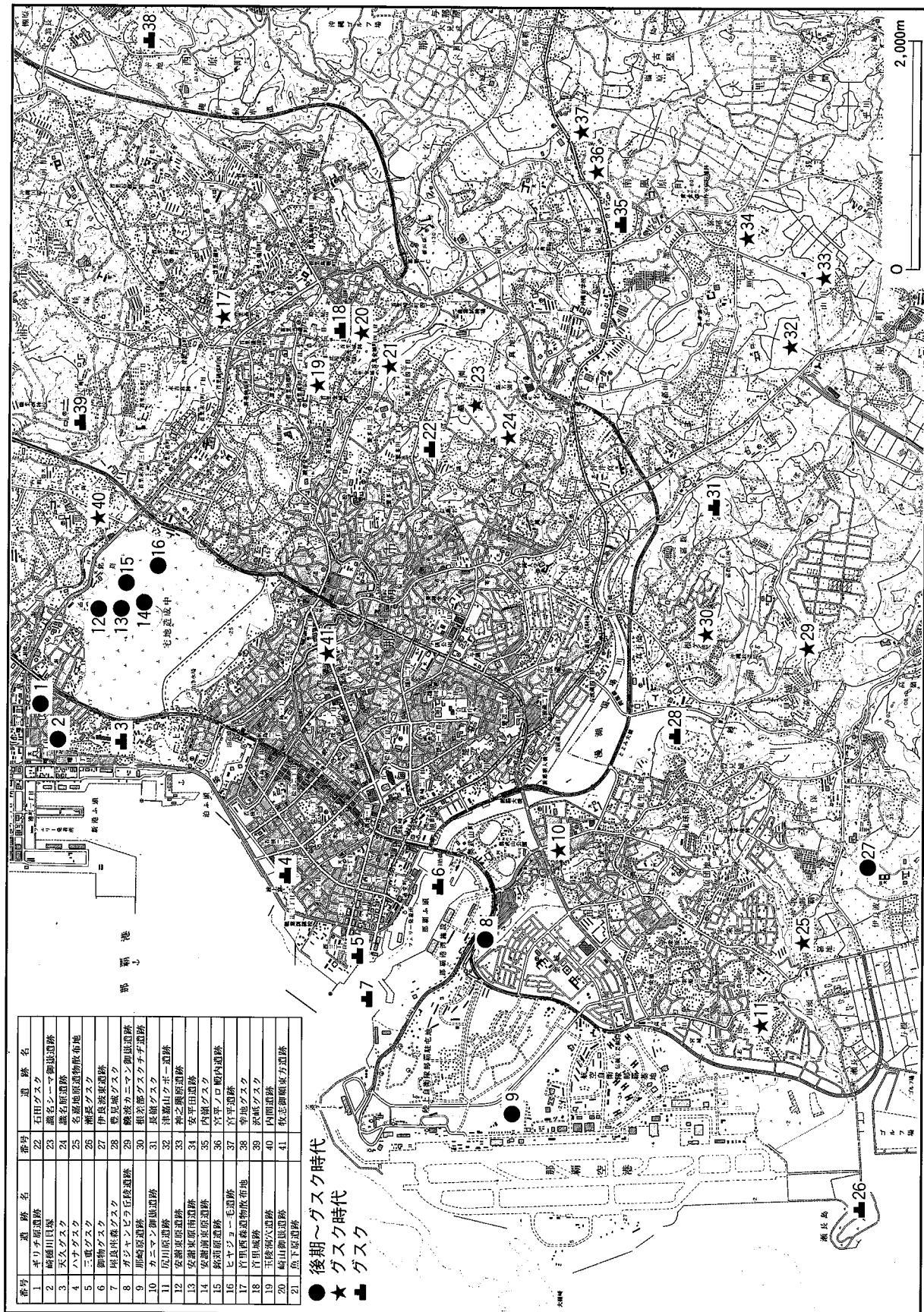
調査員 〃 〃 主事 島 弘  
〃 〃 〃 内間 靖  
〃 〃 〃 玉城 安明  
〃 〃 〃 仲宗根 啓

(2) 発掘調査作業員

赤嶺行助・赤嶺春美・運天政善・運天文子・運天美和子・運天秀子  
金城文・金城みさき・島袋幸江・富永富士子・比嘉貞雄・真志喜朝寛  
宮平良子・諸見里ふみ子・屋比久和子

(3) 成果の記録（資料整理及び協力者）

洗浄・注記・接合 : 浦崎順子・金城由美子  
実測 : 城間千栄子・宮良文子・慶田秀美・伊良波房子・浦崎順子・金城由美子  
拓本・トレース等 : 宮良文子・上原富士子・西銘定子・真栄城めぐみ  
撮影・現像・焼付 : 金武正紀・栗山初美・赤嶺知子・野村知子・津波古清美・富山維佐子



第2図 那覇市及び周辺の後期～グスク時代の主要な遺跡



第3図 識名シーマ御嶽遺跡の位置（赤：今回の調査地区  
黒：1982年の遺跡の範囲）

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

識名シーマ御嶽遺跡は、1956年（昭和31年）多和田真淳氏によって発見された遺跡で、沖縄県那覇市に所在する。那覇市は東中国海に面した沖縄本島南西部にあり、北に浦添市、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城村と隣接する県内人口の約1/4（301,928人）を擁する沖縄の政治・経済の中心都市である（第1図）。

本市は、ほぼ略三角形を呈し東西に約11km、南北に約8kmを測り、総面積37.81km<sup>2</sup>を占める。地形的には、東中国海側の市街地の標高2～10mの沖積地を琉球石灰岩の台地が取りまく。北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地・小禄台地が取りまき大きく低地と石灰岩台地の2つに分けられる。また、市内には台地より安謝川・久茂地川・国場川等が東中国海に流れ込む。市内は首里地区・那覇地区・真和志地区・小禄地区の4地区に大きく分けられる。

真和志地区はその国場川右岸に展開する地域である。識名一帯は、その真和志地区のほぼ南東部に位置する。一帯は識名台地が展開する。識名台地は那覇港に向いて舌状に延びる地形を呈している。遺跡はその中央部に占地し、周辺には識名靈園が展開する。

遺跡はその靈園内に立地する。丘陵の西方前方には那覇港が展開し、さらに西方洋上には慶良間諸島が眺望できる。北には首里城跡を頂点とした首里台地が展開する。南側は南部の丘陵地帯が一望できる景勝地に立地する。

このような自然環境は、識名シーマ御嶽の人々に自然の恵みや外来からの情報、文物を大いにもたらしたものと考える。

ところで、識名周辺の遺跡分布は石灰岩との関係で、縄文時代の遺跡が数多く点在し旧石器～近世までの遺跡が幅広く立地している。その延長線上に識名シーマ御嶽遺跡が展開していたものと考える。

### 〈参考文献〉

- 多和田真淳「琉球列島の貝塚文化と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府 文化財保護委員会  
1956年  
『統計那覇』No.102 那覇市 1996年 2月  
『あけもどろの都市への道しるべ』第2次総合計画 那覇市 1988年  
上原静・太田宏好他『那覇市の遺跡』 那覇市教育委員会 1982年 3月

## 第Ⅲ章 調査経過

本遺跡の発掘調査は1993年10月18日から翌年の1月31日までの約4ヶ月行った。調査は周辺に広がる雑草・雑木などの伐採作業より開始した。

伐採終了後に、調査区全体にグリッド設定を行った。グリッドは、磁北に沿って基準線を設け4×4mを単位とした方眼を組んだ。東西軸を北側より五十音のあ・い・う……南北軸は東より算用数字の1・2・3……と付し、グリッド読みは南西隅の交点「おー5、おー6……」と呼称した。

調査は、おラインと6ラインに土層観察用の畦を残し、「かー7・かー9・かー11」の3グリッドよ

り開始した。ところが、表土層の発掘を進めると本層が戦後の客土として調査区全面に厚く覆っていることが確認された。そのため、急遽バックホーを用いて表土層の除去を実施した。

その後、第Ⅱ層（旧表土）より本格的に発掘調査を開始した。本層を掘り進めるうち「おー7グリッド」において集石遺構が露出し始めた、調査は本遺構を追うかたちで徐々に北西側と東側へ拡げていった。合わせて第Ⅲ層（遺物包含層）の発掘も行った。その結果、調査区全体に土留め状遺構・集石遺構・ピット群等の各種遺構が遍在的に確認された。それらの遺構群はそれぞれ有機的な繋がりを持つものと思われた。遺構・遺物については第Ⅳ・V章で詳細に記述する。

その後、遺物包含層・遺構群を完掘後、全体の写真撮影・地形測量・細部測量等を繰り返し、1月31日にすべての発掘調査を完了した。

## 第Ⅳ章 層序と遺構

### 第1節 層序

遺跡一帯は、戦後米軍によって整地され、さらに識名靈園建築工事等により造成されており、当該地区の往時の姿は不明である。周辺の地形・地山等から推定すると北西側に立地する納骨堂あたりが高く、そこから周辺へ緩やかに下がる地形を呈していたものと思われた。

さて、確認された層序は基本的に第Ⅰ層（客土層）・第Ⅱ層（混レキ層）・第Ⅲ層（遺物包含層）・第Ⅳ層（遺物包含層）・第Ⅴ層（いわゆる地山）の5枚が見られた。以下、個々の土層について記述する。土層の側壁図は東西のおラインと、南北の6ラインを掲載した。

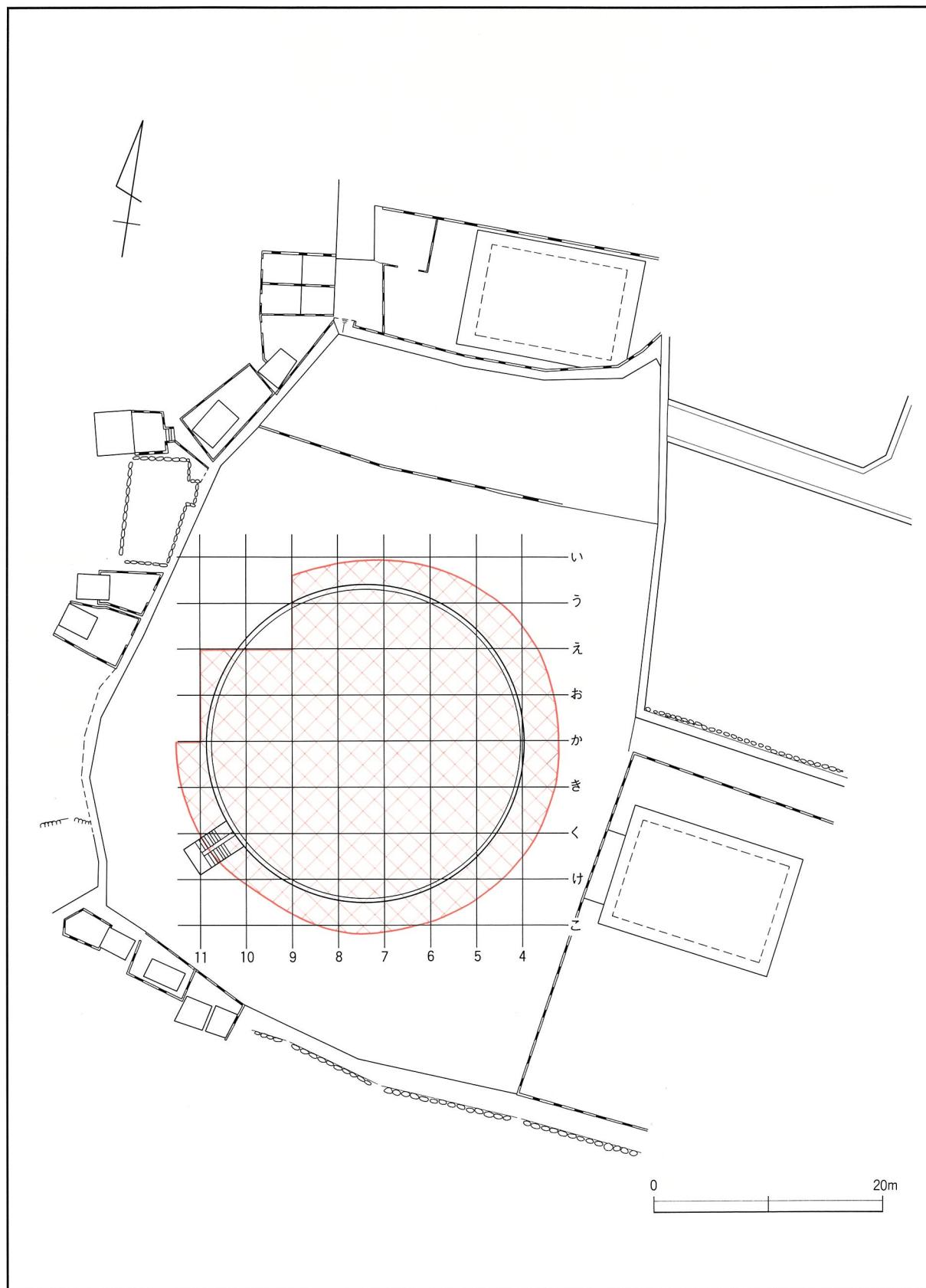
**第Ⅰ層：**表層に腐食土が堆積するが全体に灰褐色土層（方言名クチャ）で戦後の客土層である。本層は調査区全体を覆い、西側で厚く（約50cmを測る）、東側へ暫時薄くなる。本層からは、近・現代の遺物が得られた。

**第Ⅱ層：**淡い茶褐色混礫土層で、層厚約30cmを測り、第Ⅰ層同様に調査区全体を覆う形で堆積が見られた。本層の特徴は琉球石灰岩の小石を多量に含むことが挙げられる。遺物はグスク時代～近世の遺物が混在して得られ、戦前の旧表土（畑地）と考えられた。

**第Ⅲ層：**第Ⅱ層の下位に広がる暗褐色土層で層厚約20cmを測る。グスク時代の包含層である。北東側では薄く北西側で安定的に厚く堆積する状況であった。本層では出土遺物によってⅢ層（上層）とⅢa層（下層）に細分される。Ⅲ層は第Ⅱ層と接するため搅乱が見られたが、Ⅲa層はその下位に広がる未搅乱層である。

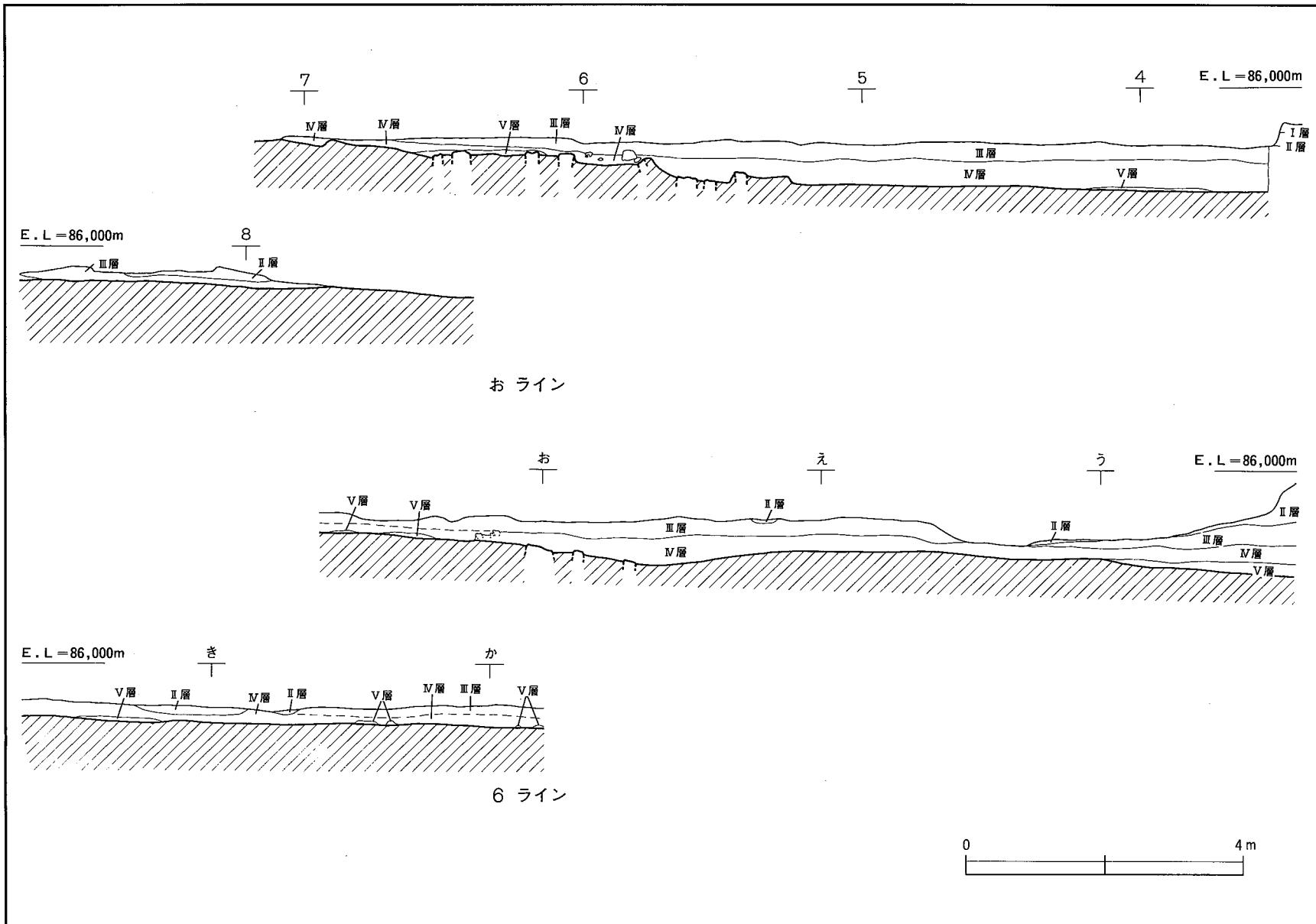
**第Ⅳ層：**本遺跡の最下層で淡い茶褐色を呈する粘質土層である。本層も南側で薄く北東側「おー6グリッド周辺」で顕著に確認された。本層からの出土遺物は僅かで、土器類が殆どであった。第Ⅲ・Ⅳ層とも南西側の調査区外に延びる状況であった。

第V層：赤褐色土層（方言名、鳥尻マージ）で無遺物層である。本層に柱穴痕・集石・石列等の各種の遺構が確認された。



第4図 グリッド設定及び発掘調査地区

第5図 層序断面図



## 第2節 遺構

遺構は第Ⅱ層を完掘後、第Ⅲ層より石列遺構（土留め状遺構）が露出し始め、それに伴うかたちで次々と集石遺構・ピット群・溝遺構等が検出された。調査区全体は南西～南側に平坦面が広がり、弧状に延びる石列遺構を境に北西側は一段下がる地形を呈していた。それらの地形は遺構の形成時期に造成されたものと考えられた。平坦面にはピット群が見られ、一段下がる縁部には石列遺構を土留め状に巡らしたと思われた。それらの遺構の位置関係は、下図の遺構配置図に示したとおりである。

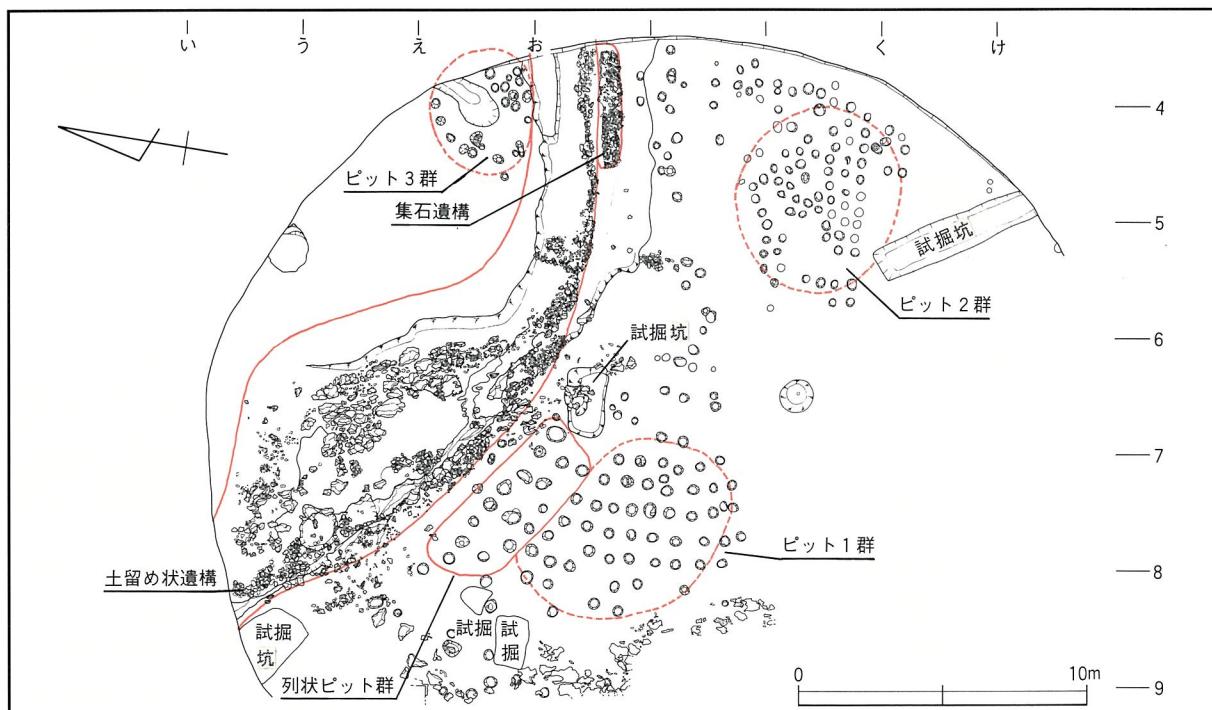
以下、土留め状遺構より略述する。

### （土留め状遺構）

調査区北側の「うー8グリッド」から東側「かー4グリッド」にかけて「へ」の字状に検出された。本遺構は北側の琉球石灰岩の岩盤と東側の地山（第V層）を段状に削平し10cm～40cmの礫を用いて構築された遺構である。

石灰岩一帯の上部には小礫群の集中部が幅約80cmで縁石に沿って2ヶ所確認された。そのことより、上端部を帶状に巡らしていたものと推察された。また、その下端部においても2ヶ所の集中部と小規模の小礫群が3ヶ所見られた。それらは、石灰岩の自然の落ち込み等を埋め、平坦面に造成したものと解した。

一方、東側の地山ラインにおいては、立ち上がりに20～30cmの人頭大の礫を主に用いて2～3個を積み上げ巡らしたものであった。その下位には土留め状遺構に沿って浅い溝を巡らし、溝底は略台形状を呈していた。また、弧状にカーブする「かー6グリッド」では溝を横断するかたちで帶状に礫群も確認された。



第6図 遺構配置図

### (集石遺構)

土留め状遺構の東側上端部において検出された。地山を隅丸方形と橢円形に約30cm掘り込み拳大の礫を詰め込んだ遺構である。集石の上面は東西に400cm、南北70cmを計り、ほぼ長方形を呈する。土留め状遺構に付隨するものと思われ、雨端状の遺構か踏み台状の遺構が想定された。

### (ピット群)

ピット群は大・小合わせて約400近く確認された。その中で、特に調査区の北西側に位置する「かー8グリッド」周辺部と南東側「きー5グリッド」、北東側「かー4グリッド」周辺部の3ヶ所で集中的に検出された。前2者は土留め状遺構の上段の平地に占地し、後者は下段の溝に接して確認された。それらをピット1群・ピット2群・ピット3群と呼称しそれぞれについて略述する。さらに、土留め状遺構に沿って前記したピット群とは性格を異にするピット群も確認された。列状ピット群として別個に述べる。以下、ピット1群より略述する。

#### ピット1群

ピット1群が検出された「かー8グリッド」周辺は調査区内でも高位に位置する地点である。ピット群は主軸を南北に持ち、その殆どが単独で検出され、重複した例は見られなかった。ピットは一様に円形を呈し、ほぼ80cmの等間隔で検出された。それらは4本（正方形）もしくは6本（長方形）の規格性が読み取れた。本遺構がいわゆる掘立柱住居跡なのか別の施設なのか今後の類例資料を待ち検討したい。

#### ピット2群

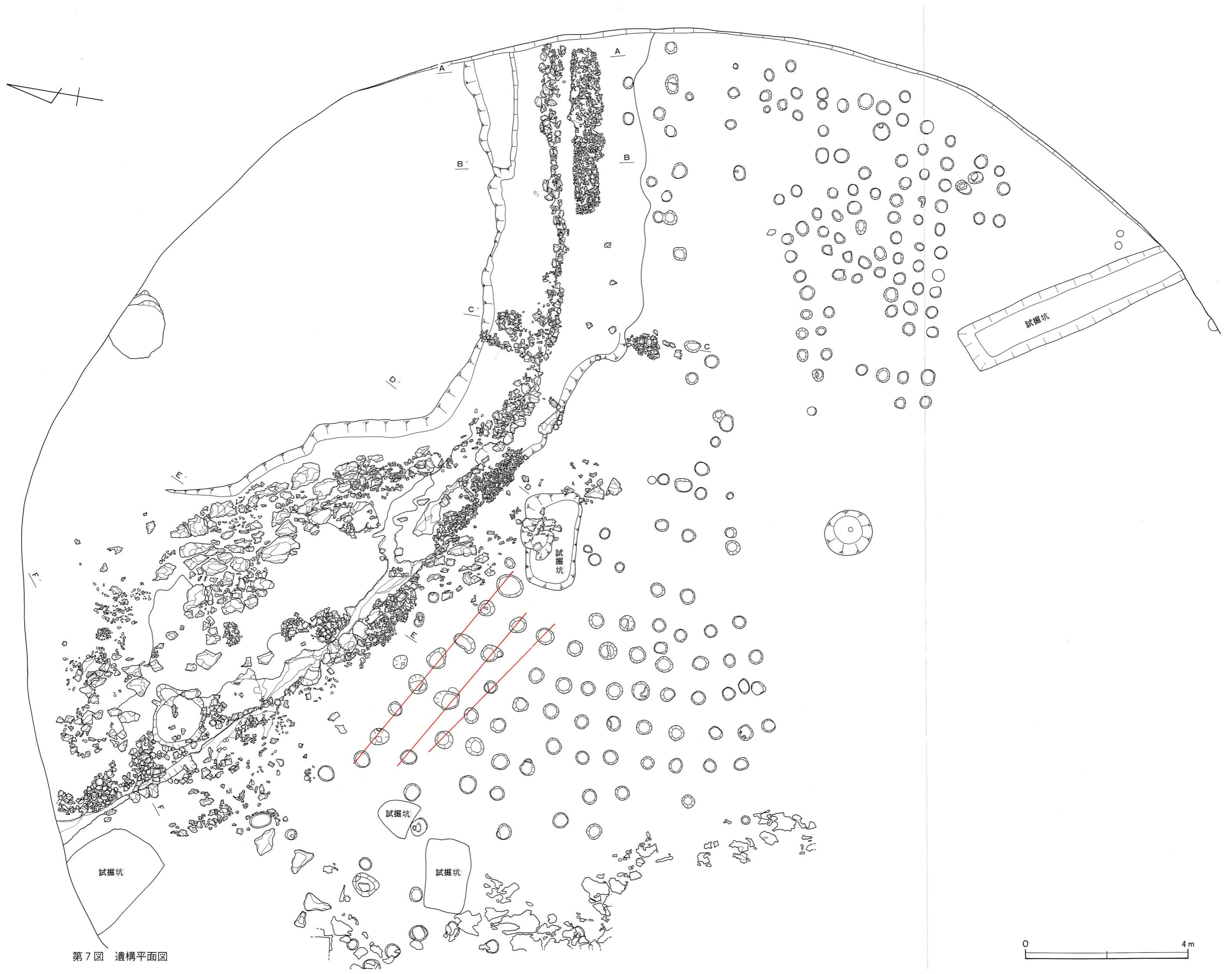
ピット2群の検出された「きー5グリッド」周辺はピット1群から南東側約5・6mに位置し、ピット1群との比高差で、やや下位に占地する。ピット2群は主軸を東西に持ち、ピット1群同様に主に単体で検出された。ピットはほぼ円形を呈し深さも浅く一定し、約50cmの等間隔で検出され、規格性が見られた。本遺構の性格もピット1群同様に今後資料の増加を待ちたい。

#### ピット3群

調査区の東側「かー4グリッド」周辺で土留め遺構の溝に接して検出された。ピット群は浅い鍋底状の溝状遺構を取り囲むかたちで見られた。全体のプラン等はピットが調査区外へ延びるため確認されなかった。ピット1・2群に比べると最下位に位置する。

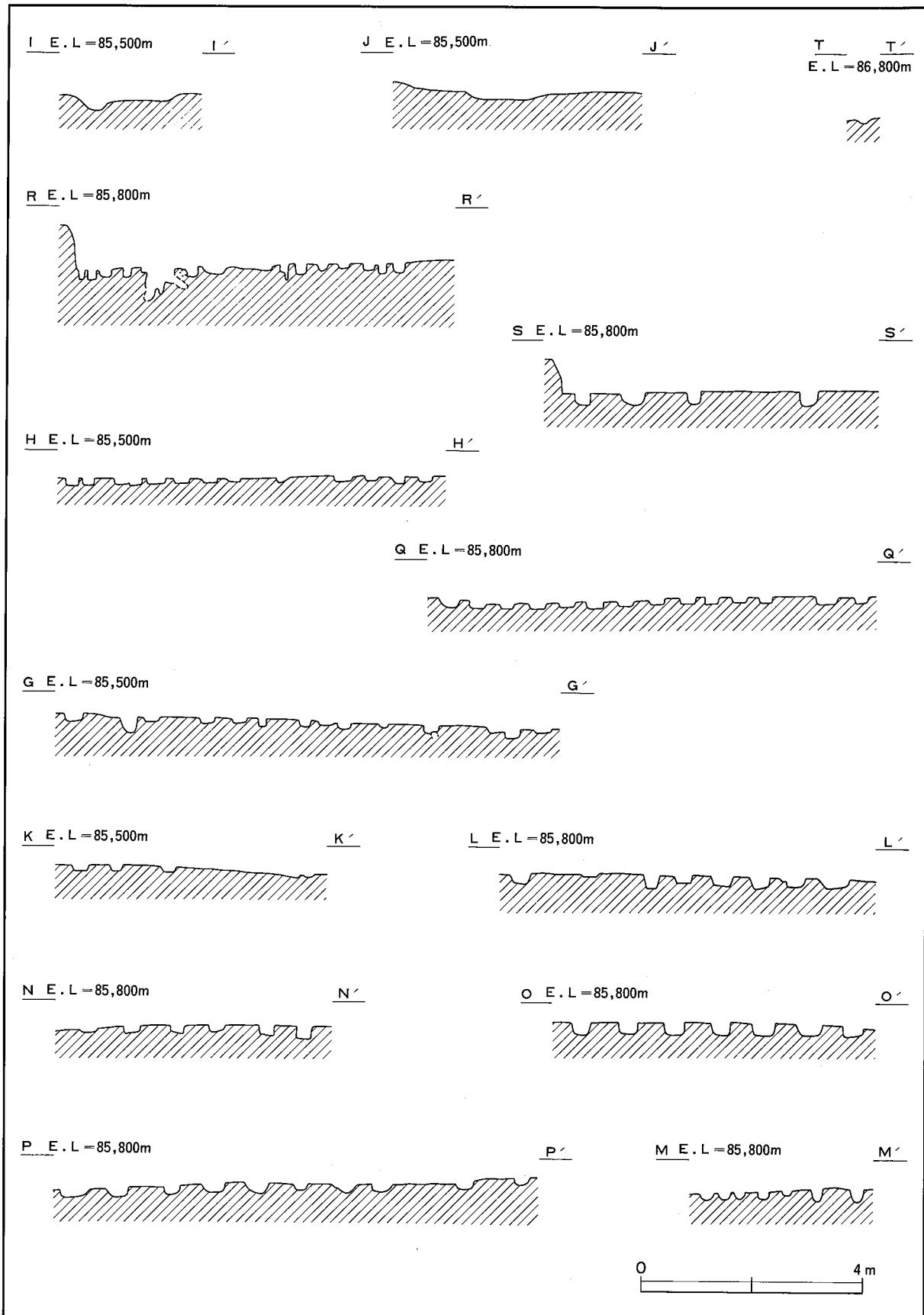
#### 列状ピット群

列状ピットは石灰岩一帯で確認されたものと、地山ラインで確認されたものが見られた。前者は土留め状遺構とピット1群の間に主軸を北西～南東にかけ3列確認された。ピット径は平均50cmを計りピット1群に比べると比較的大きなものであった。後者は土留め状遺構を除去後、溝縁から立ち上がりの地山面にかけて検出された。主軸は東北東～西南西でピットの径は約20cmを計り小振りのものであった。間隔も20～30cmを計り比較的密に検出された。前記の列状ピット群やピット1・2群よりは若干古い遺構と解した。

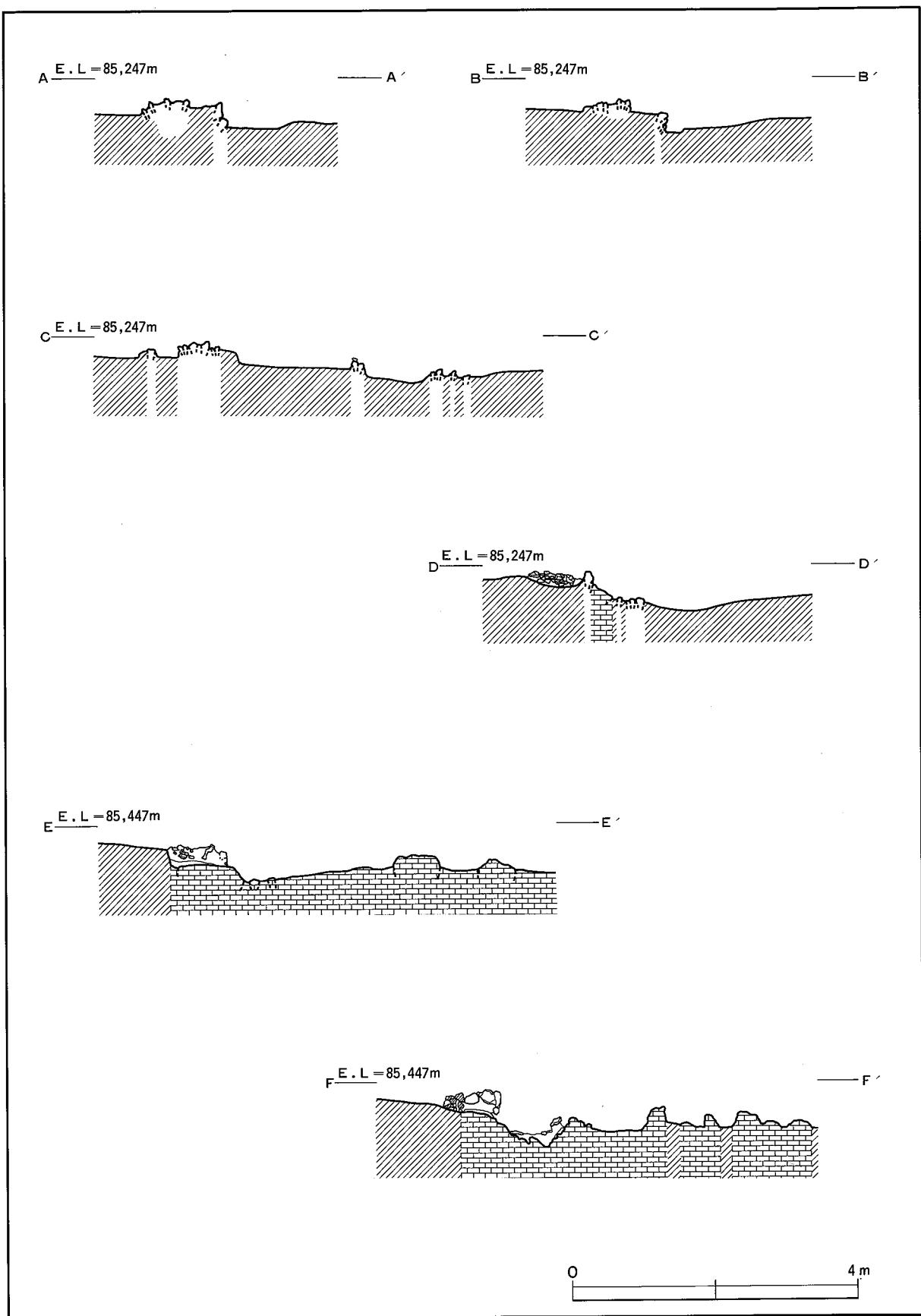




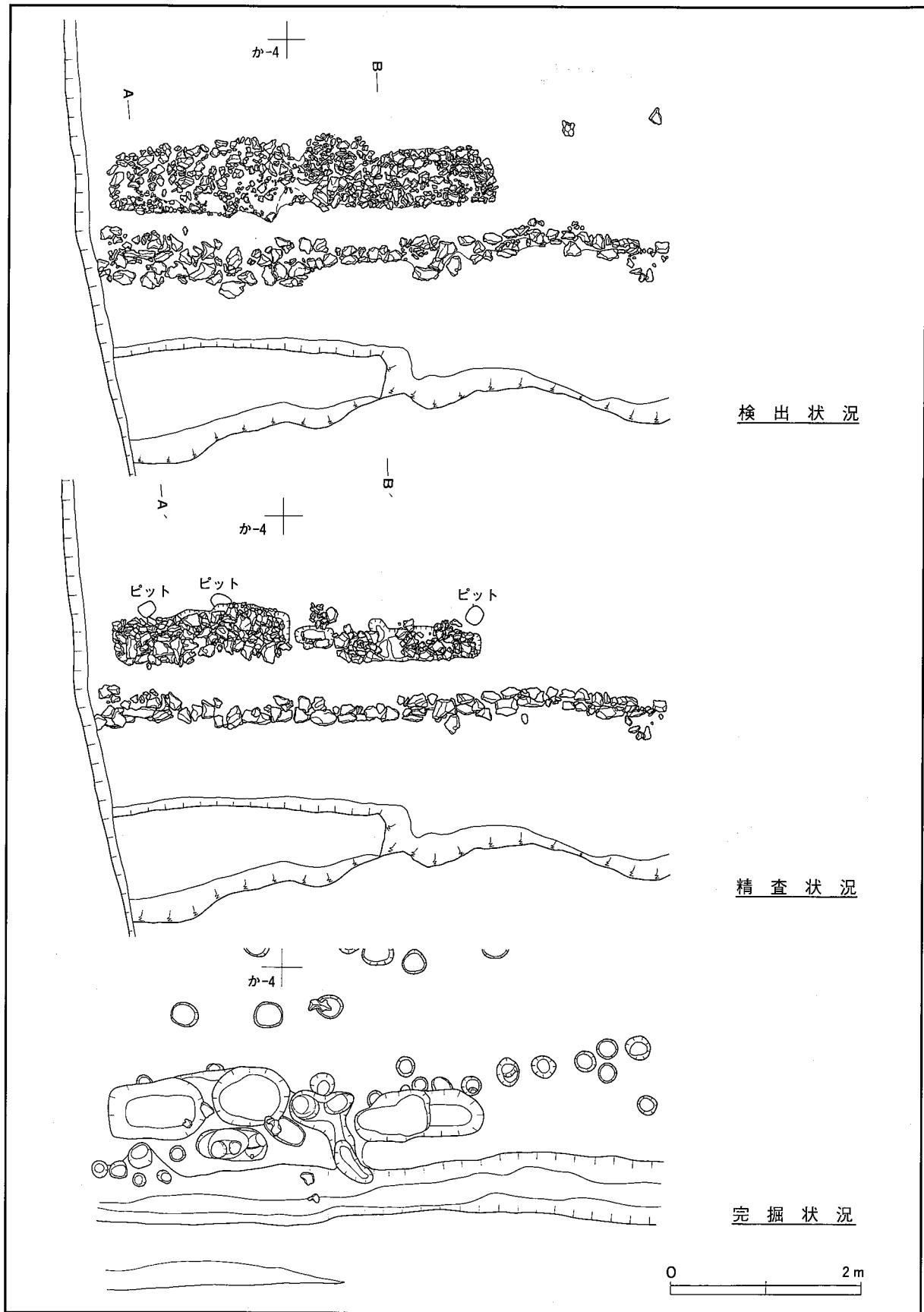
第8図 遺構平面図（完掘状況）



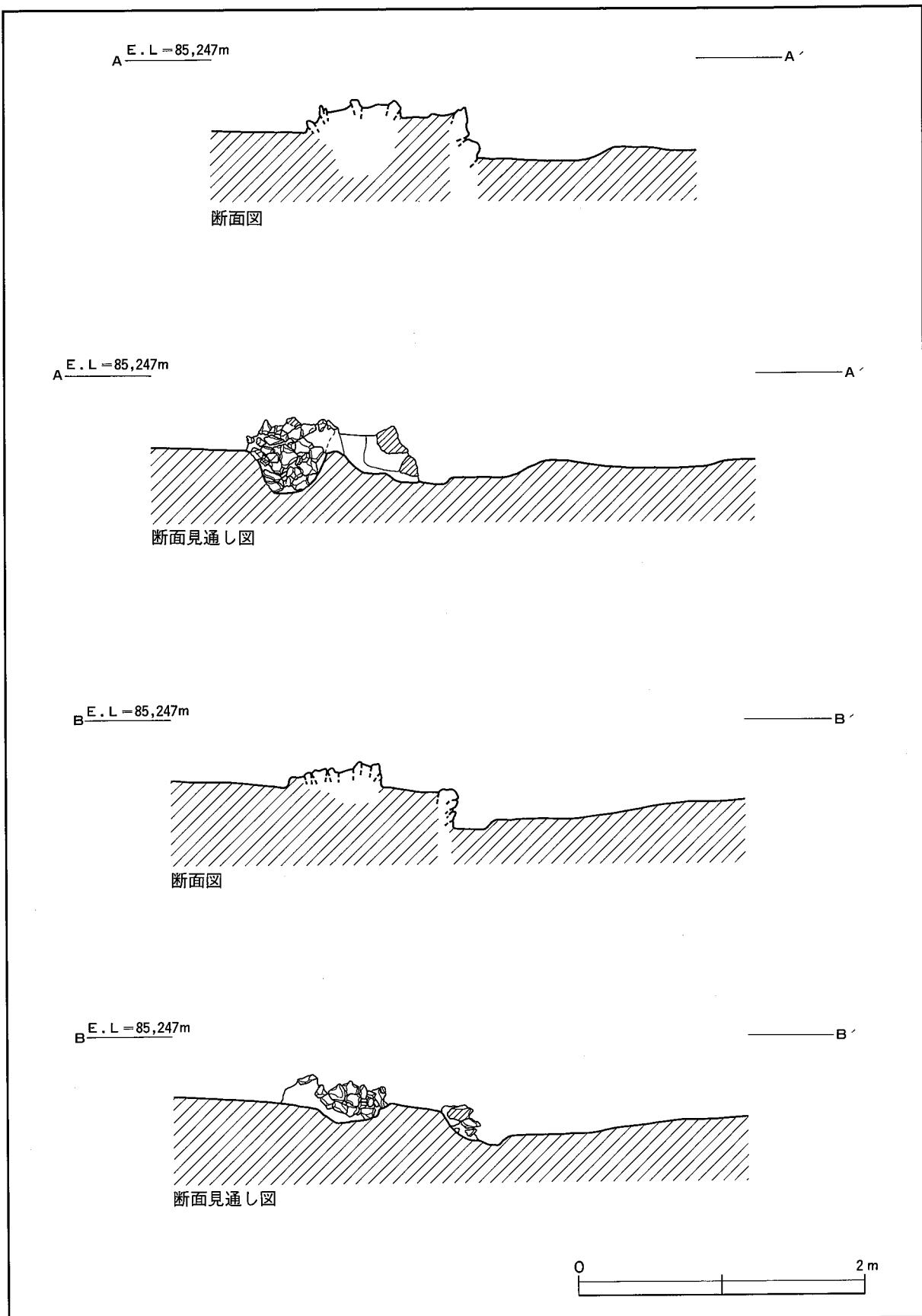
第9図 ピット断面図



第10図 土留め状遺構の断面図



第11図 集石遺構（変遷）



第12図 集石遺構の断面図

## 第V章 出土遺物

今回の調査で得られた遺物は人工遺物と自然遺物に大別される。その殆どが小破片で、出土量も他の当該期の遺跡等と比較しても少なかった。人工遺物は後期末～グスク時代に属する土器・石器・白磁・青磁等と沖縄産陶器を中心とする近世に比定される遺物等が各種得られた。

自然遺物も出土量が少なく、僅かに貝類と獸骨が見られた。

第1表 出土遺物一覧

種類 層序	土器	石器	須恵器	白磁	青磁	青花	天目	褐釉陶器	タイ産土器	高麗系瓦	金属製品	煙管	沖縄産 施釉陶器	無釉陶器	陶質土器	円盤状 陶器	土製品		羽口	本土産 陶磁器	綠釉陶器	白磁器 不明	合計			
																	製品	不明								
第I層	20	1	6	4	32	17		44			6	1	52	93	109	4		6	4	4	1	3	407			
第II層	80	9	27	12	181	54	1	136	1		8	2	141	100	197	9	2	8	3	7	1	4	983			
第III層	82	14	30	12	187	36	3	102		1		3	110	61	87	9		12	5		1	4	759			
第IIIa層	143	4	23	9	50	6		26					4	10	14	4	3	4	8			1	309			
第IIIa層溝	2	3	2	1	10	1		14									1						34			
第IV層	22				1																	2	25			
集石		1		1	1			1					1	2	1									8		
土留め状遺構	10	6	1		13	1	1	2						1		2							1	38		
砲跡									1					1	1										3	
不明	1					1									1											3
合計	360	38	89	39	475	116	5	326	1	1	14	6	309	268	409	29	5	30	20	11	3	15	2,569			

第2表 土器出土一覧

部位 層序	口縁部		胴部		底部		合計	
第I層				20				20
第II層				79		(1)		79 (1)
第III層		1		80		1		82
第IIIa層		4		137		2		143
第IIIa層溝				2				2
第IV層		1		20		1		22
土留め状遺構				8		(2)		8 (2)
不明				1				1
合計		6		347		4 (3)		357 (3)
		6		347		7		360

※ ( )は後期土器の集計

### a. 土 器

土器は第1・2表に示すように総数360点得られた。復元可能な土器は得られず、すべて小破片であった。その殆どがグスク時代に帰属するものである。その中で、沖縄新石器時代後期の土器も僅かに得られた。

以下、後期土器より述べる。掲載した資料の観察は第4表に示した。

#### 後期土器

第13図1・2に示したもので、かなり厚手の底部資料である。同図1は底面の先端部を押し潰されやや丸みを呈する。外面の立ち上がりには器面調整のための縦位擦痕が顕著に観察される。内面はナデ消し。同図2も同様な形状を示すが、前者に比較して小振りの觀がする。外面はナデ消しが施されている。両者とも混入物に滑らかな鉱物が散見できるが、滑石かどうか判然としない。その他に白色粒・赤色粒・石灰質砂粒等が観察される。

#### グスク土器

本遺跡の主体をなす土器群である。器種の知り得たものは、鍋形・壺形のみであった。その他は小破片の胴部片が殆どであった。

以下、鍋形より略述する。

#### 鍋形

第13図3～7に示したもので、すべて滑石混入土器である。3は、口縁部に長方形の扁平な縦耳を貼り付けたものである。4・5は口唇部を平坦に成形したもので、やや内湾状に立ち上げる。前者は口唇部から3.5cm下位に長径0.6cmの二次穿孔が施されている。6・7はやや内湾ぎみに立ち上がる底部資料である。

#### 壺形

同図8・9に示したもので、いずれも口唇部を欠失した頸部付近の資料である。淡い橙褐色を呈し、赤色粒やポーラスが観察される典型的なグスク土器である。8は頸部の内部より粘土帯を積み上げた痕が観察できる。

#### 底部

同図10は鋭角に開きぎみに立ち上がるものである。底面に葉痕らしきものが観察されるが、判然としない。どの器種の底部に該当するか不明なものである。

### 胴部

第3表に示したとおり総数347点得られた。これらを胎土・混入物・色調等で、下記のとおりに分けた。

#### I種 滑石を用いたもの

- a : 手触りが滑らかなもの
- b : 手触りがザラザラするもの

#### II種 滑石を用いないもの

- a : 砂質で鉱物質の混入物を多く含み、手触りがザラザラするもの
- b : 泥質で鉱物質の混入物が少なく、手触りがザラザラするもの
- c : 泥質で手触りが滑らかなもの
- d : ポーラスが見られるもの

第3表に示したとおり、II種が主体であることが理解できる。II種b・c・dは概ね淡い橙褐色を呈し、赤色粒が顕著に観察される。特に、IIc・dのものが卓越している。IIaは暗褐色を呈し、石灰質砂粒・石英等を含む。量的には少ないが下層で得られており、グスク土器の中でもやや古手の土器群のようである。

I種の滑石混入土器はaタイプが一般的に知られており、本遺跡でbタイプが確認されたのは新知見かと考える。今後、資料の追加を待ち検討したい。

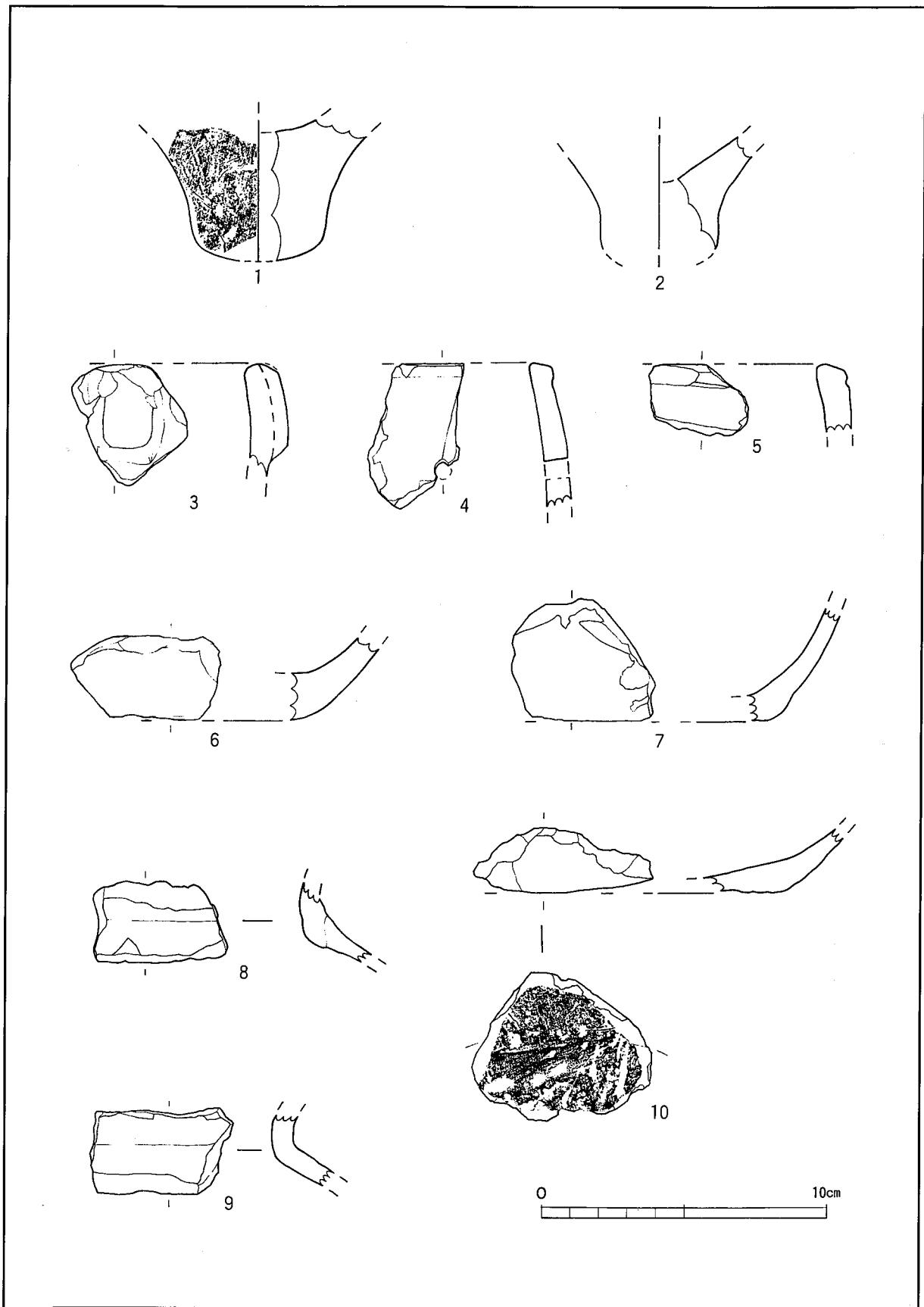
第3表 土器分類表（胴部）

分類 層序	I種 滑石を用いたもの		II種 滑石を用いないもの				合計
	a	b	a	b	c	d	
第Ⅰ層		1	1	5	10	3	20
第Ⅱ層	1	1	12	15	33	17	79
第Ⅲ層	4	2	9	17	26	22	80
第Ⅲa層	11	2	20	15	42	47	137
第Ⅲa層溝					1	1	2
第Ⅳ層		1	13	2		4	20
土留め状遺構				1	4	3	8
不明			1				1
合計	16	7	56	55	116	97	347

第4表 土器観察一覧

(cm)

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	法 量				形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	混入物
				口径	器壁	底厚	底径						
第13図 1 図版8の1	か-7 II	底部				4.6	4.7	底面より丸みを持ちながら立ち上げる。	外面縦位に擦痕。内面ナデ消し。	泥質 精製	やや硬質	淡橙褐色 灰褐色 赤褐色	白色粒 茶色粒 石灰質砂粒
〃 2 〃 2	土留め状遺構	ク		0.9	3.0	4.2		上記1よりは小振りなつくり。	内外面ともナデ消し。	ク	ク	赤褐色 コゲ茶	〃 ガラス質鉱物・滑石
〃 3 〃 3	き-4 III a	鍋		0.6				扁平な縦位耳を貼り付ける。	ク ややザラザラする。	ク	ク	赤褐色 コゲ茶 灰赤褐色	〃
〃 4 〃 4	え-5 III a	ク		0.9				口唇部を平坦に成形。	ク	ク	ク	灰褐色 淡茶褐色	〃
〃 5 〃 5	ク ク	ク		0.9					ク	ク	ク	コゲ茶 淡茶褐色	滑石を多量に含む。 赤色粒
〃 6 〃 6	お-6 III a	ク				1.6		底面立ち上がりを厚手に成形。	ヘラ削り。 手触りザラザラする。	ク	ク	淡茶褐色 コゲ茶 淡茶褐色	ガラス質の 鉱物・滑石 少量。
〃 7 〃 7	え-5 III a	ク						内湾ぎみに立ち上げる。	ヘラ削り。 手触り滑らか。	ク	ク	淡茶褐色 灰褐色 淡茶褐色	滑石を多量に混入。
〃 8 〃 8	お-4 III a	壺						くの字に折り曲げる。	ク	ク	ク	淡橙褐色	赤色粒 石灰質砂粒
〃 9 〃 9	え-5 III	ク		0.7					ク 手触りザラザラする。	ク	硬質	淡黄褐色 淡橙褐色	〃 ガラス質鉱物
〃 10 〃 10	う-7 III a	底部		0.5				底面から開きぎみに立ち上がる。	ヘラ削り。	ク	ク	淡黄褐色	



第13図（図版8）土器：後期土器（1・2）、グスク土器（3～10）

## b. 石 器

今回の調査で得られた石器は、石斧 7 点・すり石 13 点・不明 6 点、軽石製の石器 2 点等が得られた。その他に、黒曜石・チャートの剝片が見られた。それらの出土状況、石質・法量等は第 6 表に示した。以下、器種別に略述する。

### 石 斧

第14図 1～3 に示したものである。1 は丁寧に刃部を研磨し鋭い刃先を研ぎ出した資料である。側面も細かい敲打痕によって調整が施されたものである。縦割れの資料かと思われる。2 は基部のほぼ中央で横折れした資料で刃部面を欠くものである。平面形は長方形で横断面を隅丸長方形を呈する。縦断面を表裏面ともやや直に調整を施すが、頭部裏面をやや弧状に整形。両側面とも敲打調整が施されている。3 は全形を窺える資料でバチ形の石斧で、刃部は 2 次使用によって潰れが見られる。全体に敲き調整が施されている。

### すり石

第15図 1～4 に示したもので、すべて破損品である。1～3 は重量感のある石材を用いたものである。1 は破損面以外はすべてすり面が観察される。特に、表裏面はかなり使用されたものと思われ、側面で稜線を作りだす。2 は大ぶりなもので表面にすり面が残り、端部は敲きの使用痕が顕著に観察できる。3 も破損面以外はすり面が見られ、裏面には凹部が観察されくぼみ石に用いられたことが窺える資料である。本資料は前 2 者とは形態が異なり方柱状を呈する。4 は扁平な長楕円形を呈する資料で、すり面が表裏面において観察できる。

### 用途不明品

第15図 5 に示したもので、全体に扁平で長楕円形を呈する資料である。表面にすり面、裏面破損面(割り面)、周辺は打割により調整されたものである。また、表裏面にコゲ茶色の帶痕(?)が楕円形に見られる。使用痕なのか自然のものなのか判然としない。興味深い資料で今後の資料の増加を待ちたい。その後、神谷厚昭氏より「自然のものとは考え難い」との教示を得た。

### 軽石製品

第14図 4・5 に示した 2 点が得られた。4 は内外面に加工痕が見られ、現状から推すると円筒状になるものと思われる。本標品については、神谷厚昭氏より「軽石にスラグが付着したものではないか?」との教示を頂いた。土製の羽口も得られており、鉄関連の資料として今後留意する資料かと考える。5 はすり痕により多面体を有するもので、概ね略三角形を呈する。用途については、今後の資料の増加を待ちたい。

### 滑石製品

第16図 1・2 に示した。同図 1 は内・外面に研磨が施された厚手のもので、淡い藤紫色を呈している。石鍋の破片を 2 次加工したものと思われる。重さ 43.3g を計る。集石遺構より出土。

同図 2 の資料は灰褐色を呈したもので、方形の摘み部と円形の身の部分と成る標品である。摘み部

には孔が穿たれている。本標品はいわゆる「バレン状製品」<sup>註2</sup>と呼ばれているものである。重さ15.6gを計る。おー5、第Ⅲa層より出土。

#### 円形石器

第16図3に示したものである。側面を敲打調整により円形に作りだした薄手のものである。表面は僅かに研磨痕が残り、裏面は全体に剥離面が観察される。2次転用品かと考えられる。重さ19.3gを計る。きー7、第Ⅲa層より出土。

#### 黒曜石

第16図4に示したもので、裏面に自然面を残したものである。断面三角状を呈し、周辺に僅かに細かいチッピングが観察される。重さ0.9gを計る。きー5、第Ⅲ層より出土。

#### チャート製品

第16図5・6に示した。前者は平面形をやや台形状に断面楔状に成形したものである。下端部に細かいチッピングを施し刃部をつくりだしている。重さ3.5gを計る。かー6、第Ⅲ層より出土。後者は6面体を持つ立方形を呈したもので、重さ12.0gを計り、石核と考えられるものである。えー5、第Ⅲa層より出土。

#### 化石サメ歯製品

第16図7に示したもので、歯根部を弧状に成形し、多方面から研磨を施したものである。

第5表 石器集計一覧

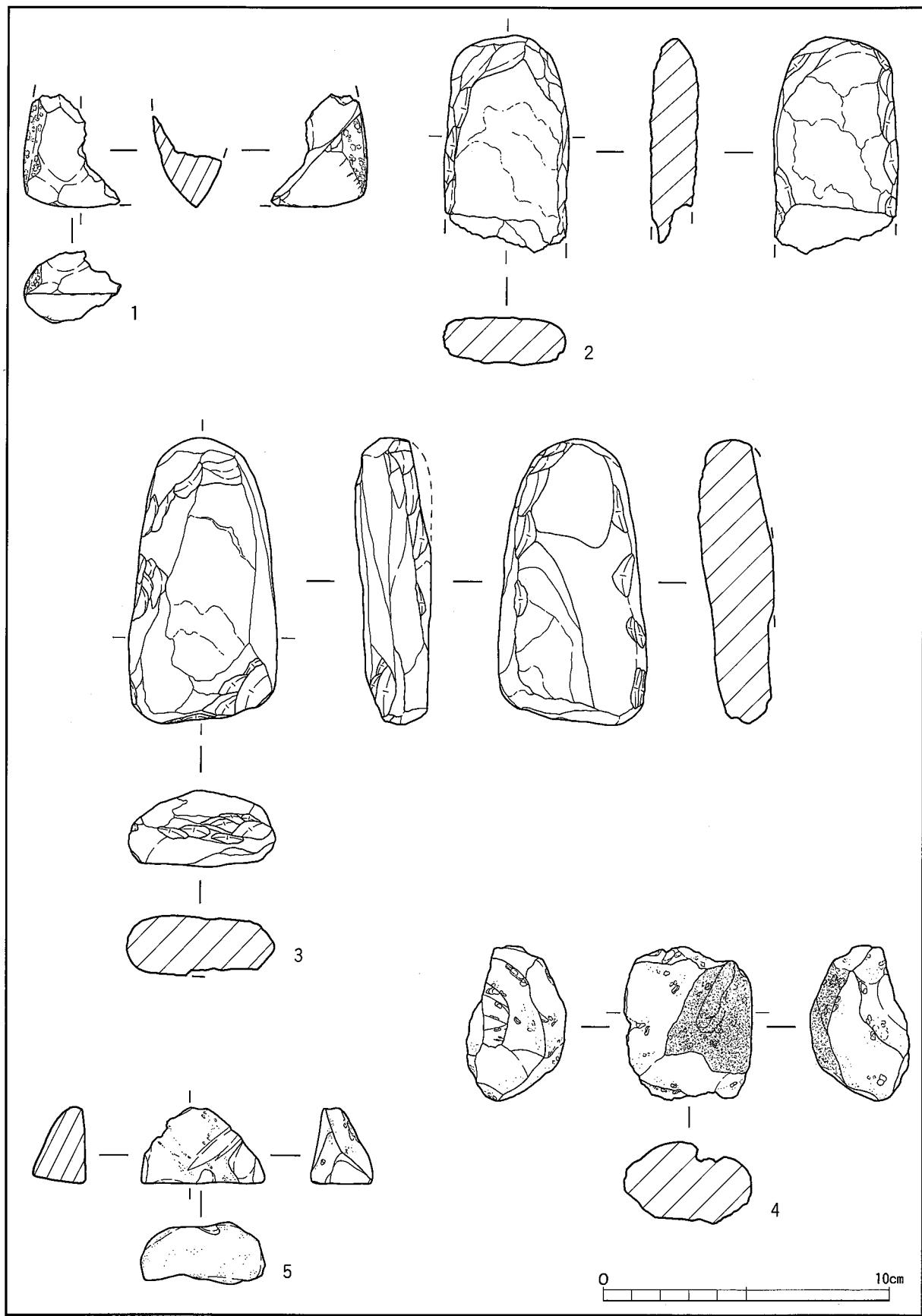
器種 層序	石斧	すり石	軽石	滑石	円形石器	黒曜石	チャート	化石	器種不明	合計
第Ⅰ層	1									1
第Ⅱ層	2	1		1			2	1	2	9
第Ⅲ層		7	2			1	1		3	14
第Ⅲa層	1			1	1		1			4
第Ⅲa層溝	1	2								3
集石				1						1
土留め状遺構	2	3							1	6
合計	7	13	2	3	1	1	4	1	6	38

※滑石にはバレン状製品を含む。

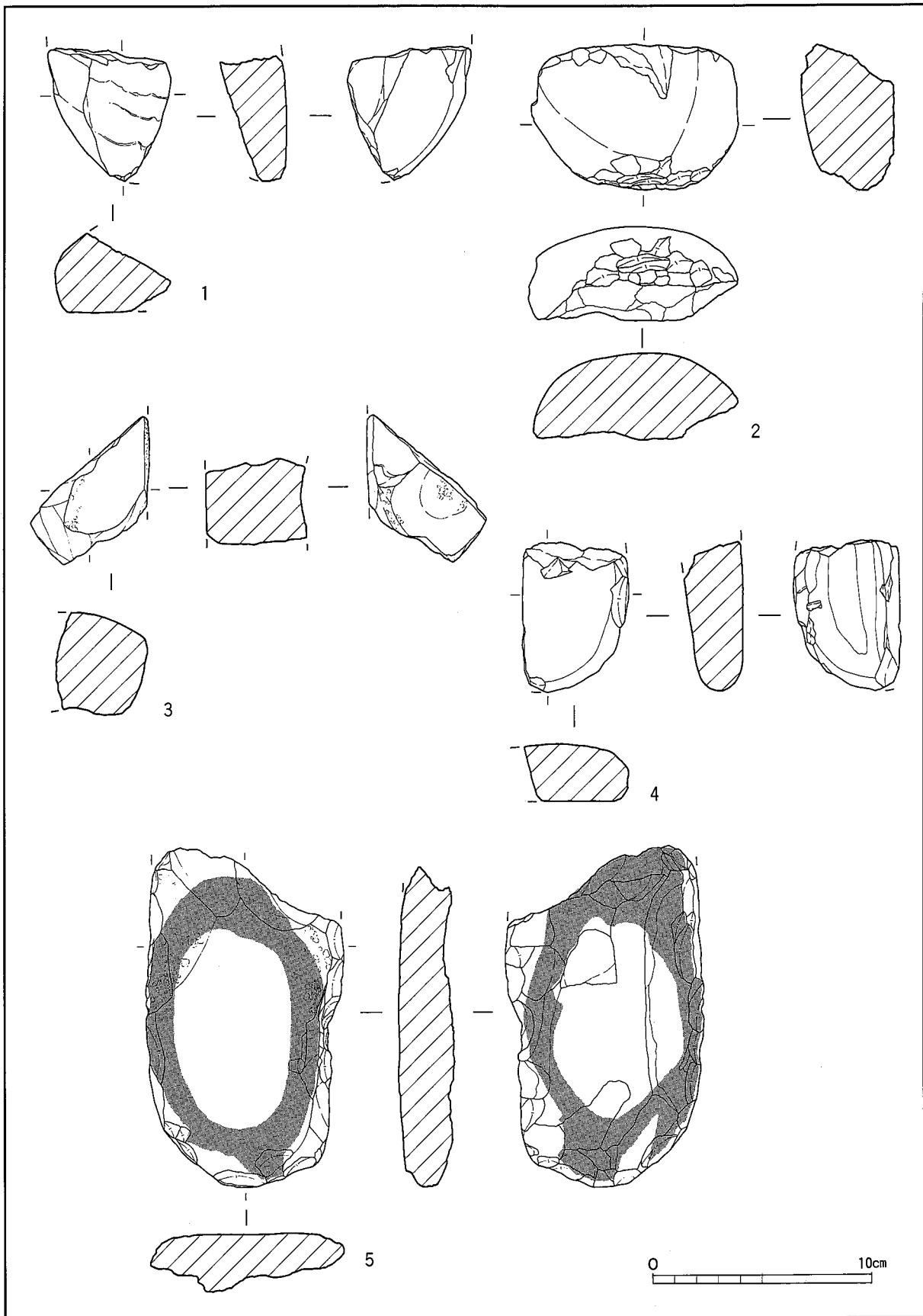
第6表 石器出土一覧

法量は残存値 (cm, g)

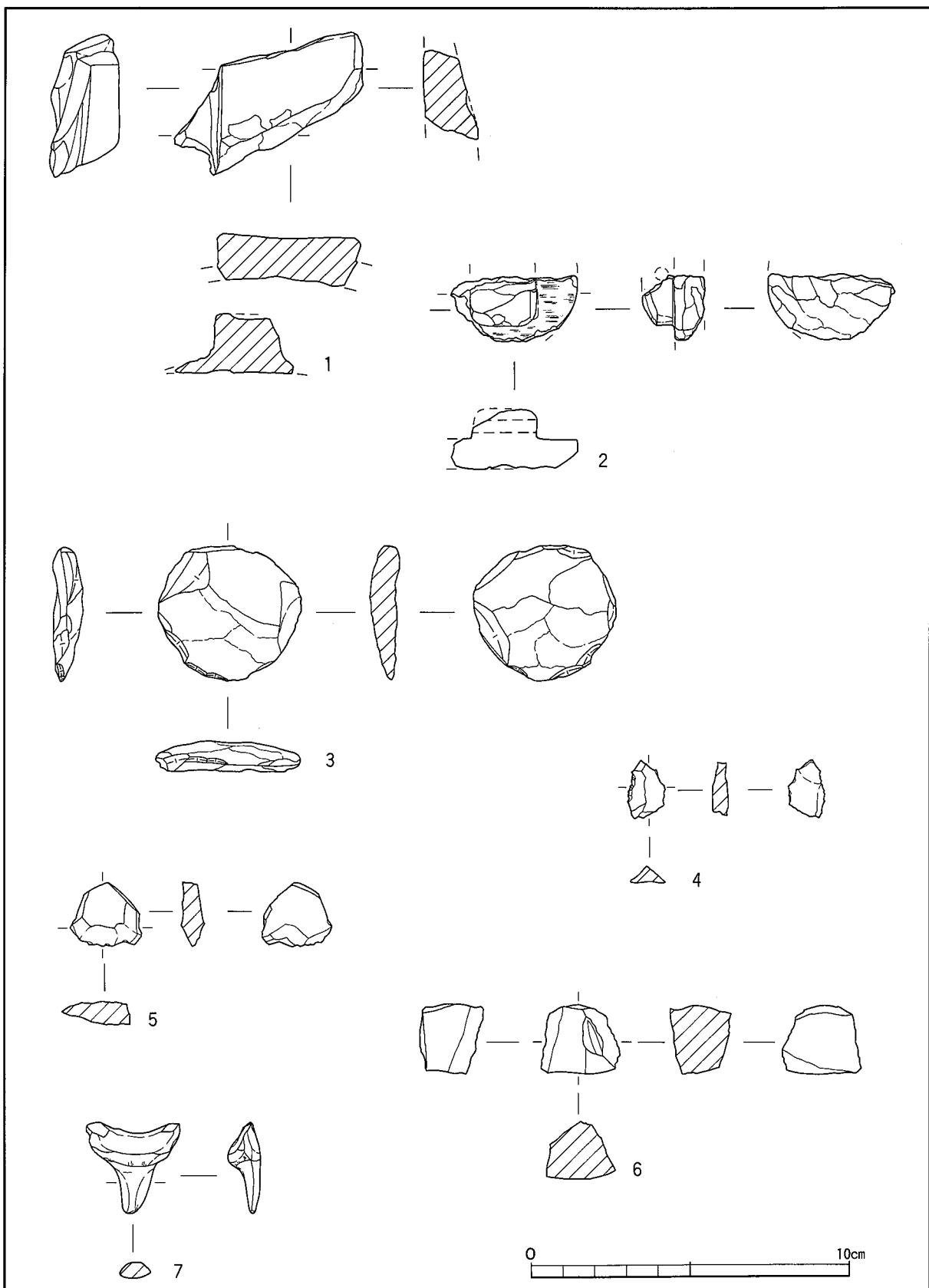
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	法量				石質
			長さ	幅	厚さ	重さ	
第14図 1 図版9の1	か-4 Ⅲa溝	石斧	3.9	3.3	2.1	24.8	緑色千枚岩
〃 2 〃 2	土留め状遺構	〃	7.4	4.3	1.7	96.8	緑色千枚岩
〃 3 〃 3	土留め状遺構	〃	9.9	5.2	2.4	211.0	緑色片岩
〃 4 〃 4	か-6 Ⅲ層		5.3	4.6	2.7	27.8	からみ 鍛 (スラグ・鉱滓) + 軽石?
〃 5 〃 5	か-6 Ⅲ層		2.7	4.3	1.7	6.5	軽石
第15図 1 図版10の1	え-6 Ⅲ層	すり石	5.8	5.3	3.7	128.8	硬砂岩
〃 2 〃 2	土留め状遺構	〃	6.7	9.5	4.0	350.0	硬砂岩
〃 3 〃 3	土留め状遺構	〃	4.2	4.3	4.4	161.0	硬砂岩
〃 4 〃 4	か-6 Ⅲ層	〃	6.8	4.9	2.7	133.0	硬砂岩
〃 5 〃 5	土留め状遺構	不明	14.7	9.0	2.5	560.0	緑色片岩
第16図 1 図版11の1	集石 溝Ⅱ層	石鍋	3.4	4.5	1.5	43.3	滑石
〃 2 〃 2	お-5 Ⅲa層	バレン状製品	2.0	4.0	1.9	15.6	滑石
〃 3 〃 3	き-6 Ⅲa層	円形石器	4.2	4.5	0.8	19.3	硬砂岩
〃 4 〃 4	き-5 Ⅲ層		1.8	1.2	0.5	0.9	黒曜石
〃 5 〃 5	か-6 Ⅲ層		2.0	2.2	0.7	3.5	チャート
〃 6 〃 6	え-5 Ⅲa層		2.2	2.4	1.7	12.0	チャート
〃 7 〃 7	え-7 Ⅱ層	歯の化石	2.9	3.0	0.5	5.8	サメの歯



第14図 (図版9) 石器: 石斧 (1~3)、軽石製品 (4・5)



第15図 (図版10) 石器：すり石 (1～4)、用途不明品 (5)



第16図 (図版11) 石器: 滑石製品 (1・2)、円形石器 (3)、黒曜石 (4)、チャート製品 (5・6)、化石サメ歯製品 (7)

### c. カムイ窯須恵器

第1表に示したとおり、破片で89点得られた。器種は壺形が殆どで、僅かに鉢形が確認された。

#### 壺

第17図1～15に示したものである。折れ縁の口縁部をラッパ状に大きく外反させ、肩部から胴部にかけて丸く張り出し安定した平底をもつものである。

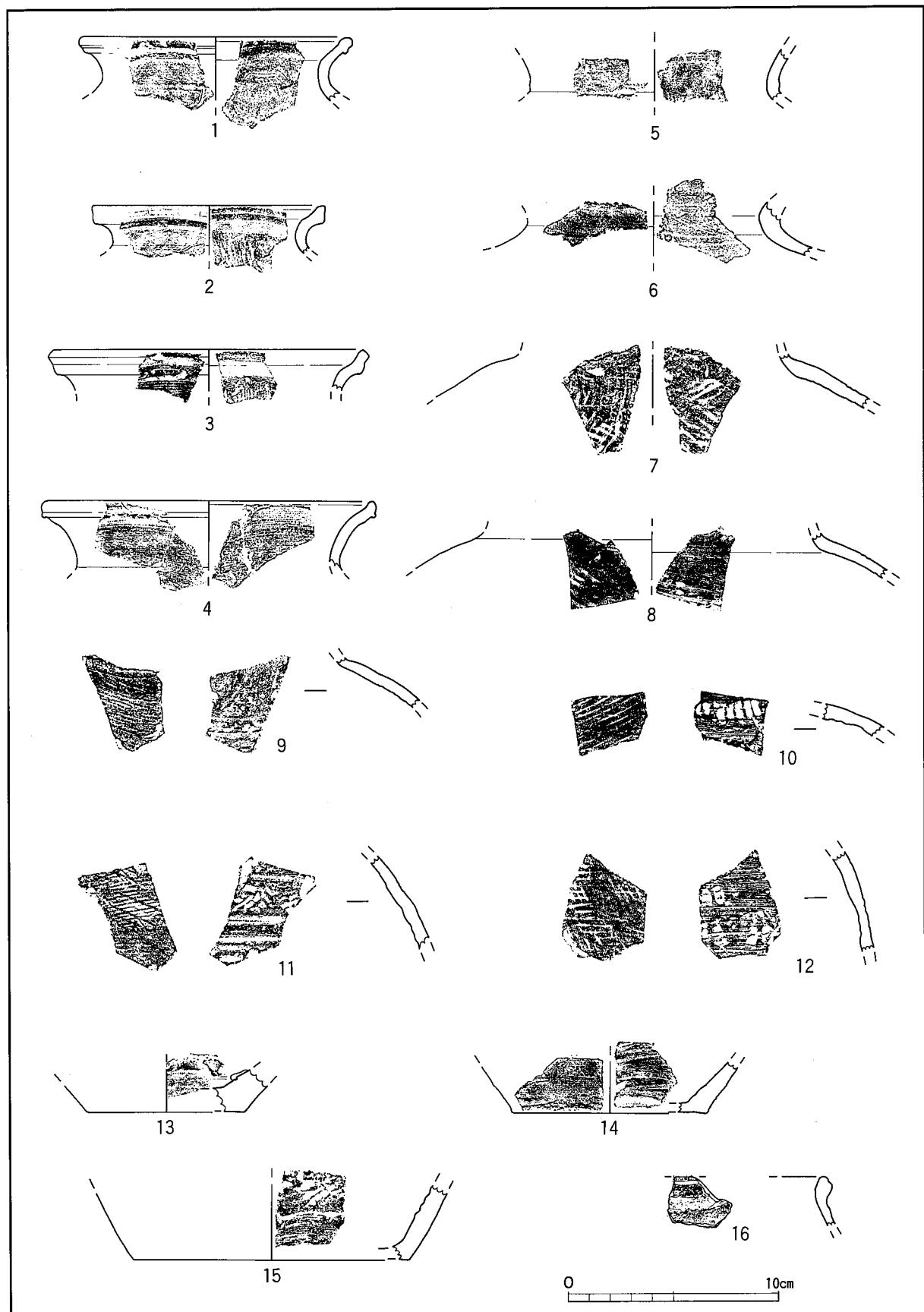
#### 鉢（第17図16、図版12の16）

同図16に示したもので、僅かに1点確認された。口縁部が僅かに折れ曲がる短頸の鉢である。

第7表 カムイ窯須恵器観察一覧

捕団番号 図版番号	器種	口径 器高台径 (cm)	口縁部の形状	素地	焼成	調整	文様	備考
第17図1 図版12の1	壺	13.0 — —	口唇部は丸み、その下位に細い帯を巡らす。	暗茶褐色で粗粒子、白色の粒子を混入	良好。内・外面、淡い灰色で芯部暗茶褐色。	外面：ナデ 内面：ナデ 轆轤目が残る	不明。	お-8 I
〃2 〃2	〃	11.2 — —	口唇部は尖状 折り縁口縁	〃 内・外面、灰色で芯部暗茶褐色。	〃 肩部内面に絞り痕が残る。	〃 〃	〃 〃	く-9 II
〃3 〃3	〃	15.7 — —	口唇部は斜位に平坦。 折り縁口縁	明茶褐色で粗粒子、白色の粒子を混入	〃 内・外面、灰青色で芯部明茶褐色。	〃 肩部内面は削り	〃 〃	え-6 II
〃4 〃4	〃	15.9 — —	口唇部丸み	上記1に同じ	〃	〃	〃 〃	え-8 II 上記3点に比して頸部が長い。
〃5 〃5 〃	〃	— — —	不明	〃	〃	〃	〃	き-5 III
〃6 〃6	〃	— — —	〃	上記2に同じ	〃	上記3に同じ	〃	え-5 III a
〃7 〃7	〃	— — —	〃	やや良好。 外面灰青色で、内面・芯部暗茶褐色を呈する。	内面：格子状の押圧文 外面：〃叩き文	〃	〃	お-5 III a
〃8 〃8	〃	— — —	〃	暗茶褐色で粗粒子、白色の粒子を混入。	良好。 内・外面、灰青色で芯部暗茶褐色。	内面：格子状の押圧文 外面：綾杉状の叩き文	〃	え-5 III

第17図 9 図版12の9	壺	— — —	不明	暗茶褐色で粗粒子 白色の粒子を混入。	良好。 内・外面、灰青色で芯部暗茶褐色。	内面：格子状の押圧文 外面：平行線状の叩き文	不明	お-5 Ⅲ
〃 10	〃	—	〃	灰色で粗粒子 白色の粒子を混入	やや良好 灰色を呈する。	〃	〃	か-3 Ⅲ a
〃 11	〃	—	〃	〃 赤色の粒子も見られる。	〃	〃	〃	Ⅲ a
〃 12	〃	—	〃	明茶褐色で粗粒子 白色の粒子	〃 内・外面灰青色で芯部明茶褐色。	〃	〃	え-5 Ⅲ a
〃 13	底部	— — 7.5		暗茶褐色で粗粒子。 白色の粒子 赤色の粒子を混入。	〃 内・外面灰青色で芯部暗茶褐色。	内・外面ナデ消し。	〃	く-8 Ⅱ
〃 14	〃	— — 9.4		〃	〃	〃	〃	お-5 Ⅲ a
〃 15	〃	— — 13.0		赤褐色で粗粒子 白色の粒子を混入。	やや良好。 内面赤褐色 外面灰色 芯部赤褐色。	内面：格子状の押圧文 外面：ナデ消し	〃	く-8 Ⅱ
〃 16	鉢	— — —		灰白色で粗粒子 白色の粒子を多量に混入。	〃 内・外面淡灰白色 芯部は灰白色を呈する	内・外面ナデ消し。	口唇部に沈線文を巡らす。	お-6 Ⅲ a



第17図 (図版12) カムイ窯須恵器：壺（1～15）・鉢（16）

## d. 白 磁

器種として、碗・皿の2種が確認された。個々の詳細については観察表に譲る。以下、碗から略述する。

### 碗

#### 1、玉縁口縁碗

第18図1～4に示したものである。口縁部を玉縁状に肥厚させるものである。玉縁が小さいものと（同図1・2）、大きいもの（同図3・4）の2種が見られた。

#### 2、外反碗

第18図5～7に示したものである。口縁部を外反するもので、見込みに印花文を施すものが多い。高台脇から外底までは露胎。

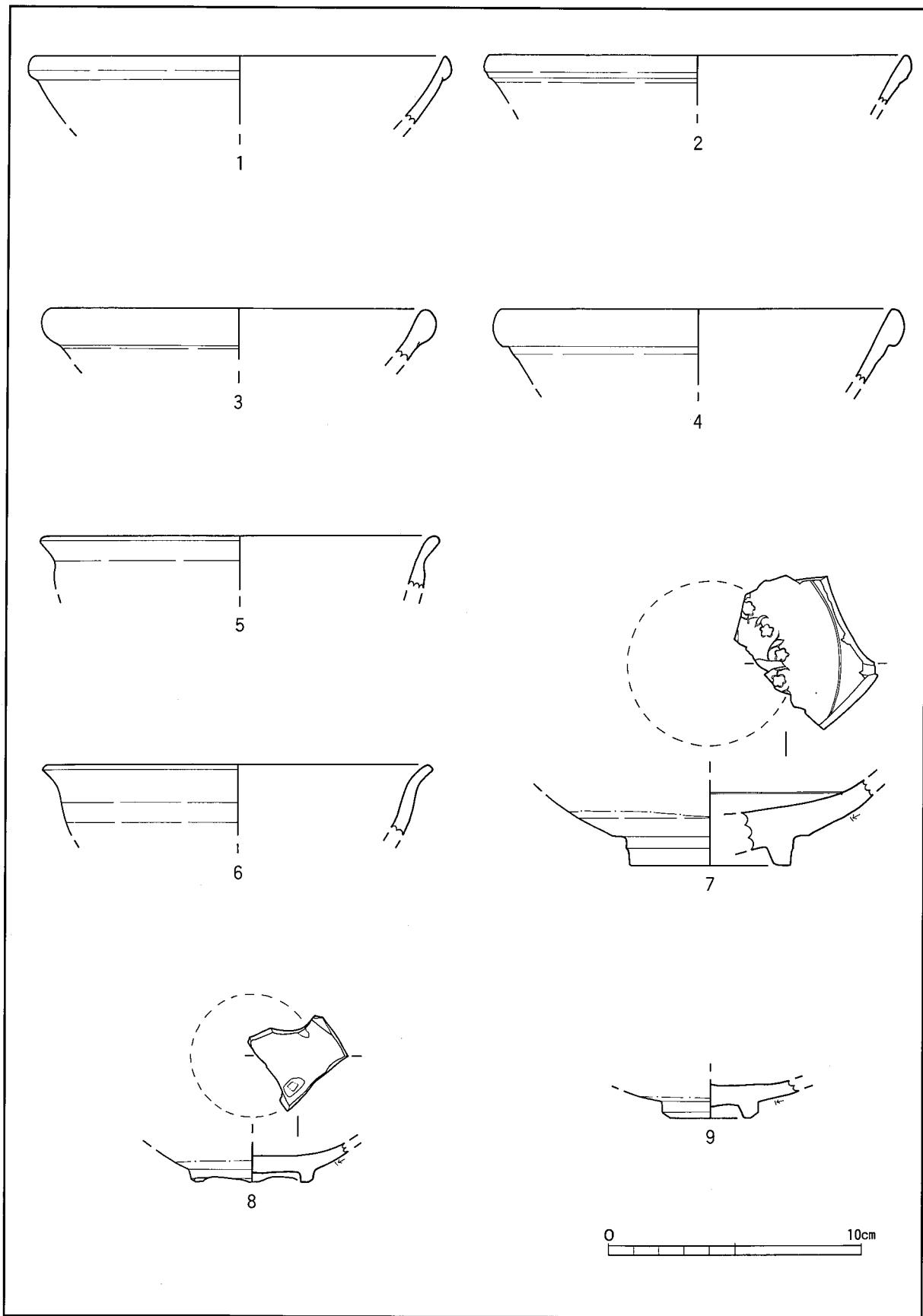
### 皿

第18図8・9に示したものである。高台脇から外底まで露胎で、置付けに抉りを入れたもの（同図8）と、抉りの見られないもの（同図9）の2種が見られた。

第8表 白磁観察一覧

挿図番号 図版番号	名称 又は仮称	口 径 器 高 台 径 (cm)	素 地	施 紗	釉 色	貫 入	文 様	備 考
第18図 1 図版13の1	玉 縁 口 縁 碗	16.4 — —	淡白色で微粒 子 黒色の微粒子 を含む。	内・外面に薄 い透明釉を施 す。	淡 灰 白 色	なし	なし	えー5 III a
〃 2 〃 2	〃	16.8 — —	淡灰白色で微 粒子 黒色の微粒子 を含む。	〃	〃	〃	〃	きー10 I
〃 3 〃 3	〃	15.6 — —	〃	〃	〃	〃	〃	かー6 III
〃 4 〃 4	〃	16.2 — —	淡黄白色で粉 粒子	〃	淡 黄 白 色	内・外面 に細かい 貫入が見 られる	〃	うー7 III a 玉縁の貼り付 け痕が観察で きる。

第18図 図版13の5	外 反 碗	15.8	淡灰白色で微 粒子	内外面に薄い 透明釉を施す。	淡 灰 白 色	なし	なし	きー6 II 口唇部をやや 厚めに成形。
〃 6	〃	15.4	〃	〃	〃	〃	〃	うー6 II 口唇部を薄く 成形。
〃 7	〃	—	—	薄い透明釉を 施すが高台脇 から外底面は 露胎。	〃	内・外面 に細かい 貫入が見 られる	見込みに圈線 と印花文を施 す。	おー7 III
〃 8	皿	—	淡白色で粉粒 子	〃	乳 白 色	なし	なし	かー6 III 見込みに目痕 が残る。
〃 9	〃	—	—	〃	淡 乳 白 色	内・外面 に細かい 貫入が見 られる	なし	おー5 III a
〃 9		3.8						



第18図 (図版13) 白磁:碗 (1~7)・皿 (8・9)

### e. 青 磁

器種としては、碗・皿・盤・瓶・壺などの5器種が得られた。なかでも、碗が多く見られた。

#### 碗

##### 1、草花文碗

第19図1～3に示したものである。外反口縁碗で内外面に草花文を描くものである。

##### 2、無文外反碗

第19図4～10に示したものである。腰部より丸みを持ちながら立ち上がり、口縁部で外反するものである。

##### 3、玉縁外反碗

第19図11～14に示したものである。口唇部を玉縁状に成形するもので、いわゆる佐敷タイプと呼ばれている碗である。

##### 4、雷文帶碗

第20図1に示したものである。直口口縁で外面に雷文を巡らすもので、腰部には唐草文を描くものである。

##### 5、無文直口碗

第20図2に示したものである。直口口縁で内外面無文の碗である。

#### 皿

##### 1、外反口縁皿

第20図10～12に示したものである。腰部に丸みを持つものと稜をつくるものの2種みられる。有文と無文がある。

##### 2、稜花皿

第20図13に示したものである。口唇部を波状に呈するもので、稜花皿と呼ばれているものである。

#### 盤

第21図1～6に示したものである。鍔縁盤で、内面に篦によって蓮弁を描くものである。口縁外面が鋭角なものと丸みのもの2種見られる。

#### 壺

第21図7・8に示したもので、いわゆる酒会壺の蓋の資料である。釉薬は厚く外面に施され、内面は露胎である。素地は灰白色の微粒子である。前者は外面に篦削りによる沈文が見られるが、全体の構図は判然としない。かー6グリッド、第Ⅲ層出土。後者はおー6グリッド、第Ⅲ層の出土である。

## 瓶

第21図9に示したもので、頸部に浮遊環を有する資料である。素地は灰白色の微粒子で、釉薬は厚い。おー7グリッド、第Ⅲ層出土。

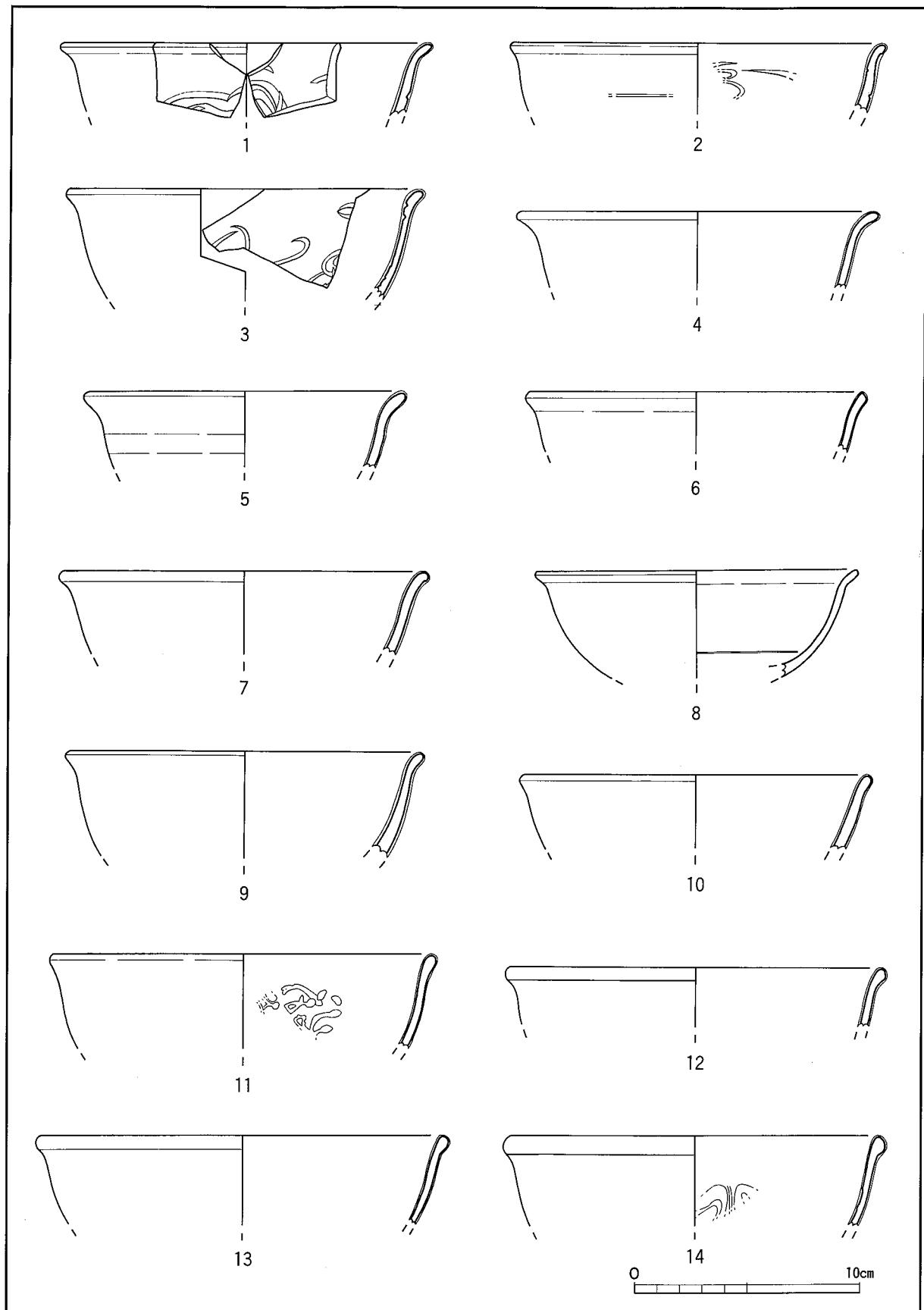
第9表 青磁観察一覧

挿図番号 図版番号	名称 又は仮称	口 径 器 高台径 (cm)	素 地	施 茹	釉 色	貫 入	文 様	備 考
第19図 1 図版14の1	草 花 文 碗	16.6 — —	淡灰白色で 微粒子	透明釉を厚く内・外 面に施釉。	灰 青 色	なし	内・外面に草花 文。	おー7 Ⅲ a溝
〃 2 〃 2	〃	16.8 — —	〃	〃	〃	〃	〃	かー6 I
〃 3 〃 3	〃	16.0 — —	淡赤黄色で 微粒子	〃	灰 黄 綠 色	細かい貫入 内・外面に見ら れる。	内面に草花文が 見られる。	かー6 III
〃 4 〃 4	無 文 外 反 碗	16.2 — —	淡白色で粗 粒子	薄い透明釉を内・外 面に施す。	灰 綠 色	〃	なし	えー6 III a
〃 5 〃 5	〃	14.4 — —	淡灰白色で 微粒子	薄い失透明釉を内・ 外面に施す。	〃	〃	〃	かー6 III
〃 6 〃 6	〃	15.2 — —	淡灰白色で 粗粒子	〃	〃	なし	〃	土留め状 遺構
〃 7 〃 7	〃	16.4 — —	〃	やや厚い失透明釉を 内・外面に施す。	〃	細かい貫入 内・外面に見ら れる。	〃	集石
〃 8 〃 8	〃	14.4 — —	〃	薄い失透明釉を内・ 外面に施す。	〃	なし	見込みに圈線が 見られる。	おー4 III a 薄手の碗
〃 9 〃 9	〃	16.0 — —	淡灰白色で 微粒子	厚い透明釉を内・外 面に施す。	淡 青 色	粗い貫入が内・ 外面に見られ る。	なし	土留め状 遺構

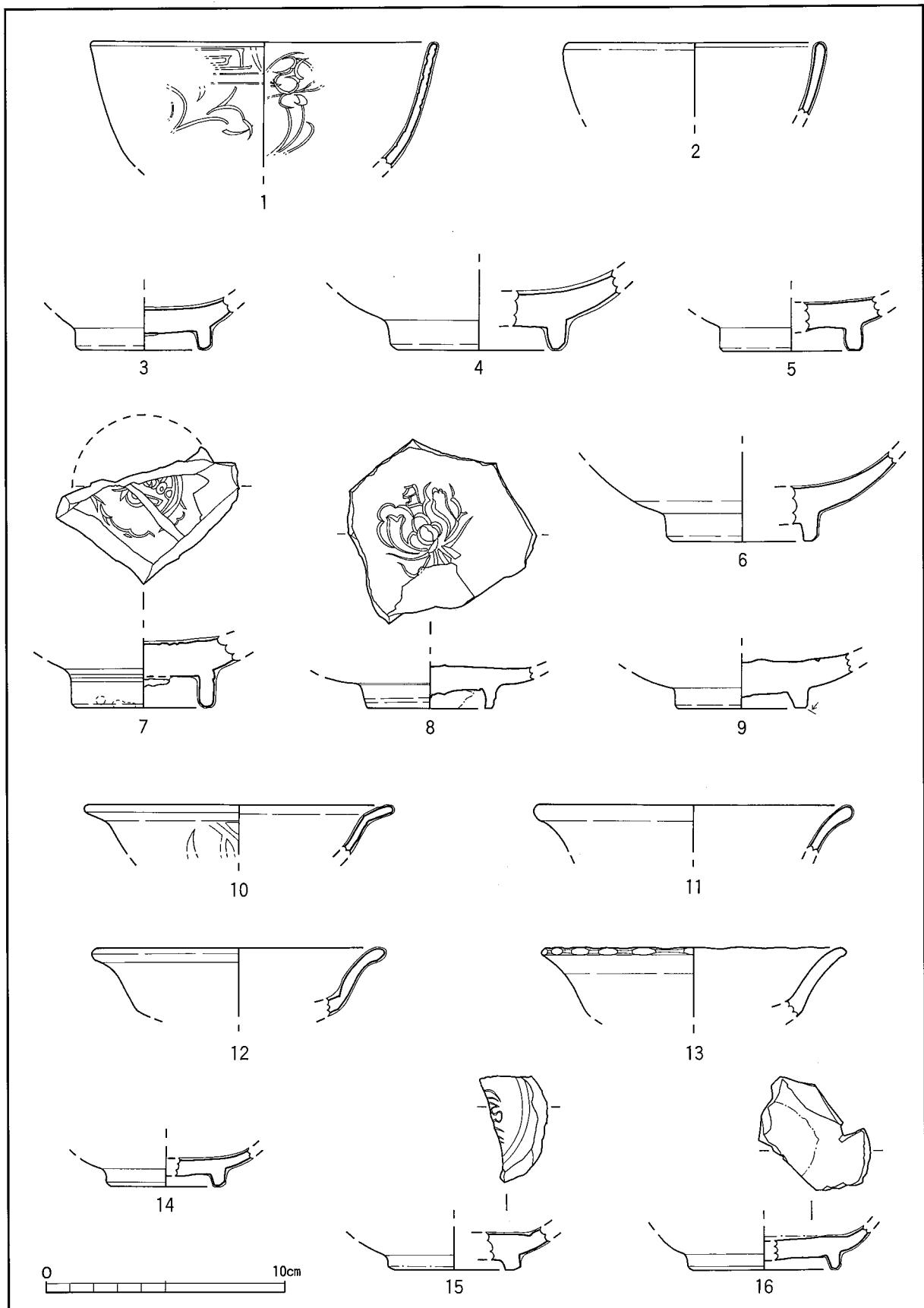
〃	10	無文外反碗	15.7	淡白色で粗粒子	やや厚い透明釉を内・外面に施す。	淡緑色	細かい貫入が内・外面に見られる	なし	え-5 Ⅲ やや外反の弱い碗
〃	10		—						
〃	11	玉縁口縁碗	17.2	淡灰色で粗粒子	やや厚い失透明釉を内・外面に施す。	灰緑色	なし	内面に陽印花文が見られるが全体の構図は不明。	か-6 Ⅲ いわゆる佐敷タイプ
〃	11		—						
〃	12	〃	17.0	〃	〃	灰青緑色	〃	なし	お-6 Ⅲa 〃
〃	12		—						
〃	13	〃	18.4	〃	〃	〃	細かい貫入が内・外面に見られる。	〃	え-5 Ⅲa 〃
〃	13		—						
〃	14	〃	17.2	〃	厚い失透明釉を内・外面に施す。	〃	粗い貫入が僅かに観察できる。	内面に範掻きの文様が見られるが文様構図は判然としない。	え-5 Ⅲ 〃
〃	14		—						
第20図1 図版15の1	雷文帶碗	14.6	淡灰白色で微粒子	透明釉を厚く内・外面に施す。	灰青色	なし	外面上位に雷文その下位に草花文内面にも草花文を施す。	か-5 Ⅲa	
〃	2	無文直口碗	11.0	淡灰白色で粗粒子	やや厚い透明釉を内・外面に施す。	灰緑色	〃	なし	え-6 Ⅲ
〃	2		—						
〃	3	碗の高台	—	淡灰白色で微粒子	厚い透明釉を全面に施釉後、外底面を蛇の目状に剥ぎ取る。	〃	〃	〃	え-8 Ⅱ
〃	3		—						
〃	4	〃	—	〃	〃	灰青色	〃	〃	土留め状遺構
〃	4		—						
〃	4		7.4						
〃	5	〃	—	〃	薄い失透明釉を全面に施釉後、外底面を蛇の目状に剥ぎ取る	灰緑色	〃	〃	う-8 Ⅱ
〃	5		—						
〃	5		6.0						
〃	6	〃	—	淡灰白色で粗粒子	薄い失透明釉を内・高台まで施す。疊付外底面は露胎。	〃	内・外面に粗い貫入が見られる。	〃	か-6 Ⅱ
〃	6		—						
〃	6		6.4						
〃	7	〃	—	淡灰白色で微粒子	厚い透明釉を全面に施釉後、外底面を蛇の目状に剥ぎ取る	淡青緑色	〃	内底面に印花文が見られるが、明瞭でない。	お-5 Ⅲ
〃	7		—						
〃	7		6.0						

タ タ 8	碗 の 高 台	— — 5.4	淡灰色で粗 粒子	薄い失透明釉を内・ 外面に施す。 畳付・高台内は部分 的に露胎。	灰 綠 色	細かい貫入が見 られる	見込みに印花文 が見られる。	土留め状 遺構
タ タ 9	— — 5.6	淡黃灰白色 で粗粒子	薄い失透明釉を内・ 外面に施す。畳付・ 高台内は露胎。	灰 黃 綠 色	なし		見込みに圈線が 1条見られる。	土留め状 遺構
タ タ 10	外 反 皿	13.0 — —	淡灰白色で 微粒子	やや厚い失透釉を 内・外面に施す。	淡 綠 色	タ	外面に蓮弁文が 見られるが、明 瞭でない。	か-5
タ タ 11	— —	13.4 — —	淡灰色で粗 粒子	タ	灰 綠 白 色	タ	なし	え-5 III a 焼成不良
タ タ 12	腰 折 皿	12.4 — —	淡灰白色で 微粒子	タ	灰 綠 色	タ	タ	え-5 III a
タ タ 13	稜 花 皿	12.9 — —	淡灰色で粗 粒子	薄い失透釉を内・外 面に施す。	タ	細かい貫入が 内・外面に見ら れる。	タ	土留め状 遺構
タ タ 14	皿 の 高 台	— — 5.0	淡灰白色で 微粒子	やや厚い透明釉を内 外面に施す。 内底面は露胎。	タ	タ	見込みに圈線が 1条見られる。	お-6 III a
タ タ 15	— — 5.6	— — —	タ	畳付及び内底面露胎	淡 青 綠 色	粗い貫入が僅か に見られる	見込みに印花文 が見られる、全 体の構図は不 明。	お-7 II
タ タ 16	— — 6.4	淡黃灰白色 で粗粒子	タ	見込みと内底面は蛇 の目状に剥ぎ取られ 露胎。	淡 黃 綠 色	なし	なし	え-8 II
第21図 図版16の1	盤	22.4 — —	淡灰黃白色 で微粒子	やや厚い透明釉を 内・外面に施す。	淡 綠 色	なし	内面に幅広の範 で蓮弁が描かれ ている。	う-6 II
タ タ 2	— —	24.0	淡白色で粗 粒子	厚い透明釉を内・外 面に施す。	灰 黃 綠 色	タ	内面に2本の範 で蓮弁が描かれ ている。	お-4 III a
タ タ 3	— —	25.3	淡灰白色で 粗粒子	厚い透明釉を全面に 施釉。	灰 綠 色	細かい貫入が 内・外面に見ら れる。	不明。	か-7 II
タ タ 4	盤 の 底 部	— — 8.5	淡黃白色で 微粒子	タ 外底面は蛇の目状に 剥ぎ取る。	灰 青 色	タ	タ	お-6 III a

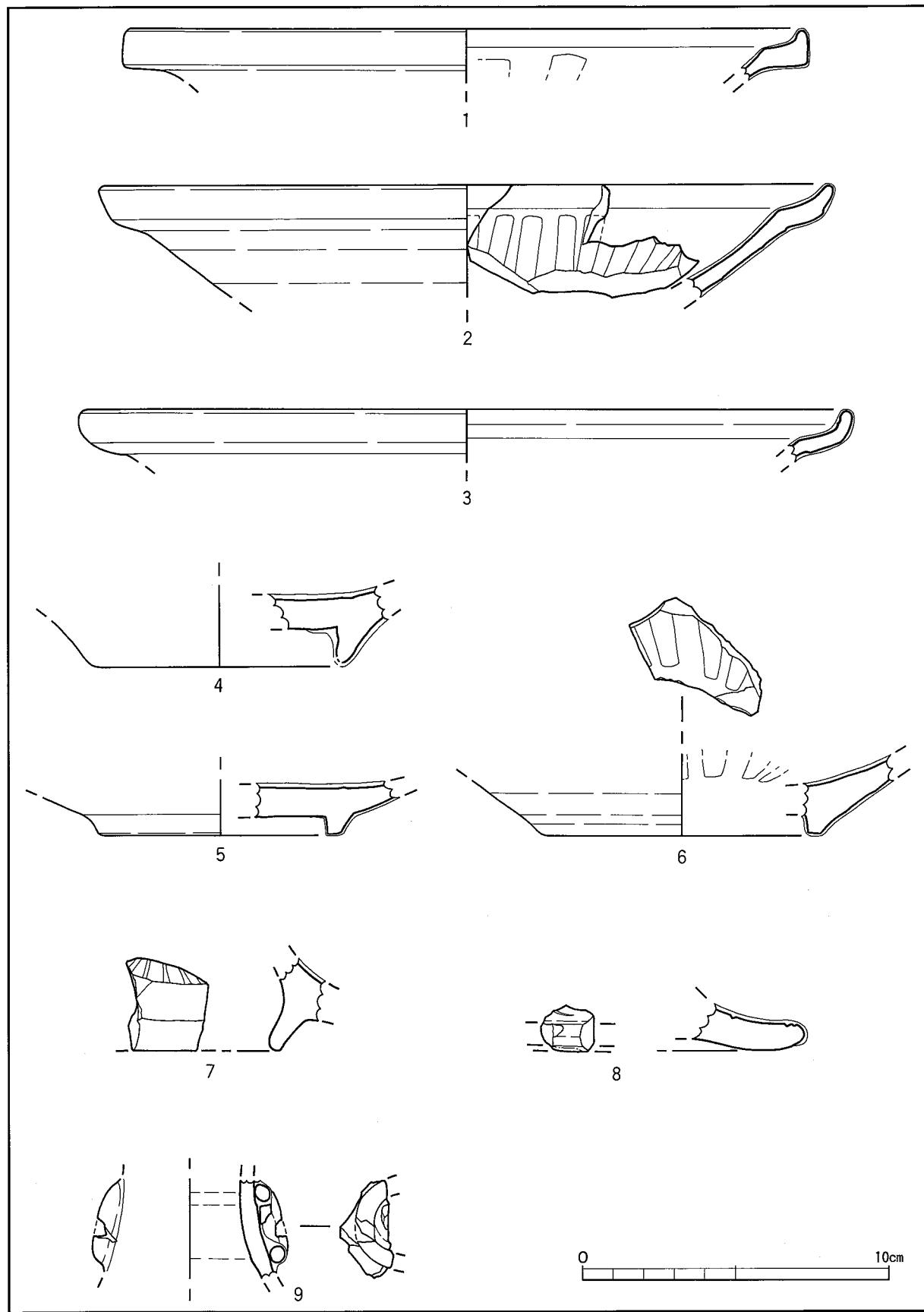
夕	5	盤 の 底 部	— — 8.0	淡黃白色で 微粒子	薄い失透明釉を全面 に施釉。外底面は露 胎。	灰 黄 綠 色	なし	不明	えー 6 III
夕	6	夕	— — 9.4	淡白色で粗 粒子	厚い透明釉を内・外 面まで施す。	夕	なし	内面に2本の籠 で蓮弁が描かれ ている。 上記2と同一個 体かと思われ る。	おー 6 III



第19図 (図版14) 青磁:碗 (1~14)



第20図 (図版15) 青磁:碗 (1~9)・皿 (10~16)



第21図 (図版16) 青磁:盤(1~6)・壺(7・8)・瓶(9)

## f. 青 花

碗・皿・壺の3器種が確認された。中でも碗が数多く見られた。以下、碗から記述する。

### 碗

第22図1～7は高台の資料である。1は淡い灰白色の微粒子の素地に、薄い透明釉を外底面以外に施したものである。文様を高台脇に圈線が1条、見込みに圈線を2条巡らし、草花文（？）を描くが、小破片ため全体は不明である。か-6、第Ⅲa層より出土。

同図2は灰黃白色の微粒子の素地に、薄い透明釉を内面に施したもので細かい貫入が見られる。高台は露胎であるが、僅かに外面に釉だれが見られる。見込みに文様を描くが構図は不明。呉須の発色は良好。土留め状遺構より出土。

同図3は腰折れの碗である。淡い緑釉で文様を高台脇に草花文、見込みに圈線を描く。文様の全体は不明。素地は淡黃白色の粉粒子で薄く白化粧後に透明釉を内・外面に施す。畳付けは露胎。見込みは蛇の目に釉剥ぎが見られる。細かい貫入が観察される。え-7、第Ⅲa層より出土。

## g. 天 目

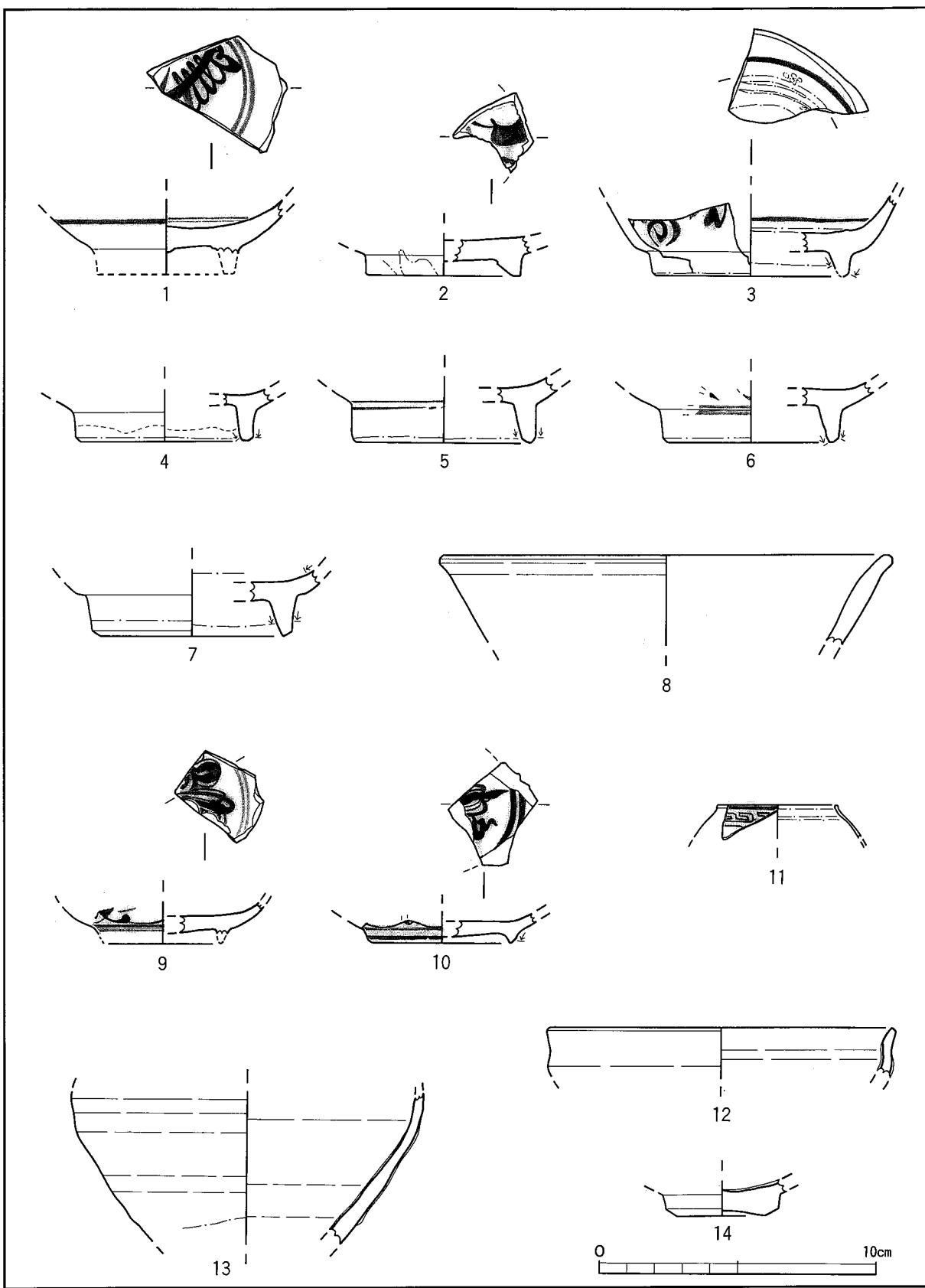
第1表に示したとおりすべて破片で5点得られた。第22図12はいわゆるべっ甲口縁の資料で、推算口径12.6cmを計る。口縁部内外は渋色釉でその下位には黒釉を施す。素地は灰白色で粗粒子。黒色の粒子を僅かに混入する。お-5、第Ⅲ層より出土。

同図13は口縁部と高台を欠く胴部資料である。内外面に黒釉を施すが渋色釉に発色する。素地は12に類似。土留め状遺構より出土。同図14は削り出し高台で、外底面は浅く削りだす。内底は13と同様に黒釉を施すが、表面渋色釉に発色する。高台径は4.1cmを計る。え-7、第Ⅱ層より出土。

第10表 青花観察一覧

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口 径 器 高台径 (cm)	素 地	施 釉	釉 色	貫 入	文 様	備 考
第22図 1 図版17の1	碗 の 底 部	— — —	淡灰白色の 微粒子	薄い透明釉を外 底面以外に施す。	淡 青 白 色	なし	高台脇に圈線 見込みに圈線を 2条巡らし、草 花文を描くが全 体は不明。	か-6 Ⅲ a
〃 2 〃 2	〃	— — 5.6	灰 黃 白 色 の 微粒子	薄い透明釉を内 面に施釉。高台 は露胎。 僅かに外面に釉 だれが見られる。	淡 灰 白 色	細かい貫入が見 られる。	小破片のため構 図は不明。	土留め状 遺構

タ	3	腰 折 碗 底 部	- - 7.0	淡黄白色の 粉粒子	薄い透明釉を施す。 畳付けは露胎 見込みに蛇の目 釉剥ぎ。	淡 灰 綠 色	内・外面に細かい貫入が見られる。	高台脇に渦巻き 状の文様と見込みに圈線を巡らす。	え-7 III a
タ	4	碗 の 底 部	- - 6.4	淡灰白色で 粗粒子	薄い透明釉を 内・外面に畳付け露胎。 畳付け内外釉剥 ぎ痕が残る。	淡 灰 白 色	なし	不明。	か-6 II
タ	5	タ	- - 6.6	タ	タ	淡 青 白 色	タ	高台外面に圈線 を2条巡らす。 全体の構図は不明。	く-9 II 畠付けを三 角状に成形。
タ	6	タ	- - 6.4	灰白色で微 粒子	タ	タ	タ	高台際に圈線を 2条。脇に菊花 散らし文?。全 体に不明。	お-5 II
タ	7	タ	- - 7.2	タ	見込みと畠付け 縁部露胎。	淡 白 色	細かい貫入が 僅かに見られ る。	不明。	お-7 III
タ	8	碗	16.4	黄白色で粉 粒子	やや厚での透明 釉内外面に施す。	淡 黄 白 色	外面に荒目の貫 入が顯著。	文様は見られな いが、全体の特 徴より取りあえ ず本項に入れ た。	え-5 III a 大ぶりの碗 に成るもの と思われる。
タ	9	皿	- - -	淡灰白色で 微粒子	タ	淡 青 白 色	なし	見込みに十字文 と圈線、高台脇 に草花文を描く。 全体は不明。	お-5 III a
タ	10	タ	- - 5.1	タ	タ	タ	タ	見込みに十字文 と圈線、高台脇 に草花文と圈線 を描く。	お-4 III a 呉須の発色 は甘い
タ	11	壺	4.4	タ	薄い透明釉を口 唇部、以外に施 釉。	淡 黄 白 色	タ	口縁部外面に雷 文と圈線を描く。	お-6 III a 薄手の小 壺。



第22図 (図版17) 青花:碗 (1~8)・皿 (9・10)・壺 (11)

天目:碗 (12~14)

## h. 褐釉陶器

第1表に示したとおり、小破片で326点得られた。その中で、器種としては、壺形と水注の把手（？）が確認された。壺形は大きさによっていくつかに分けられるが、大まかに大・小で分けた。個々の観察は第11表に示した。参考されたし。

### 小形壺

- I : 外反ぎみに立ち上げ、口唇部を舌状に呈するもの (第23図1、図版18の1)
- II : 頸部を立ち上げ、口唇部を平坦にするもの (第23図2、図版18の2)
- III : 頸部を立ち上げ、逆L字状に曲げるもの (第23図3、図版18の3)
- IV : 外反ぎみに立ち上げ、幅広の口唇部を成形するもの (第23図4、図版18の4)

### 大形壺

- I : 逆くの字状に折れ曲げ、口唇部を平坦にするもの (第23図8、図版18の8)
- II : 縁部で窄まり、口縁部を方形状に成形するもの (第23図9、図版18の9)

## i. タイ産土器

第23図13に示したもので、蓋の資料である。縁部を内側へ折り曲げ、帯状の凸帯を内面に巡らしたものでもある。さらに、先端部の粘土が僅かにはみ出し、紐状に凸帯に沿って巡らしたものもある。縁部の外面はヘラ削りが施され、やや弧状に成形されたものである。色調は表裏面とも淡い黄褐色で、芯部は黄土色を呈する。胎土には黒色鉱物が多量に含まれ、手触りがザラザラする。法量は推算で口径12.2cm、器高2.4cmを測る。おー8、第Ⅱ層より出土。

## j. 瓦

灰色瓦・赤色瓦等が得られた。その殆どが、小破片のため図示しなかった。その中で、高麗系瓦が僅かに1点得られた。その高麗系瓦のみを掲載した。

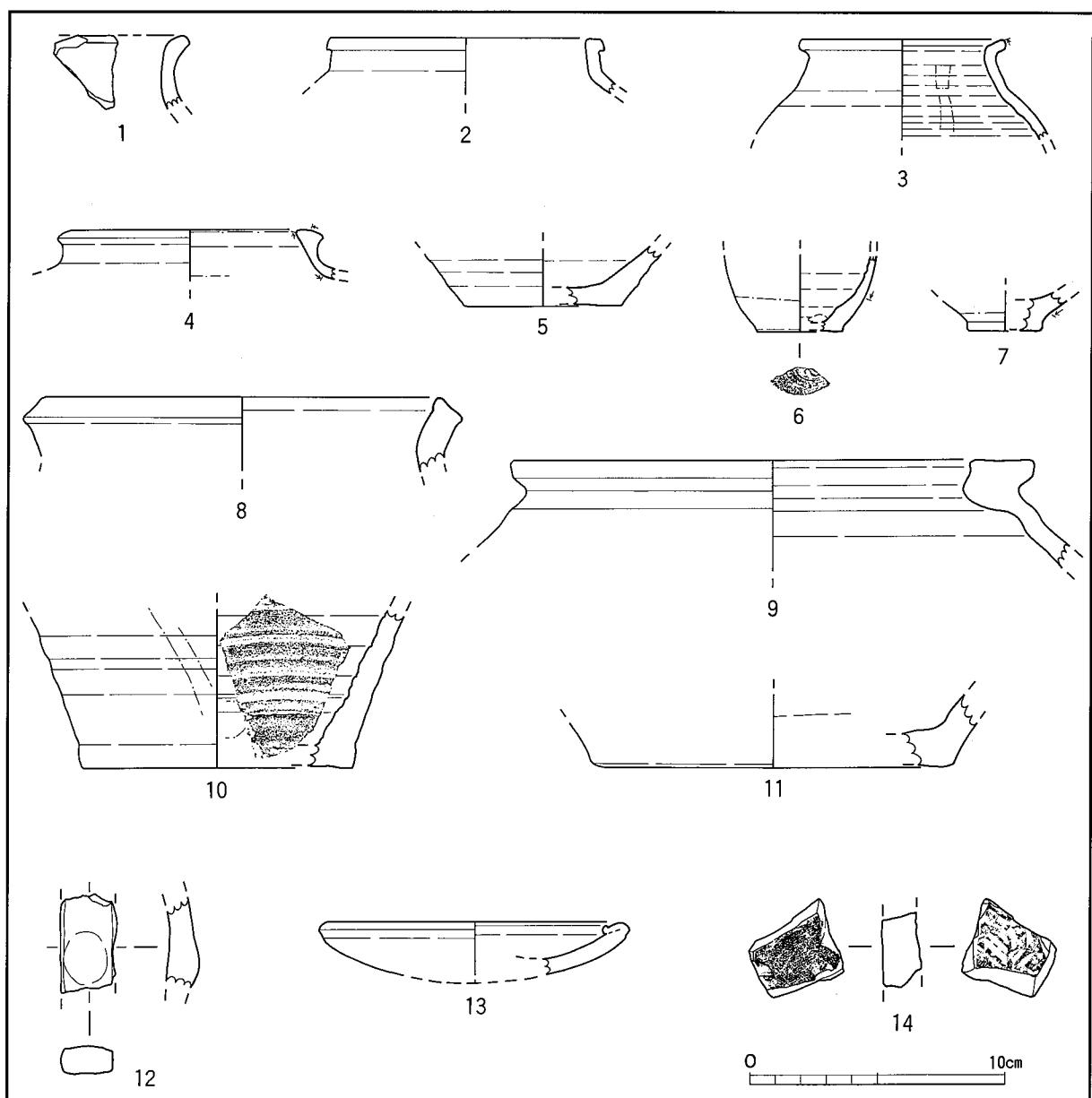
### 高麗系瓦

第23図14に示した平瓦の小破片が1点得られた。表面に羽状押型文、裏面に糸切り痕が僅かに観察される。表裏面とも淡い茶褐色で芯部は灰色を呈する。素地に石灰質砂粒・赤色粒・ガラス質の鉱物の混入が見られる。えー6、第Ⅲ層より出土。

第11表 褐釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口 径 器 高 高台径 (cm)	素 地	施 釉	釉 色	貫 入	文 標	備 考
第23図 1 図版18の1	小形壺	I	— — —	淡乳白色で粉 粒子 茶色の粒子・ 黒色の粒子を 僅かに混入	内・外面に薄く施 す。	や や 緑 褐色		小破片のた め不明。	く-5 III a
〃 2 〃 2	〃	II	10.8 — —	灰褐色で微粒 子 茶色の細粒子 を僅かに混入	〃	淡 黃 褐色		〃	か-6 III
〃 3 〃 3	〃	III	8.1 — —	〃 薄い釉薬を外面に施 す。 口唇部・内面は露 胎。	茶 褐色		なし	き-8 III	
〃 4 〃 4	〃	IV	10.4 — —	〃 砂粒・鉱物を 僅かに混入	薄い釉薬を内・外 面に施釉。口唇部内・ 内面下半部は露胎。	暗 褐色		〃	う-6 II
〃 5 〃 5	小形壺 の 底 部		— — 6.2	淡黄褐色で粗 粒子 砂粒が僅かに 混入	なし 胴下半部は露胎と思 われる。	不 明	不明	き-5 III 胴下半部に 顯著に窓痕 が残る。	
〃 6 〃 6			— — 3.4	灰褐色で微粒 子 茶・黒の粒子 砂粒が散見	薄い釉薬を胴下半部 まで施釉。	淡 茶 褐色		〃	か-5 II 底面に糸切 り痕残る。
〃 7 〃 7	〃		— — 3.0	淡灰褐色で微 粒子 黒色の粒子を 混入	薄い釉薬を内・高台 脇まで施釉。	茶 褐色		〃	き-5 III 底面を突出 させる
〃 8 〃 8	大形壺	I	17.2 — —	淡赤褐色で粗 粒子。 砂粒・赤色粒 を混入。	薄い釉薬を内外面に 施釉。	赤 褐色		〃	か-4 III
〃 9 〃 9	〃	II	20.6 — —	灰褐色で微粒 子 黒色の粒子・ 砂粒等を混入	〃	淡 綠 褐色		〃	か-7 III a

タ	10	大形壺の底部		— — 10.6	灰褐色で微粒子 黑色の粒子・砂粒等を混入	胴下半部は露胎と思われる。 外面に釉だれ、内面釉斑が見られる。	淡茶褐色		不明	か-4 III
タ	11	タ		— — 14.2	タ	不明	不明	タ	タ	お-5 II
タ	12	把手		タ	灰褐色で微粒子 茶色の粒子 砂粒等を混入	全体に薄い釉薬を施釉。	暗褐色	タ	タ	お-5 III



第23図(図版18) 褐釉陶器:壺(1~11) 高麗系瓦:平瓦(14) タイ産土器:蓋(13) 把手?(12)

### k. 鉄 鏃

第24図1に示した小型の鉄鏃が1点得られた。全体にノミ状の形を呈するもので、先端部をやや弧状の両刃に成形したものである。断面4角形を呈する。茎部は細長く円形に仕上げたもので、現存長3.9cm、重さ4.9gを計る。うー7、第Ⅱ層より出土。

### l. 鉄 釘

第24図2・3に示した角釘が2点得られた。2点とも鋸ぶくれが著しく、板状に剝落が見られる。頭部を折り曲げ全体に逆L字状を呈したものである。先端部は両刃に仕上げたもので、断面方形を呈する。法量は前者が現存長7.2cm、重さ24.2gで、後者は現存長7.9cm、重さ30.4gを計る。2点とも、きー10の第Ⅰ層より出土。

### m. カンザシ

第24図4～7に示した4点が得られた。同図4・5は頭部を花形にするもので、一般に男性用と言われているものである。同図7は頭部を匙状に成形すもので、女性用と考えられているものである。個々の観察は第12表に示した。

第12表 カンザシ観察一覧 (cm, g)

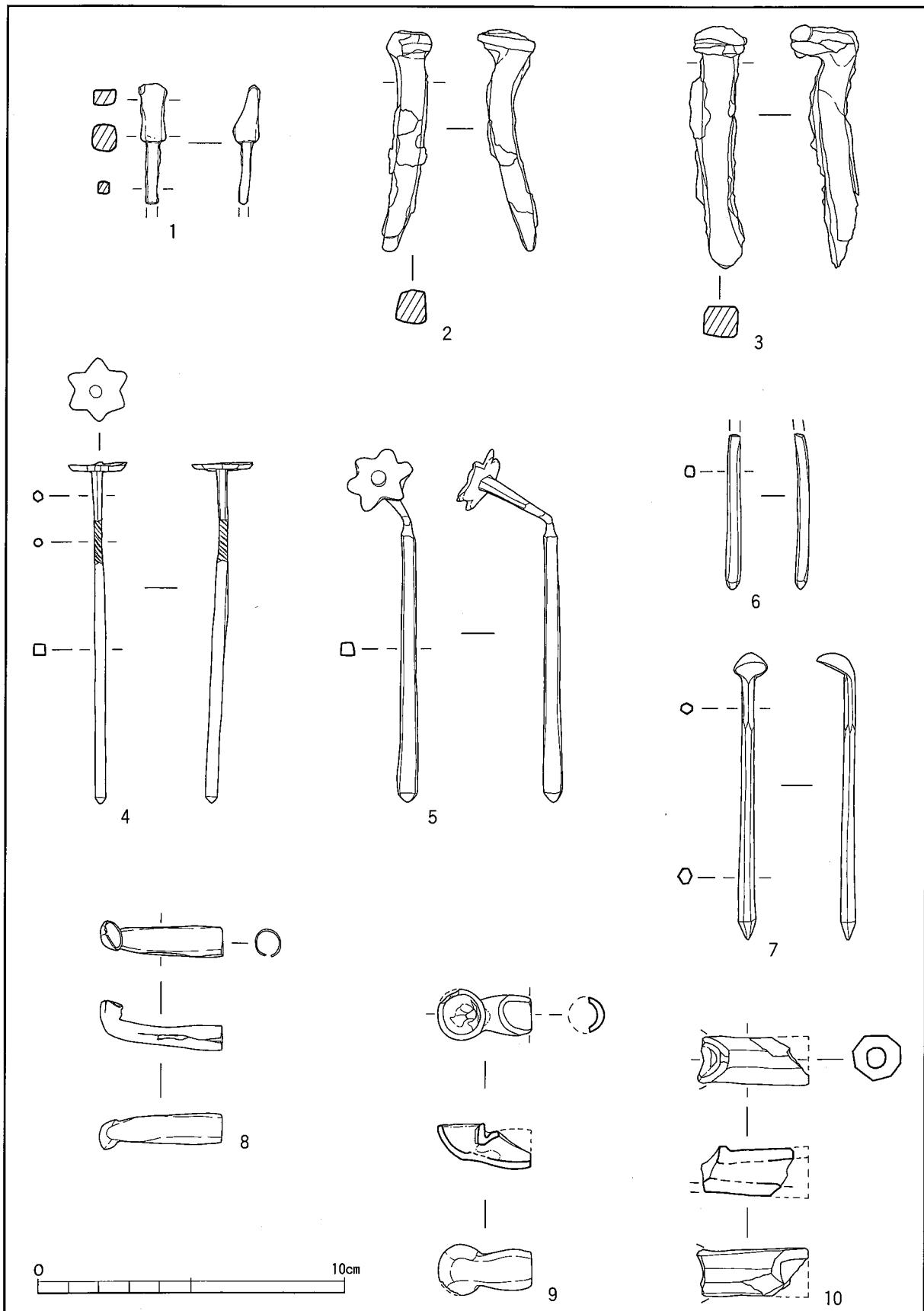
挿図番号 図版番号	出土地点	層序	法 量				材質	観 察
			長さ	幅	重さ	頭部幅		
第24図4 図版19の4	かー10	I	11.1	0.4	13.4	2.1	青銅	首部は6角形で竿部は4角形を呈する。 その間は右方向にねじる。
ヶ 5	きー6	II	11.5	0.5	19.7	2.3	ヶ	ヶ
ヶ 5								
ヶ 6	きー7	II	—	0.4	5.1	—	ヶ	頭部と首部を欠く資料。かなり使用されたもので、竿部・先端部をかなり摩耗。
ヶ 6								
ヶ 7	きー10	I	9.3	0.5	3.2	1.2	ジュラル ミン	完形。首部と竿部とも6角形。接点で交差させる。材質より戦後資料。
ヶ 7								

### n. 煙 管

煙管は雁首のみの4点が確認された。その中で全体の形状が窺える3点を第24図8～10に示した。

同図8は青銅製品で、火皿は小さく脂返しの湾曲は弱いものである。現存長4.0cm、重さ4.4gを計る。かー6、第Ⅱ層より出土。

同図9・10は陶製の雁首である。9は首部を円形に成形したもので、小振りの標品である。全体に緑釉を施したものであるが、剝落が著しく白色の素地が見られる。釉薬は僅かに火皿内外面に観察される。長さ3.0cm、重さ3.6gを計る。けー6、第Ⅰ層より出土。同図10は首部を多角形（7角形）に成形したものである。素地は茶褐色を呈し、全体に飴釉を施されている。現存長3.6cm、重さ9.5gを計る。かー6、第Ⅱ層より出土。



第24図 (図版19) 鉄鎌 (1)、鉄釘 (2・3)、カンザシ (4~7)、煙管 (8~10)

## ○. 沖縄産陶器

沖縄産は施釉陶器・無釉陶器・陶質土器の3種が得られた。これらは「那覇市壺屋」において、それぞれ上焼（ジョウヤチ）・荒焼（アラヤチ）・赤物（アカムン）と呼ばれている。ちなみに、前2者は戦前・戦後を通して作られるが、「アカムン」については現在では見られないものとなっている。

さて、本遺跡で得られた資料は、その殆どが小破片で第Ⅰ・Ⅱ層（搅乱層）より得られたものである。その中より典型的なものを抜き出し示した。分類に際しては、細かい分類は行わず「伊良波西遺跡」<sup>註3</sup>「壺屋古窯群Ⅰ」<sup>註4</sup>を参考におおまかに分けた。個々の観察は第13・14表に示した。以下、施釉陶器より記述する。

### A：施釉陶器

釉薬の違いによって、灰釉陶器・黒釉陶器・飴釉陶器・白釉陶器・鉄釉陶器の5種に分けた。以下、灰釉陶器より略述する。

#### 灰釉陶器

素地に灰釉を「つけ掛け」によって施したもので、見込み・高台は露胎にする。畳付け・見込みに細かい砂粒が観察される。

#### 碗

第25図1～3に示したものである。直口口縁でストレートに立ち上がる器形を呈する。いわゆる「湧田焼」と呼ばれているものである。

#### 皿

第25図4に示したもので、腰部に丸みを持ちながら立ち上げ、玉縁状の口縁部を呈するものである。

#### 黒釉陶器

黒釉を用いるものである。水注・灯明具等が確認された。

#### 水注

第25図5・6に蓋・身を示した。前者は淡い黄褐色の粗粒子の素地に黒釉を施したものである。釉薬の発色は鈍い。後者も同じような素地に黒釉を頸部内面から外面に施すが、口唇部は釉剥ぎを行い露胎を呈する。外面の黒釉には細かい貫入が見られる。

#### 秉燭

第25図7に示したものである。素地は灰褐色の微粒子で、内外面に黒釉を施す。底面は露胎。底面は側面より弧状の抉りが3ヶ見られる。

### 飴釉陶器

飴色の釉薬を用いるものである。水注・壺・鉢等が確認された。

#### 水注

第25図8に示したものである。飴釉の発色が悪く鈍く灰緑色を呈している。素地は灰褐色の微粒子である。高台状のすべり止めは腰高に成形。

#### 壺

第25図9に示したものである。細頸の壺で口唇部を玉縁状に成形。釉薬を口縁部内面から外面に薄く施す。素地は淡い茶褐色で粗粒子である。

#### 鉢

第25図10に示したものである。口唇部を方形に成形し、ハの字状に開く器形を呈する。緑飴色を呈し釉薬を内外面に施す。素地は灰褐色の微粒子である。釉を内外面に薄く施釉。

### 白釉陶器

素地に白化粧土を施釉後、透明釉を施すものである。畳付けは露胎で、重ね焼きの際の白土が僅かに見られる。見込みに蛇の目釉剥ぎを行う。碗と小碗が得られた。

#### 碗

第25図11～17に示したものである。胴部より丸みを帯び、口縁部で外反するもので薄手のものと厚手のものの2種見られる。前者が11・12で、後者が13～17の標品である。後者の厚手のものは「アラマカイ」と通称されているものである。

#### 小碗

第25図18・19に示したもので、すべて底部資料である。基本的に碗形と成形技法などは同じである。

### 白釉十鉄釉陶器

内外面に白釉と鉄釉を掛け分けたものである。小碗のみ図示した。

#### 小碗

第25図20に示した。鉄釉を高台脇まで施釉し高台は露胎。畳付けに白土が残る。高台は白釉のものに比してやや高く、湧田焼の高台に近い作りである。内面は白釉を全面施釉後、蛇の目釉剥ぎを施している。

### B：無釉陶器

無釉陶器（アラヤチ）は第1表に示したとおり破片で268点得られた。器類としては、鉢・厨子甕等が見られた。その中で特徴的なものを抜き出して図示した。以下、小皿より記述する。

### 小皿

第26図1に示したもので、薄手の標品である。腰部より立ち上げ、口縁部でやや内湾する器形を呈する。焼成は良好で、内外面に轆轤目が残る。素地は茶褐色で微粒子である。細かい砂粒が散見できる。口径10.4cmを計る。かー7、第Ⅱ層より出土。

### 火入れ

第26図2に示したものである。胴部より直に立ち上げ、口唇部を平坦に仕上げた筒型の器形を呈する。内外面ともに灰色で、芯部は茶褐色を呈する。素地に僅かに白色砂粒が観察される。口径12.4cmを計る。かー6、第Ⅱ層より出土。

### 擂鉢

第26図3に示したものである。口縁部をM字状に造るものである。口縁部内面はスリ消しを施され、その下位に僅かに擂目が観察される。色調は全体に暗褐色を呈し堅緻である。混入物に赤色粒・砂粒・ガラス質鉱物等を含む。きー4、第Ⅱ層より出土。

### 鉢

第26図4に示したものである。口縁部を逆L字に折り曲げるものである。内外面黄褐色に発色、芯部は明茶褐色を呈する。微砂粒・赤色粒等が散見できる。きー5、第Ⅱ層より出土。

### 厨子甕

第26図5に示したもので、厨子甕の蓋である。底部を幅広に成形したもので内外面に荒く轆轤痕が残る。外面にマンガンを薄く塗りややコゲ茶褐色で内面・芯部は明褐色を呈する。微砂粒・赤色粒などを混入。かー5、第Ⅱ層より出土。

## C：陶質土器

陶質土器（アカムン）は、第1表に示したとおり破片で総数409点得られた。器種としては、鍋・土瓶・炉等が見られた。その中より、特徴的な資料を図示した。以下、鍋形より略述する。

### 鍋

第26図6に示したものである。口縁部を「く」の字に折り曲げ、胴部を丸く膨らます器形が知られている。沖縄で「サークー」と通称されている土鍋である。

### 土瓶

第26図7～12に示したものである。7は摘み部、8・9は蓋の底部である。底部は幅広くやや弧状に下げたものである。10～12は身の把手の破片である。10・11は略台形を呈したもので概ね壺屋で一般的に見られるものである。12の標品はやや長方形を呈し、外面に豆粒状の突起が3ヶ見られる。今後、留意する資料かと考える。

## 炉

第26図13・14に示したものである。舌状の口縁部を内湾状に立ち上げ、胴部で膨らみ底部にいたる器形である。底部は高台に成形する。外面に白土により帯状の模様を横位に数条巡らす。「壺屋古窯群Ⅰ」<sup>註5</sup>のⅡ群aに該当するものである。

## フライパン状製品

第26図15に示したもので、把手の部分である。全体に浅鉢状の器形になることが、「壺屋古窯群Ⅰ」<sup>註6</sup>で知られている。

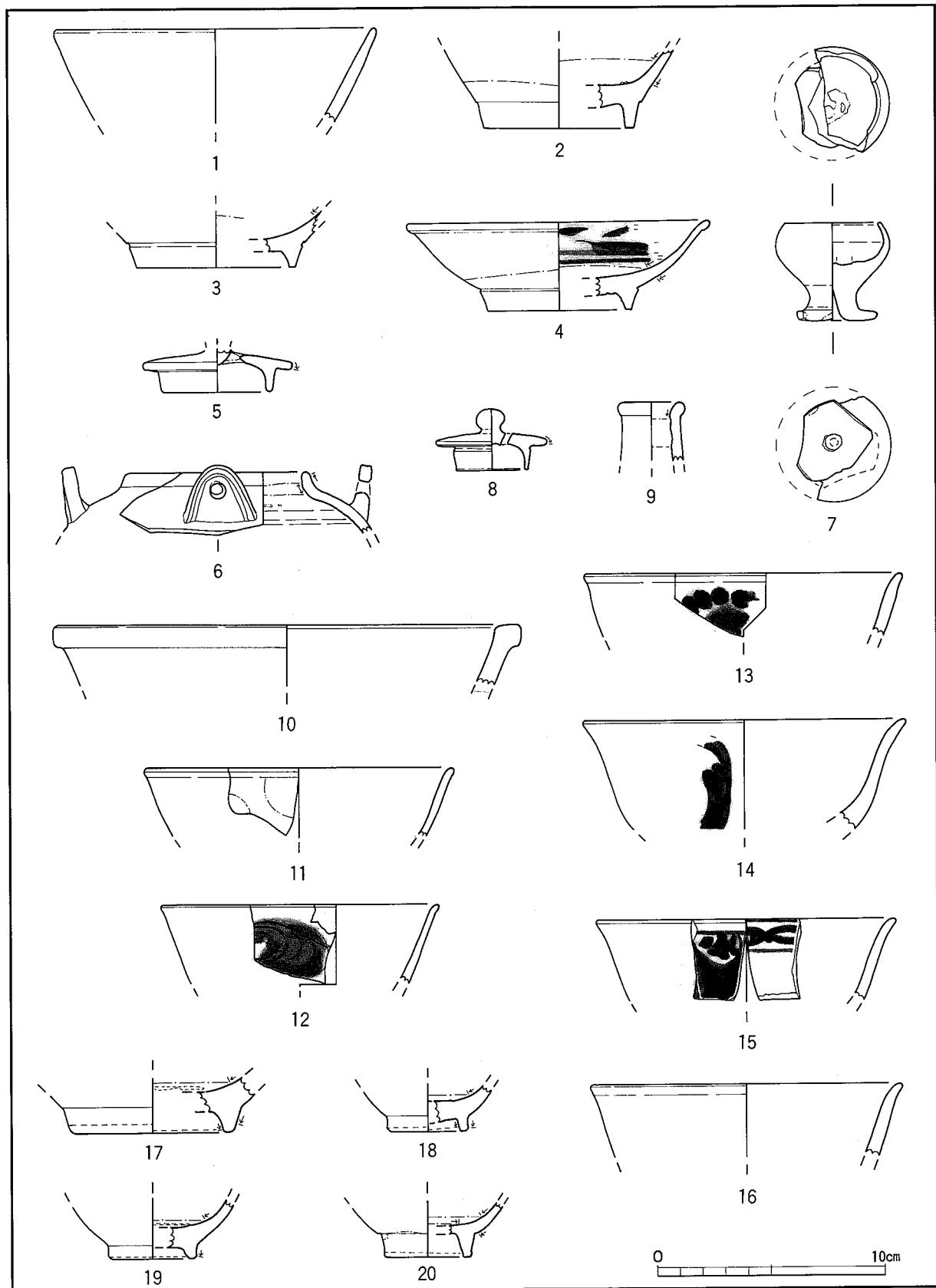
第13表 沖縄産陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	釉色	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地	施釉	貫入	文様	窯詰め 技法	出土地点
第25図 1 図版20の1	灰釉	碗	14.2 — —	灰白色の微 粒子 砂粒を混入	内・外面に施 釉。	なし	なし	目砂積み	か-6 II
〃 2 〃 2	〃	碗 の 底 部	— — 6.6	〃 高台・見込み は露胎。	〃	〃	〃	〃 見込みに 目砂が残 る。	く-9 I
〃 3 〃 3	〃	〃	— — 7.0	〃	〃	〃	〃	目砂積み	え-6 II
〃 4 〃 4	〃	皿	13.3 3.9 6.4	〃 焼成があま く全体に黄 白色を呈す る。	〃	〃	内面に筆描き による鉄絵	目砂積み	か-4 II
〃 5 〃 5	黒釉	水注 の 蓋	4.7 —	黄白色で粗 粒子。 黒色の粒子 を混入。	外面に施釉 内面は露胎。	なし	なし	不明	か-4 II
〃 6 〃 6	〃	水注 の 身	8.2 — —	〃 砂粒が僅か に観察でき る。	外面と内面頸 部に施釉。	あり 粗	〃	〃	か-6 III
〃 7 〃 7	〃	秉燭	4.2 4.3 3.5	灰白色の微 粒子	内・外面に施 釉 底面は露胎。	なし	〃	〃	か-5 II
〃 8 〃 8	飴 釉	水注 の 蓋	3.2 2.7	〃 細かい砂粒 が観察でき る。	上記5に同じ 発色が悪く緑 黄色を呈する	〃	〃	〃	う-8 II
〃 9 〃 9	〃	壺	2.8 — —	赤褐色で粗 粒子。 細かい砂粒 から観察で きる。	口縁部内面か ら外面に施釉。	〃	〃	〃	く-9 II

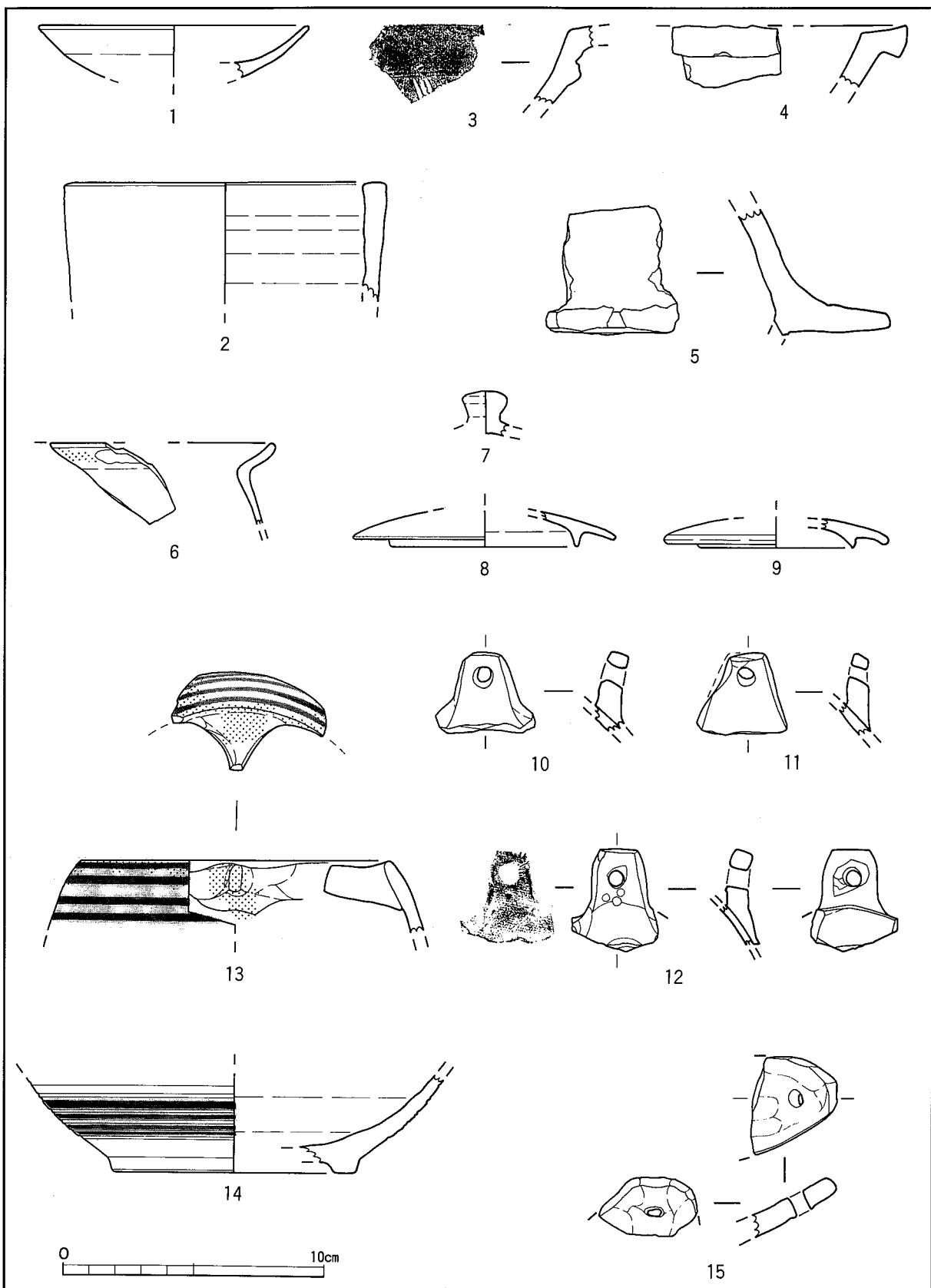
夕	10	夕	鉢	20.6	灰白色で微 粒子。	内外面に施釉 やや緑黄色に 発色。	なし	なし	不明	く-5 II
夕	10			-	-					
夕	11	白 釉	碗	13.6	夕	内外面に施釉。	あり 微	外面に緑釉を 施すが構図は 不明。	夕	う-8 II
夕	11			-	-					
夕	12	夕	夕	12.2	黄白色で粗 粒子。 - 黑色の粒子 が観察され る。	夕	あり 粗	外面に線掘り を施すが構図 は不明。	夕	か-5 II
夕	12			-	-					
夕	13	夕	夕	14.0	灰白色で粗 粒子。 - 茶褐色の粒 子が僅かに 観察	夕	あり 粗	吳須と飴釉に よる花文を描 く	白土積み	き-5 II
夕	13			-	-					
夕	14	夕	夕	14.3	上記12に同 じ	夕	夕	吳須による丸 文と巴文を描 く。	夕	集石
夕	14			-	-					
夕	15	夕	夕	13.2	上記と13に 同じ。	夕	夕	吳須による 外面：区画文 内面： 帯	夕	く-6 II
夕	15			-	-					
夕	16	夕	夕	13.7	夕	夕	あり 微	不明。	夕	お-5 II
夕	16			-	-					
夕	17	夕	碗 の底 部	- - 6.8	上記12に同 じ。 置付けは露胎。	夕	夕	夕	夕	か-5 II
夕	17			-	-					
夕	18	夕	小 碗 の底 部	- - 3.6	夕	夕	なし	夕	夕	え-5 I
夕	18			-	-					
夕	19	夕	夕	- - 4.0	夕	夕	内面 あり 微	夕	夕	か-5 II
夕	19			-	-					
夕	20	白 釉 + 鉄 釉	夕	- - 3.7	上記13に同 じ。	外面：高台脇 内面：総釉 高台は露胎。	夕	夕	夕	き-7 II
夕	20			-	-					

第14表 陶質土器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	口 径 器 底 (cm)	素地	色調	特徴	出土地点
第26図 6 図版21の 6	鍋	— — —	淡黄褐色 微粒子	外：灰黄褐色 内：淡黄褐色	内外面に轆轤痕が残る。 口縁部に煤痕が残る。	うー7 I
〃 7 〃 7	土瓶	— — —	〃	淡黄褐色	摘み部はやや平坦。	おー5 II
〃 8 〃 8	〃	7.3 —	灰黄褐色 素粒子	灰黄褐色	石灰質砂粒・ガラス質鉱物等が多量に混入。手触りザザラする。	くー9 II
〃 9 〃 9	〃	6.0 —	〃	外：灰黄褐色 内：黄土色	〃	えー7 II
〃 10 〃 10	〃	— — —	赤褐色 微粒子	赤褐色	手に粉末が残る。 赤色粒・黒色粒・ガラス質の鉱物等を混入。	えー7 II
〃 11 〃 11	〃	— — —	黄褐色 微粒子	黄褐色	〃	くー9 II
〃 12 〃 12	〃	— — —	淡黄褐色 微粒子	外：淡黄褐色 内：灰黄褐色	焼成良好。孔を穿った際の成形痕が残る。周辺に指紋が観察される。	おー5 II
〃 13 〃 13	炉	11.8 — —	〃	淡黄褐色	焼成良好。 煤痕が口縁部に残る。	かー6 II
〃 14 〃 14	〃	— — 9.4	〃	〃	赤色粒・茶色粒・ガラス質の鉱物を多量に混入。手触りがザラザラする。	えー9 II
〃 15 〃 15	フライパン 状製品	— — —	淡黄土色 微粒子	淡黄土色 芯部灰褐色	ナデによる調整。 赤色粒・茶色粒等が観察される。	うー7 II



第25図 (図版20) 施釉陶器：碗（1～3・11～17）・皿（4）・水注（5・6・8）  
秉燭（7）・壺（9）・鉢（10）・小碗（18～20）



第26図 (図版21) 無釉陶器：皿（1）・火入れ（2）・擂鉢（3）・鉢（4）・厨子甕（5）  
陶質土器：鍋（6）・土瓶（7～12）・炉（13・14）・フライパン状製品（15）

### p. 円盤状製品

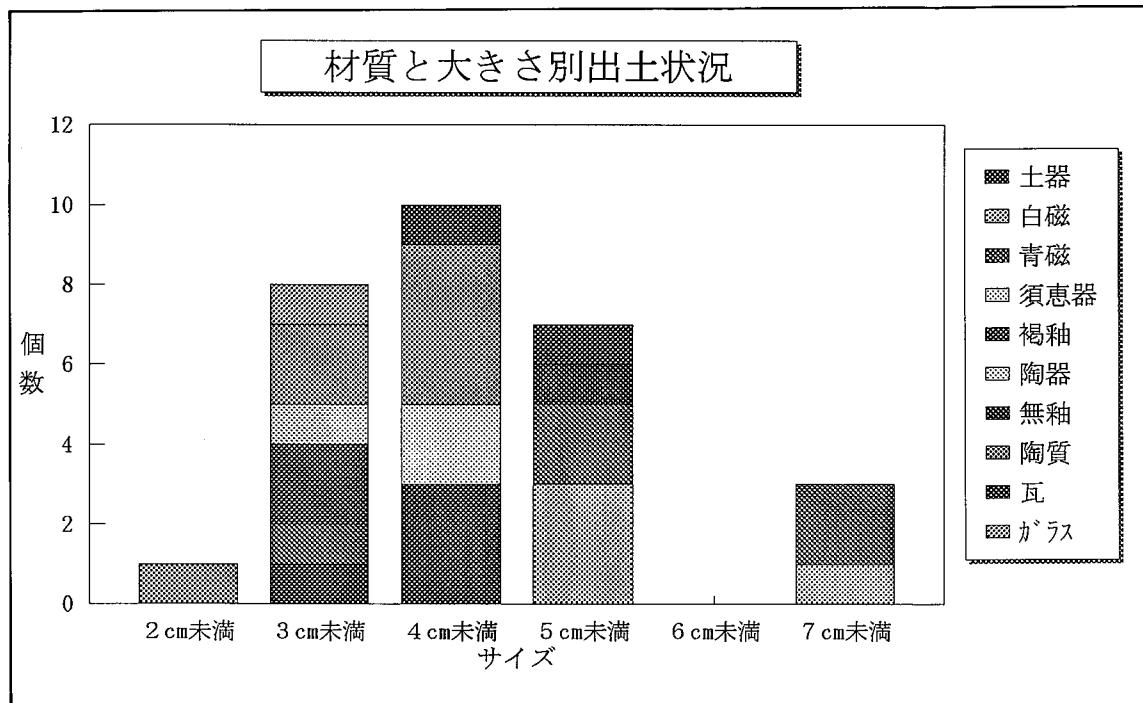
碗・皿・甕・瓦などの日常品を円形に2次加工した製品で、第15表に示したとおり29点得られた。特徴的なものを第27・28図に図示した。その表をもとに下図のグラフを作成した。

素材として土器・陶器・磁器・瓦などを用いているが、興味深いものとして、ガラス製の製品を用いたものも得られている。

サイズは、6.7~1.5cmの範囲に含まれ、概ね3~5cm台に集中して見られる。素材の種類もこの範囲に多く見られる。利用部位としては、胴部を加工しているものが多いが、大ぶりになると底部(高台)を用いる傾向が見られる。個々の観察は第16表に示した。

第15表 円盤状製品種類・大きさ別出土状況

種類 サイズ \	土器	白磁	青磁	須恵器	褐釉	陶器	無釉	陶質	瓦	ガラス	合計
2 cm未満								1			1
3 cm未満	1		1		2	1		2	1		8
4 cm未満	3			2				4	1		10
5 cm未満		3	2				1		1		7
6 cm未満											0
7 cm未満		1	2								3
合 計	4	4	5	2	2	1	1	7	2	1	29



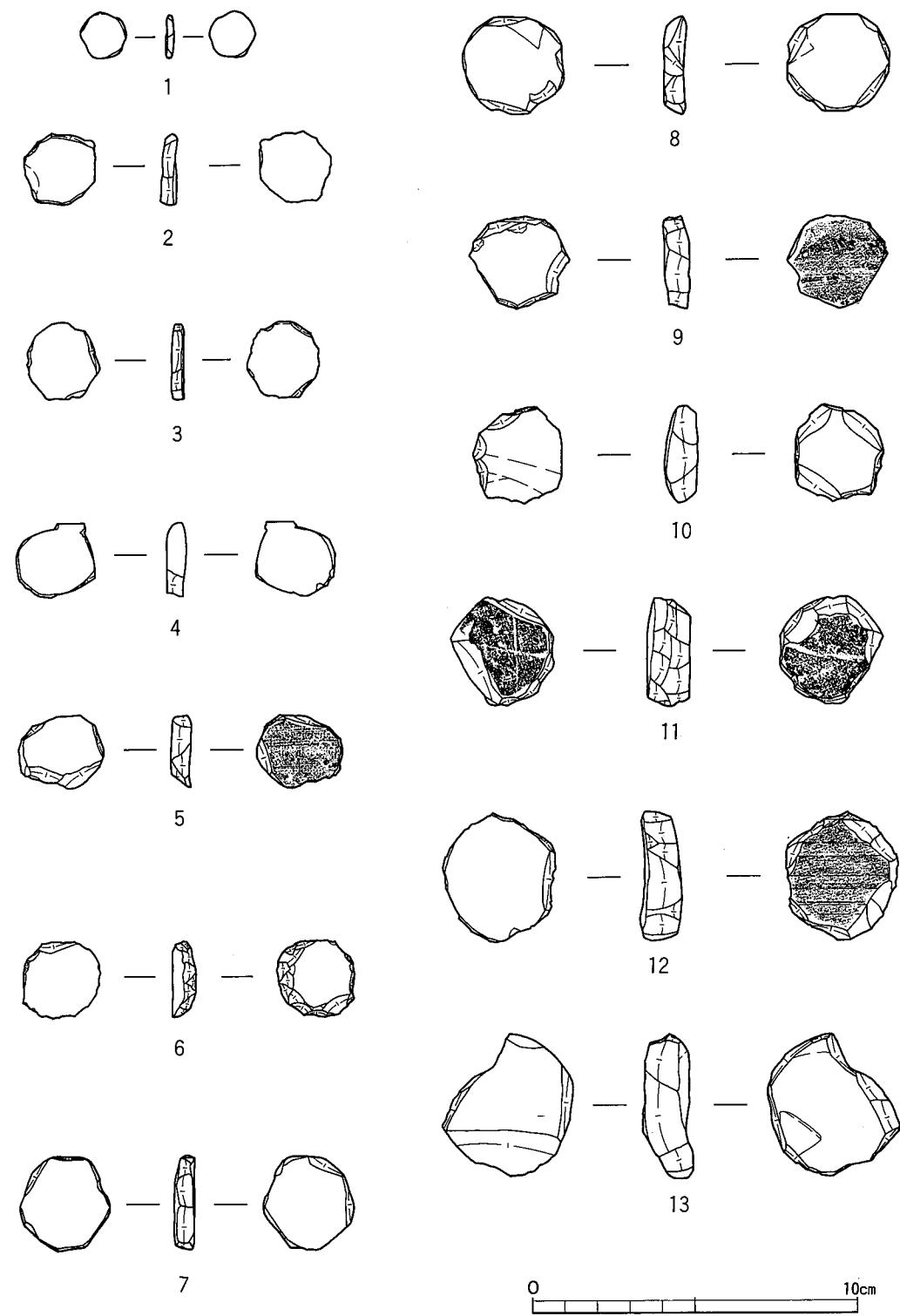
第16表 円盤状製品計測一覧

法量単位: cm, g

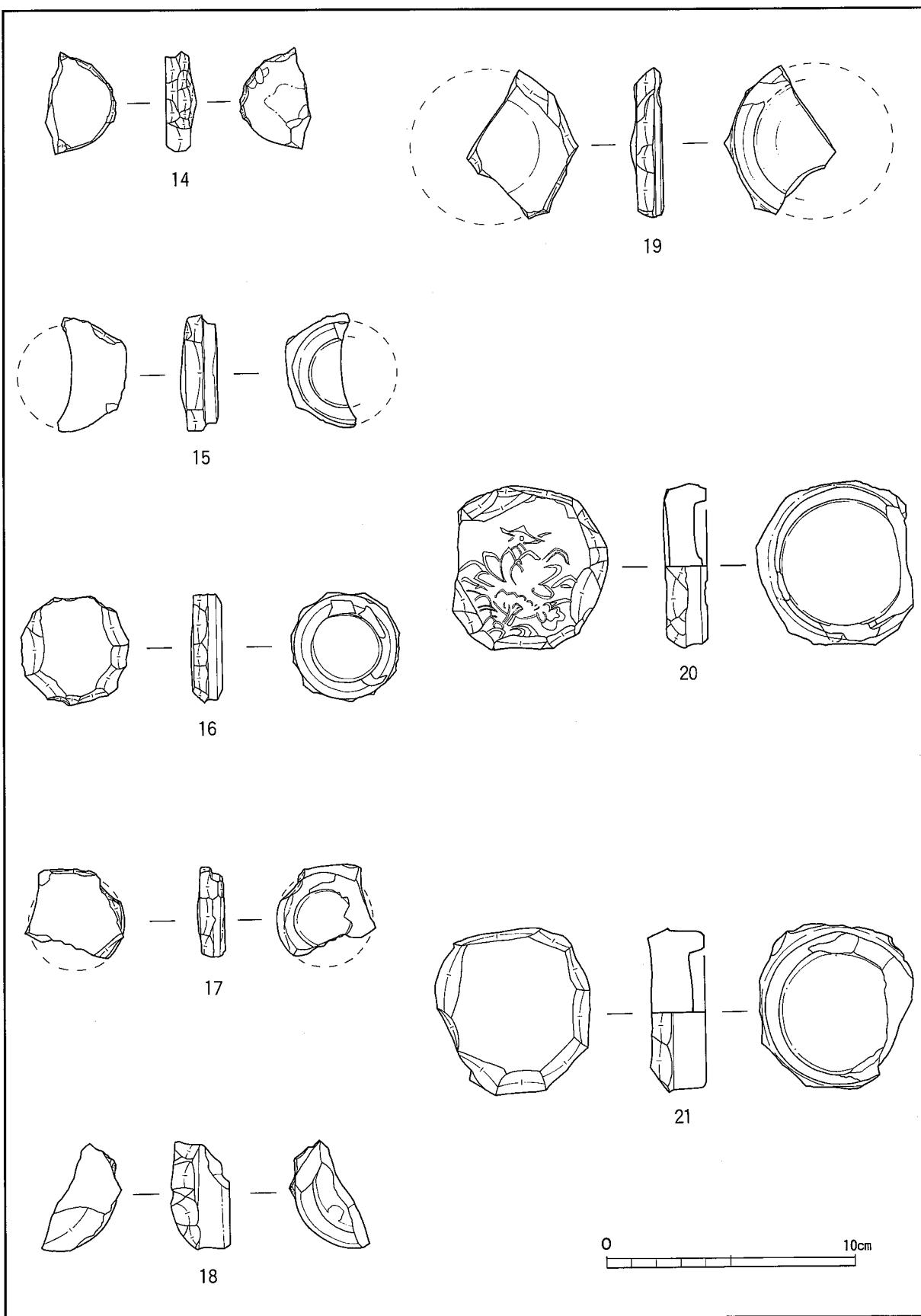
挿図番号 図版番号	計測 No	出土地		種類	器種	部位	完/破	最大径	最小径	厚さ	重さ	産地
		グリッド	層序									
第27図 1 図版22の1	1	か-10	I	陶質	不明	胴部	完形	1.5	1.4	0.2	0.5	沖縄産
〃 2	2	か-8	II	陶質	不明	胴部	完形	2.2	2.2	0.4	2.5	〃
〃 3	3	き-8	III	陶質	不明	胴部	完形	2.4	2.3	0.4	2.1	〃
〃 4	4	か-5	II	青磁	碗	口縁部	完形	2.4	2.3	0.6	5.4	〃
〃 5	5	く-5	II	褐釉	不明	胴部	完形	2.7	2.3	0.6	4.7	〃
〃 6	6	か-9	II	ガラス	不明	不明	完形	2.3	2.3	0.5	4.8	不明
〃 7	7	う-6	IIIa	土器	不明	胴部	完形	2.9	2.8	0.7	6.2	沖縄産
〃 8	8	か-6	III	土器	不明	胴部	完形	3.1	3.0	0.7	6.7	〃
〃 9	9	か-7	II	須恵器	不明	胴部	完形	3.1	2.8	0.7	8.7	徳之島産
〃 10	10	か-9	I	陶質	火炉	胴部	完形	3.0	2.7	1.1	8.0	沖縄産
〃 11	11	く-4	II	瓦	平瓦	胴部	完形	3.3	2.0	1.3	13.1	〃
〃 12	12	か-6	土留め状 遺構	無釉	不明	胴部	完形	4.0	3.4	1.0	21.1	〃
〃 13	13	か-5	II	瓦	平瓦	胴部	ほぼ 完形	4.4	4.2	1.2	20.3	〃
第28図 14 図版23の14	14	う-7	I	青磁	碗	底面	破損	4.0	—	1.2	15.6	外国産
〃 15	15	え-5	III	白磁	皿	底部	破損	4.6	—	1.0	19.1	〃
〃 16	16	う-6	III	白磁	皿	底部	完形	4.4	4.3	1.0	28.0	〃
〃 17	17	か-6	III a 溝	白磁	皿	底部	破損	4.4	—	0.9	14.3	〃

夕 18	18	か- 5	II	青磁	碗	底部	破損	4.2	-	1.6	24.5	本土産(肥前系)
夕 18												
夕 19	19	き- 6	IIIa	白磁	皿	底部	破損	6.1	-	1.1	23.7	外国産
夕 19												
夕 20	20	お- 6	IIIa	青磁	碗	底部	ほぼ 完形	6.9	6.5	1.3	66.0	夕
夕 20												
夕 21	21	か- 6	III	青磁	碗	底部	ほぼ 完形	6.6	5.9	1.7	105.7	夕
夕 21												
	22	き- 5	III	陶質	不明	胴部	完形	3.3	2.5	1.1	9.7	沖縄産
	23	? - 5	IIIa	土器	不明	胴部	完形	3.5	2.8	1.0	9.8	夕
	24	か- 5	III	須恵器	不明	胴部	破損	3.5	-	0.9	10.4	徳之島産
	25	か- 6	III	陶器	不明	胴部	破損	2.4	-	0.7	3.5	不明
	26	か- 7	II	土器	不明	胴部	破損	3.0	-	0.7	3.1	沖縄産
	27	か- 9	I	陶質	不明	胴部	完形	3.3	2.6	0.9	7.8	夕
	28	か- 6	土留 め状 遺構	陶質?	不明	胴部	破損	3.1	-	1.2	8.3	夕
	29	く- 6	III	褐釉	不明	胴部	完形	2.5	2.0	0.6	3.4	不明

平均 3.56 3.02 0.91 15.76



第27図 (図版22) 円盤状製品 (1~13)



第28図 (図版23) 円盤状製品 (14~21)

## q. 錢 貨

完形資料1枚、破片資料3枚の合計4枚が得られた。錢種は寛永通寶（江戸1626年）（註1）、乾隆通寶（清1736年）（註2）、判読不明なもの2枚である。すべてⅡ層から得られた。上記の破片資料の3枚は、すべて全体の1/3ないし1/4が欠損している。第17表に観察一覧を載せた。

### 『参考文献』

註1 陸原保 『改訂版 京洋古錢価格図譜 全』 志庵藏版 1970

註2 坂詰秀一編 『出土渡来錢－中世－』 考古学ライブラリー45 ニューサイエンス1986

第17表 錢貨観察一覧

(cm, g)

挿図番号 図版番号	出土地点 層 序	貨幣名	初鑄年	書体	法 量				材質	背 文	特 徴
					外径	穿径	厚さ	量目			
第 29 図 1 図版24の1	か-5 II	寛永 通寶	江戸 1626	楷書	2.50	0.60	0.14	2.40	銅製品	不明 (残存部) (は無背)	古寛永、寛永13年 (1636年)以降のもの と思われる。背は 闊縁。面、背とも状 態は良好。「寛」、「通」 部を斜めに約1/3ほど 欠損。
〃 2 〃 2	う-6 II 落ち込み	乾隆 通寶	清 1736	楷書	2.40	0.60	0.20	1.30	銅製品	残存部に満 州文字	闊縁タイプ。面背と も状態は比較的良好。 「寶」字部分が 欠損。
〃 3 〃 3	く-8 II	判読 不明	不明	不明	2.55	0.50	0.08	2.50	銅製品	不明	面背ともに腐食が進 行し、薄いため一部 の付着土は除去でき ない状況。銭文は確 認できない。面背に わずかに肉郭が認め られる。
〃 4 〃 4	か-4 II	判読 不明	不明	不明	2.80	0.50	計測 不可	3.00	鉄製品	不明	全体が赤錆びに覆わ れ錆びぶくれが酷 い。孔郭によって辛 うじて錢貨とわかる 状態。約1/4が欠損。

## r. 土製品

第30図に示した4点が得られた。

同図1、2は土玉である。1はナデによって器面調整がなされており、雑な球体に仕上がっている。色調は暗茶褐色で焼成は良好で固い。表面に沈線状の破損痕がみられる。最大径1.3cm。お-8、第Ⅱ層の出土。同図2に示したものは表面の剥落によって形状の伺えない資料である。残存部は橢円形を呈する資料で長軸に穿孔されている。土錘が想定されるが判然としない。最大長2.0cm、最大幅1.4cm、重量2.4g。え-8、第Ⅱ層の出土。

同図3に示したものはかなり加熱を受けた資料である。全体が凹凸面を有する土塊状を呈し、片面

に断面半円の溝が3条ないし4条観察できる。現状から推測すると「羽口」が想定されるが判然としない。残存長4.5cm、残存幅4.4cm。かー6、第Ⅲ層の出土。

同図4に示したものは端部で尖る扁平な円盤状の土製品である。断面観察より体部に尖り状の端部を接着している状況が見られる。表面にポーラスが見られ、片面は比較的丁寧なナデや指圧で調整されるが、裏面の調整は粗雑である。色調は全体に淡橙色を帯びるが、裏面の体部は淡褐色を呈する。グスク土器と同様の胎土、器面調整等の特徴を持つ。残存長5.2cm、残存幅5.4cm、厚さ1.0cm。かー6、第Ⅲ層の出土。

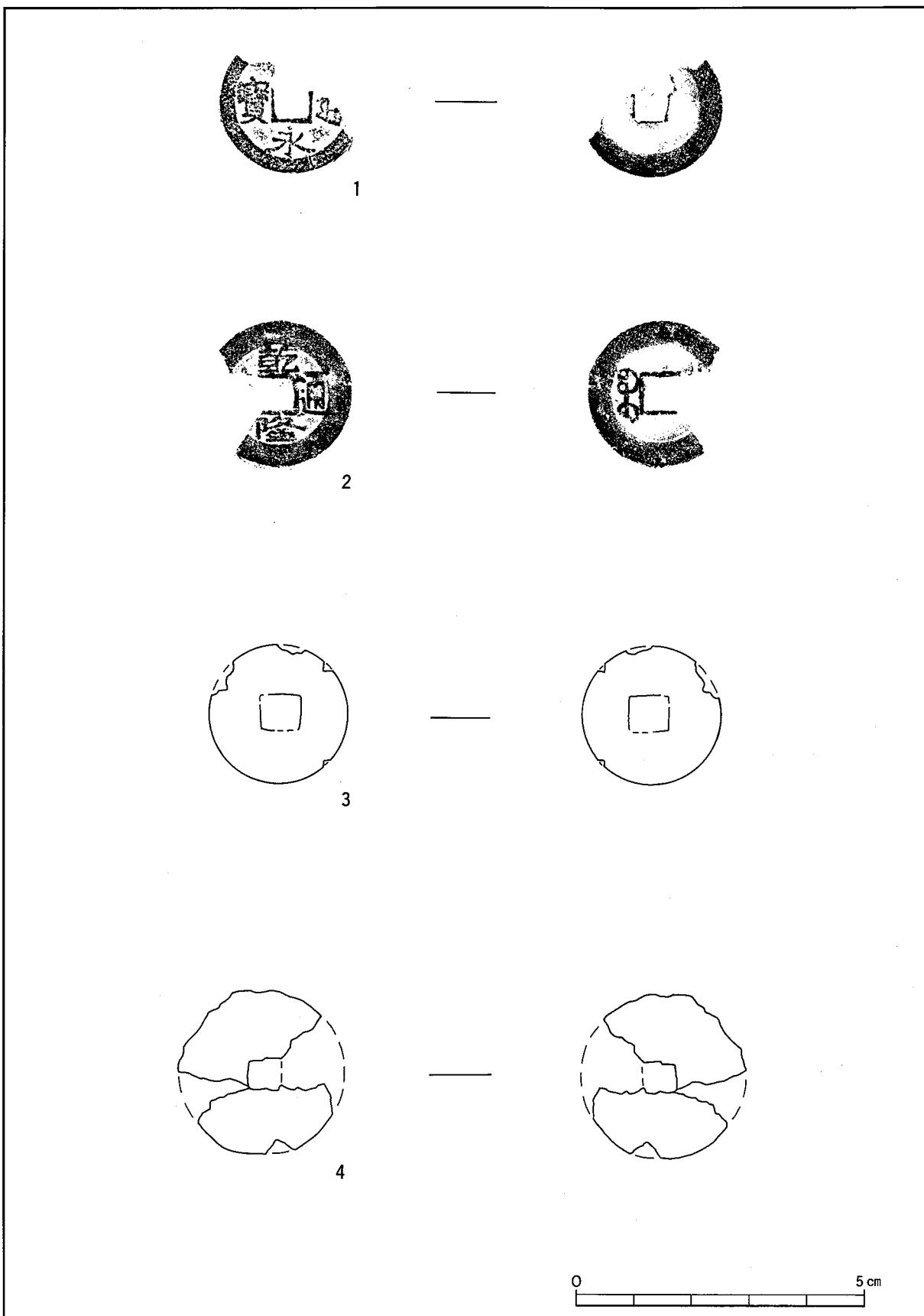
### S. 羽 口

全て土製の羽口片で20点得られた。その殆どが、内・外面は赤黄褐色を呈する。中には、かなり加熱を受けたものも見られ、外面灰褐色を呈しガラス状の溶着物の付着するものも得られた。胎土は砂質で手触りのザラザラするものが一般的である。

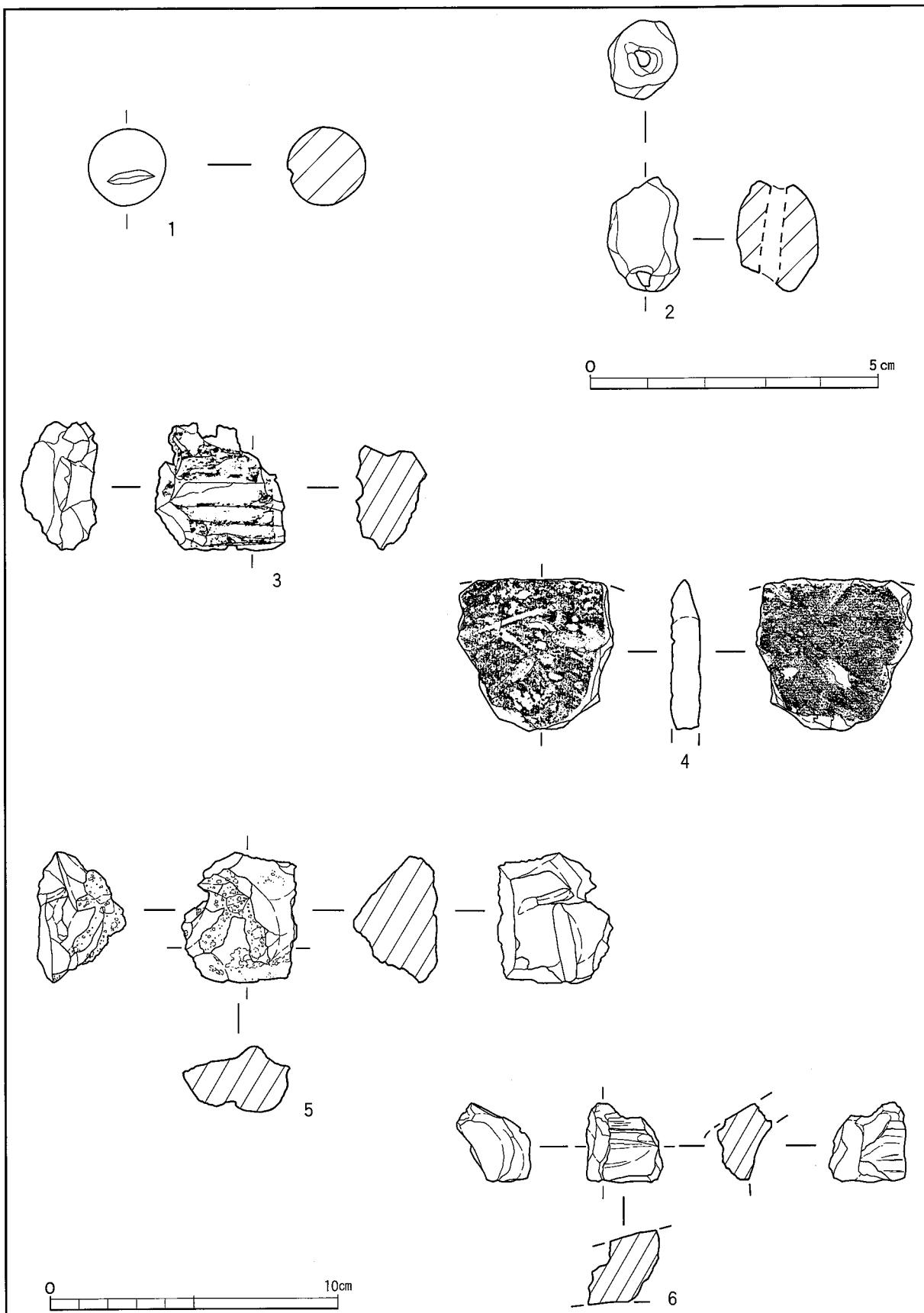
第30図5は、内・外面を円筒状に成形したものである。外面には溶着物が部分的に盛り上がって、気泡が顕著に観察できる。表面はかなり加熱を受け、胎土断面の中央部まで灰黒褐色に変色している。内面は黄赤褐色を呈する。胎土に細かい石灰質砂粒が観察できる。現存長3.5cm、現存幅4.0cm、厚さ2.9cmを測る。かー7、第Ⅲa層より出土。

同図6は内面は円筒状を呈し、外面は角を持つものである。外面に纖維状の筋痕が見られる。外面は淡い黄褐色で、内面は灰黄褐色を呈する。胎土等の特徴は典型的なグスク土器と同じものである。本標品は現状から推すると外形は4角形で、内面は筒状を呈するものと思われる。類例資料としては、糸満市の阿波根古島遺跡<sup>註7</sup>で得られている。従来、羽口は円筒状のものが知られており、外形が方形を呈するものの出土は2例目かと思われる。現存長2.3cm、現存幅2.7cm、厚さ2.3cmを測る。

えー5、第Ⅰ層より出土。



第29図 (図版24) 錢貨 (1~4)



第30図 (図版25) 土製品：土玉 (1・2)、羽口 (5・6)、不明 (3・4)

### t. 獣・魚骨類

本遺跡から出土した獣・魚骨類は量的に少ない。その殆どが第Ⅰ・Ⅱ層からの出土で近世に属するものと思われた。グスク時代の第Ⅲ・Ⅳ層からは、さらに希少であった。以下、獣・魚骨について概略を記す。

#### 1・魚類

コブダイの下咽頭骨の1個だけ確認された。

#### 2・鳥類

ニワトリだけが確認された。大腿骨右2本と脛骨左2本の出土であった。

#### 3・哺乳類

ヤギ・ブタ・イヌ・ウマ・ウシ・ヒトなどが確認された。

ヤギ：出土量は僅かであった。歯牙を観察すると幼獣と成獣が存在していたと思われる。

ブタ：第Ⅰ・Ⅱ層より比較的に多く得られた。土留め状遺構とおー6第Ⅱ層出土の上腕骨については、イノシシと思われる特徴が見られた。

イヌ：土留め状遺構の集積部のみからの出土。一個体と考えられる。

ウマ：基節骨が1点、第Ⅲ層より出土。

ウシ：上顎歯のM2が2個得られていることより、少なくとも2頭程は確認できる。その他に、大腿骨・上腕骨・脛骨等に切断痕が観察できる資料も得られている。

ヒト：第Ⅱ層と第Ⅲa層とで、歯が2点、破片で4点確認された。

#### < 参考文献 >

加藤嘉太郎『家畜比較解剖図説』 上巻 1991年 養賢堂

第18表 魚骨出土一覧

部位	層序		II層
	バラ科	コブダイ	
		下咽頭骨	1

第23表 ウマ骨出土一覧

部位	層序		III層
	基節骨	完存	
			1

第19表 ニワトリ骨出土一覧

部位	層序		II層
	上腕骨	骨体	
	L		1
大腿骨	近位端～遠位端	R	2
脛骨	近位端～骨体	R	1
	近位端	L	1
	遠位端	L	1
	遠位部	L	1
中足骨	近位端	L	1
合計			8

第21表 イヌ骨出土一覧

部位	層序		土留め状遺構
	環椎		
			1
上腕骨	遠位端	R	1
橈骨	骨体	L	1
尺骨	骨体	L	1
合計			4

第22表 イヌ歯牙出土一覧

部位	層序		土留め状遺構
	上顎歯	C	
		L	1
下顎歯	C	R	1
合計			2

第28表 ヤギ骨出土一覧

部位	層序		II層	不明	合計
	R	L			
下顎骨	1				1
	1	1		1	2
合計			2	1	3

第29表 ヤギ歯牙出土一覧

部位	層序		II層	不明	合計
	d m 2	L			
下顎	d m 3	L	1		1
	d m 4	L	1		1
歯	M 1	L	1	1	2
	M 3	R	1		1
合計			5	1	6

第20表 ヒト骨出土一覧

部位	層序		II層	III a層溝	合計
	C	L			
歯	2				2
部位不明		2		2	4
合計		4		2	6

第24表 ブタ骨出土一覧

部 位	層 序		I 層	II 層	III 層	III a 層	III a 層溝	土留め状遺構	IV 層	不 明	合 計
頭 蓋 骨	前頭骨	L		1							1
	頭頂～側頭	R		1							1
		L		1							1
上 顎 骨	破 片	R		1				1			2
		L		1							1
下 顎 骨	下顎角	R									0
		L		1							1
	破 片	R		1							1
		L		1							1
脊椎骨	腰 椎		1								1
肋 骨				1							1
肩 甲 骨	遠位端 (骨端骨はずれ)	L		1							
	破 片	R		1							1
		L		2							2
上 腕 骨	近位端～遠位端	R						1			1
		L		1							1
	両骨端骨はずれ	R								3	3
		L		2					1		3
	骨 体～遠位端	R		1							1
		L		1							1
	骨 体～遠位部	L		1							1
	骨 体	L					1				1
尺 骨	両骨端骨はずれ	R	1								1
		L	1								1
	近位端～骨 体	R	1								1
	近位部～骨 体 (近位骨端骨はずれ)	R		1							1
		L		1							1
	骨 体	R		1							1
		L		1							1
橈 骨	両骨端骨はずれ	R	1	1							2
		L	1	1							2
	骨 体	R		1							1
		L		1							1
大腿骨	近位骨端骨はずれ～遠位部	L	1								1
脛 骨	両骨端骨はずれ	L	2								2
	近位部～遠位部	R	1								1
	近位部～遠位部 (近位骨端骨はずれ)	R	1								1
	近位部 (骨端骨はずれ)	L	1								1
	骨 体	R		1							1
		L		2							2
距 骨	完 存	R		1							1
踵 骨	近位部～遠位部 (近位骨端骨はずれ)	L		1							1
	破 片	R		1							1
		L		1							1
第 2 中手骨	遠位端はずれ	R		1							1
		L		1							1
第 3 中手骨	近位端	R		1							1
		L		1							1
第 4 中手骨	両骨端骨はずれ	R	1								1
	近位端	R		1							1
		L		1							1
第 5 中手骨	遠位端はずれ	R		1							1
		L		1							1
基節骨	近位端はずれ	R		1							1
部位不明			4	16	1		2				23
合 計			22	54	1	1	2	2	1	3	86

第25表 ブタ歯牙出土一覧

部 位	層 序		II 層		土留め状遺構	合 計
	I 1	R	1			
上 顎 齒	C	L	2			2
	d m 3	R	1			1
		L	2			2
	d m 4	R	1			1
		L	2			2
下 顎 齒	P 4	R		⟨1⟩	⟨1⟩	
		L	1			1
	M 1	R	1		1	2
		L	1			1
	M 2	R	1	⟨1⟩	⟨1⟩	1
		L	2			2
	M 3	L	2			2
	I 1	R	1			1
		L	1			1
	I 2	R	1			1
		L	1			1
	I 3	R	1			1
		L	1			1
	C	L	1			1
	d m 2	R	1			1
	d m 3	R	1			1
		L	1			1
	d m 4	R	1			1
		L	1			1
	M 1	R	2			2
		L	1			1
	M 2	R	⟨1⟩		⟨1⟩	
		L	⟨1⟩		⟨1⟩	
合 計		⟨2⟩	32	⟨2⟩	1	⟨4⟩ 33

⟨ ⟩ は未萌出歯

第26表 ウシ骨出土一覧表

部 位	層 序		I 层	II 层	III 层	IIIa層溝	土留め状遺構	不 明	合 計
椎 骨									1
上腕骨	近位部～骨 体		L				1		1
尺 骨	骨 体		R		1				1
寛 骨	坐骨部		R			1			1
大腿骨	近位部～骨 体		L				1		1
	骨 体		L				1		1
脛 骨	近位部		R				1		1
	骨 体～遠位部		L			1			1
中手・足骨	骨 体				1				1
指趾骨	基節骨 完 存				1				1
	中節骨							1	1
部位不明			1	3		1	2		7
合 計			1	7	1	2	6	1	18

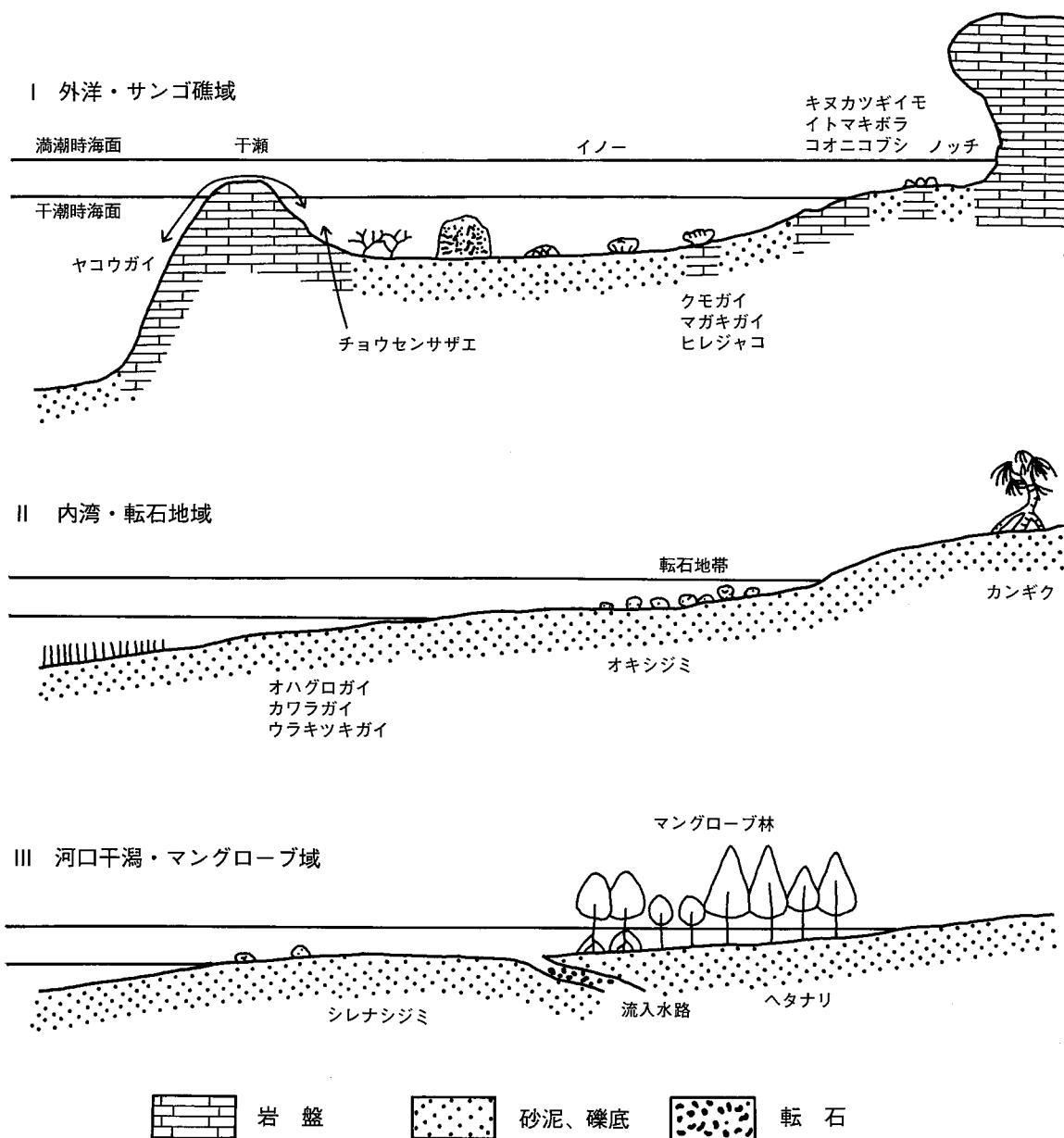
第27表 ウシ歯牙出土一覧表

部 位	層 序		I 層	II 層	III a層溝	合 計
上顎齒	M 2	L	1		1	2
下顎齒	M 2	R		2		2
	不 明			1		1
合 計			1	3	1	5

## u. 貝類

今回の調査で得られた貝類は、第30表に示したとおり腹足綱（巻貝）7科10種と斧足綱（二枚貝）6科5種類が確認された。出土量は最小個体数でそれぞれ19個体、10個体を数え全体的に希少である。下図に示したとおり全て浅瀬で採集されるものである。

その出土層位より、その殆どがグスク時代に帰属するものでなく後代のものと解した。当該期にはすでに捨て場が確立されたものと思われる。



### < 参考文献 >

- 吉良哲明『原色日本貝類図鑑』 第4巻 保育社 1985年  
 渡辺忠重『続原色日本貝類図鑑』 第25巻 保育社 1984年  
 島袋洋他『古我地原貝塚』 沖縄県教育委員会 1987年3月

第30表 貝類出土一覧

卷貝			I層			II層			III層	IIIa層			土留め状遺構			砲跡	合計			
NO.	科名	種名	完形	殻口	破片	完形	殻口	破片	完形	完形	完形	破片	破片	完形	殻頂	殻口	破片			
1	イトマキボラ科	イトマキボラ							1									1		
2	イモガイ科	キヌカツギイモガイ				1											1			
3	ウミニナ科	ヘナタリ	1	1		1	2										2		3	
4	オニコブシガイ科	コオニコブシ					1											1		
5	スイショウガイ科	クモガイ						1											1	
6		オハグロガイ	1														1			
7		マガキガイ				4											4			
8	フジツガイ科	不明											1				1			
9	リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ						1											1	
10		チョウセンサザエのフタ	3			1			1								5			
11		ヤコウガイ						1											1	
12		ヤコウガイのフタ			1			4					1	1					7	
13		カンギクガイ				1											1			
合計			5	1	1	8	3	8	1		1	1	1	15	0	4	11			
二枚貝			完形	殻口	破片	完形	殻頂	破片	完形	完形	完形	破片	破片	完形	殻頂	殻口	破片			
NO.	科名	種名	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
1	ウミギク科	不明											1					1		
2	ザルガイ科	カワラガイ						1										1		
3	シャコガイ科	ヒレジャコ							1										1	
4	シジミガイ科	シレナシジミ						1					1				1	1		
5	ツキガイ科	ウラキツキガイ	1	1			2	5								3	6			
6	マルスダレガイ科	オキシジミ							1										1	
合計			1	1			2	6	1	2			1	1		3	9	1	0	0

## 第VI章　まとめ

以上、発掘調査の成果について述べてきた。調査に至る経緯については、第Ⅰ章でも述べたように那覇市水道局の真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査であった。調査は直径32mの円形に限られた調査範囲であったが、多大の成果が得られた。

ここでは、発掘調査の成果をいま一度整理して若干の要点に触れまとめとしたい。主に、グスク時代を中心に述べたい。

立地は第Ⅱ章でも述べたように、本遺跡は那覇港に向かって北は安里川、南は国場川に挟まれた識名台地のほぼ中央に位置する。西方前方には慶良間諸島が眺望でき、北方には首里城跡を中心とした首里台地が展開する。南側は南部の丘陵地帯が一望できる景勝地に立地する。グスク時代の頃はかなり格好の立地を示していたものと思われる。

多和田真淳氏はこのような立地条件と高麗系瓦の出土遺跡に比較検討を加え、さらに、「シーマ御嶽」で唱われる祝詞に着目し「察度の首里城遷都論<sup>註8</sup>」を展開した著名な遺跡もある。

さて、調査の結果、層序は地山を含めて5枚確認された。第Ⅰ層は戦後の客土層で遺跡全体を被う形で見られた。遺物は主に近代のものが得られた。第Ⅱ層は戦前からの旧表土と考えられグスク時代～近世の遺物が混在した形で出土した。第Ⅲ層が本遺跡の主体の層で、グスク時代のものが主に得られ僅かに後期土器が見られた。第Ⅳ層もグスク時代の包含層であるが、確認された面積が小規模のためグスク土器のみが得られた。

遺構は、土留め状遺構やピット群・列状遺構等が調査区北東側において集中的に検出された。これらの遺構群の配置を詳細に見るとピット1群のテラスとピット2群のテラスには比高差が見られ、その間には、僅かに空地も見られた。その遺構群に沿って「へ」の字状に土留め状遺構が巡らされる形で検出された。さらに、テラス上には列状のピット群（板塀？）が検出された。これらの遺構群はその検出状況より、一つの有機的な繋がりを持つものと推察された。

また、興味深いことにピット群は、従来当該期の発掘調査で検出される掘立柱の建物のピット群とは異なり、かなり規格性を持つものであった。一概に建物跡とは捉え難いピットの出土状況であった。

このような遺構（特に、ピット）は、県内において初例をなすものと思われ、グスク時代の集落のあり方や空間利用を考える上で興味深い事例を提供したものと思われる。今後の資料の追加を待ち、あらためて検討を加えたい。

出土遺物は、他の当該期の遺跡に比較して出土量は少なかった。自然遺物は貝類・獸骨などが僅かに見られたが、既に当該期には捨て場が確立されていたものと思われる。

人工遺物はグスク時代に属する遺物が殆どであった。陶磁器から年代観を見てみると、12c代の玉縁口縁白磁、14c後半～15c代の青磁・白磁、16c～以降の青花等が得られた。出土量・種類等から本遺跡のメインの時期を見ると、14c後半～15c代が活況を呈したものと思われる。

土器は、グスク時代に帰属する泥質で滑らかな黄褐色（Ⅱ種c・dタイプ）の土器が殆どであった。滑石混入土器も比較的多く確認された。その他に僅かであるが貝塚時代後期に属する厚底の土器も得られている。この貝塚時代後期の土器は、豊見城村伊良波東遺跡<sup>註9</sup>、北谷町サーク原遺跡<sup>註10</sup>、宜野湾市安仁屋トゥンヤマ遺跡<sup>註11</sup>などで同様な出土状況を呈しており、グスク時代直前まで残るものと思わ

れる。その他に、注目される資料として土製の羽口と滑石製品が挙げられる。前者は破片であるが量的に出土がみられ、遺跡内において「鍛冶」を行っていたものと想定される。ただ、残念なことは明確な「鍛冶跡」は確認されなかった。後者は近年当該遺跡より二次製品（加工品等）の出土が知られ、かなり県内において流布していたもの思われる。さらに、一次製品の「バレン状製品」の出土も特筆される。本標品は県内においては沖縄市の大里エーヤマ遺跡<sup>#12</sup>・豊見城村伊良波東遺跡<sup>#13</sup>について3例目である。本標品は長崎県<sup>#14</sup>において顕著に出土が知られており、今後増加する資料かと思われる。

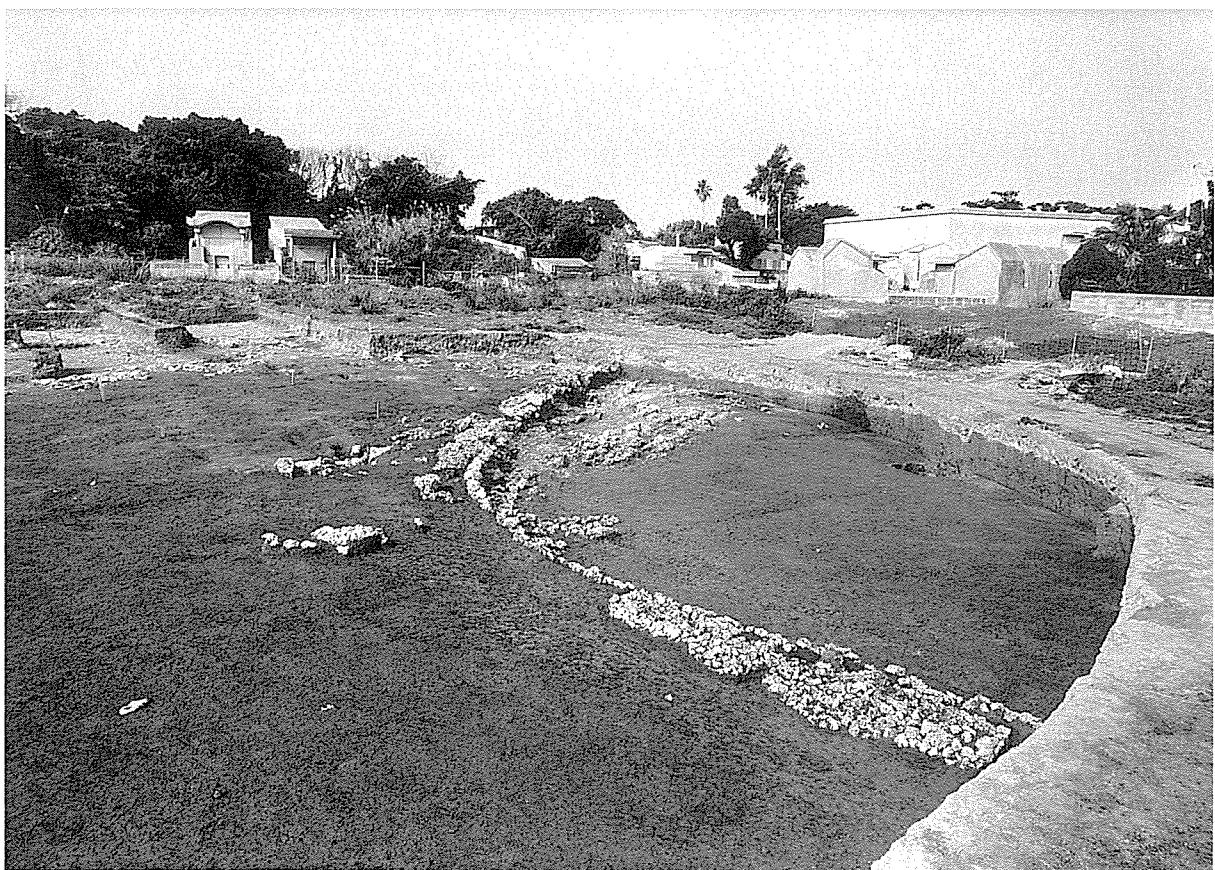
以上のことから、本遺跡はグスク時代直前から近世にかけて生活が営まれていたことが窺えられる。主体はグスク時代中ごろの特異な集落跡かと考える。

最後に、本遺跡は試掘・発掘調査の結果、遺跡分布調査<sup>#15</sup>で記載された範囲よりも広範囲に及ぶことが確認された。本遺跡が識名霊園・住宅地等の周辺へ延びていることは明らかであり、今後とも公共工事・民間開発等の場合には文化財保護当局と充分な協議が必要である。

### 《 参考文献 》

- 註1：多和田真淳「琉球列島の貝塚文化と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会  
1956年
- 註2：長崎県教育委員会・松浦市教育委員会『楼階田遺跡』 1985年
- 註3：島 弘・太田宏好他『伊良波西遺跡』 豊見城村教育委員会 1986年
- 註4：島 弘・内間 靖・玉城安明・島袋春美『壺屋古窯群Ⅰ』那霸市教育委員会 1992年
- 註5：註4に同じ。
- 註6：註4に同じ。
- 註7：金城亀信・長嶺均他『阿波根古島遺跡』沖縄県教育委員会 1990年
- 註8：多和田真淳「首里城の古錢と首里遷都」『琉球新報』 1965年10月4日～8日掲載
- 註9：安里嗣淳・島 弘他『伊良波東遺跡』 豊見城村教育委員会 1987年
- 註10：安里嗣淳・島 弘他『北谷町サーク原遺跡』 沖縄県教育委員会 1987年
- 註11：島袋 洋・大城聖子『安仁屋トゥンヤマ遺跡』沖縄県教育委員会 1992年
- 註12：宮城利旭・比嘉賀盛『沖縄市の埋蔵文化財』沖縄市教育委員会 1982年
- 註13：註9に同じ。
- 註14：註2に同じ。
- 註15：上原 静・太田宏好他『那霸市の遺跡』 那霸市教育委員会 1982年

# 図 版



図版 1 上：北より遺跡を望む（中央の円形部が調査地区）  
下：調査地区の全景（右上の建物は識名の納骨堂）



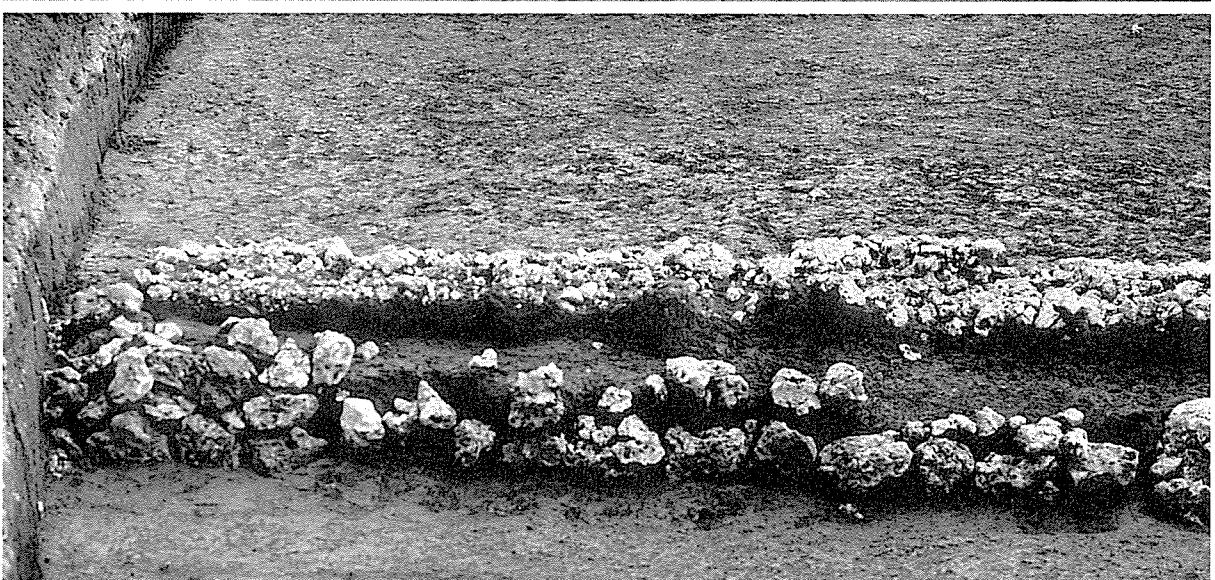
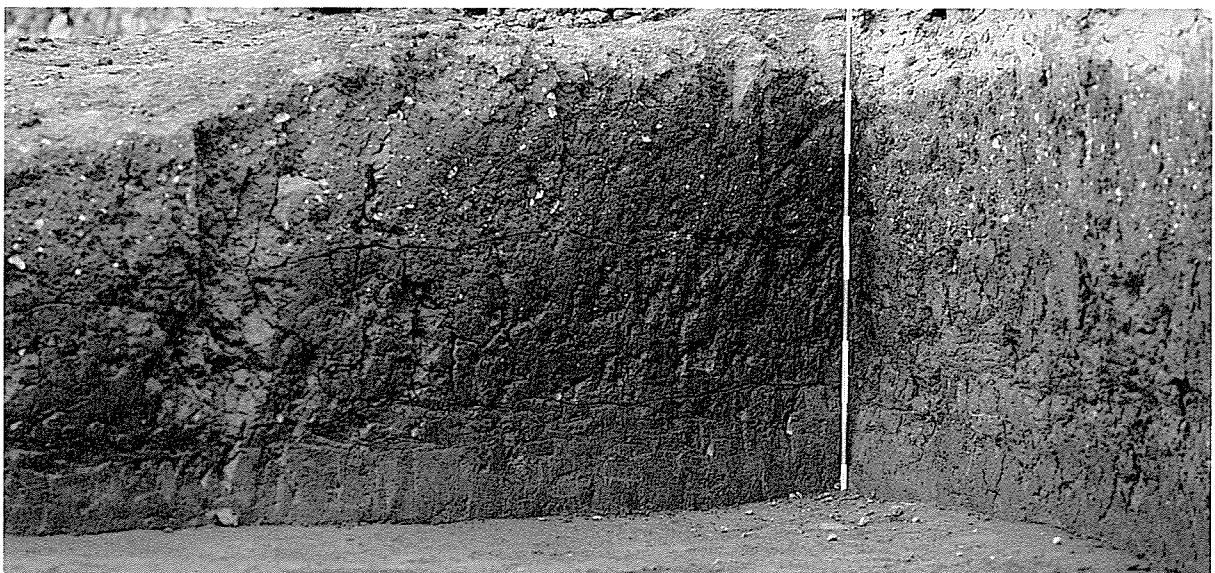
発掘調査風景  
(表土剥ぎの状況)



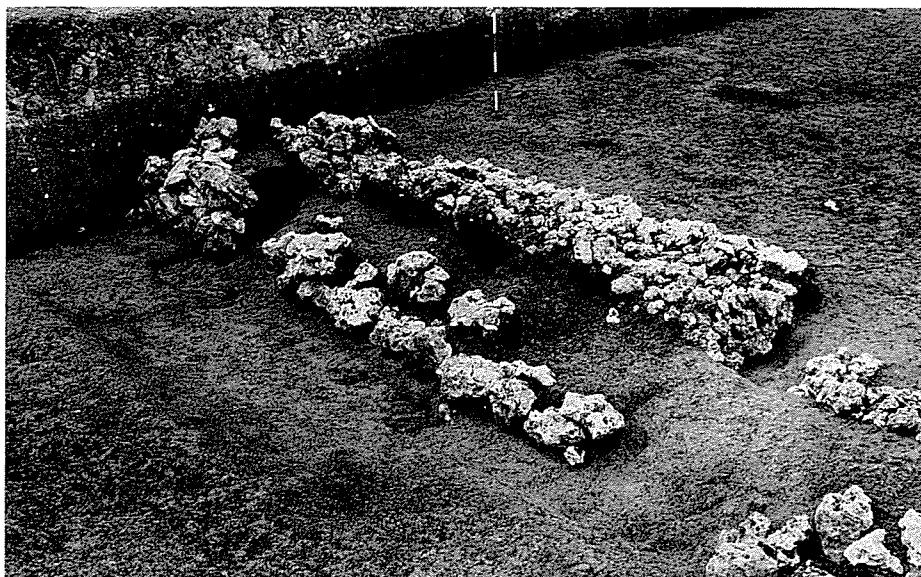
〃  
(遺物包含層の露出状況)



〃  
(遺構露出状況)



図版 3 上：6 ラインの層序と土留め状遺構の露出状況  
中：おー4 グリッド層序の近景  
下：集石遺構と土留め状遺構



集石・土留め状遺構の  
半裁全景



集石・土留め状遺構の  
半裁状況



集石・土留め状遺構の  
完掘状況  
(地山にピットが露出)



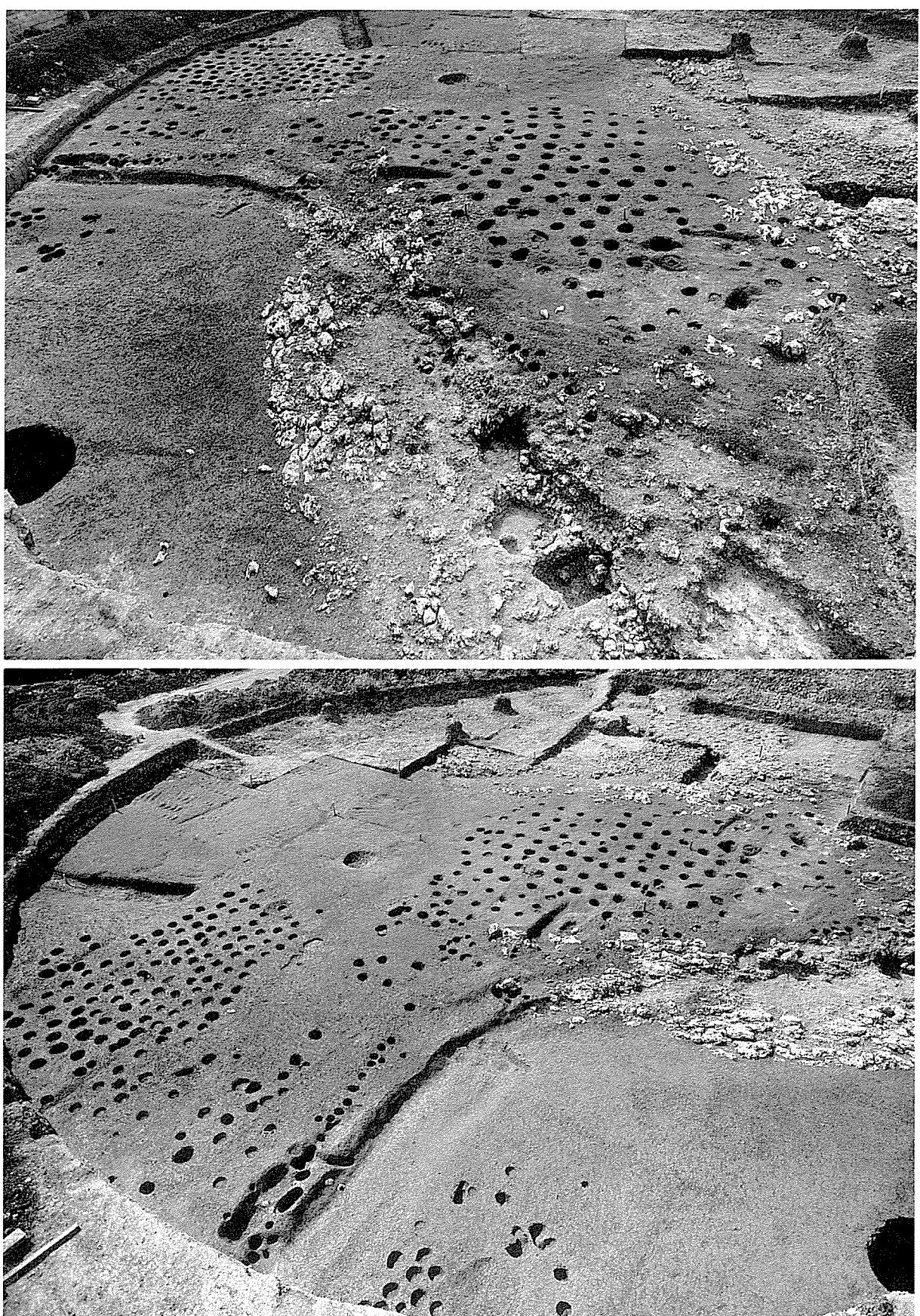
土留め状遺構の全景  
(東側より)



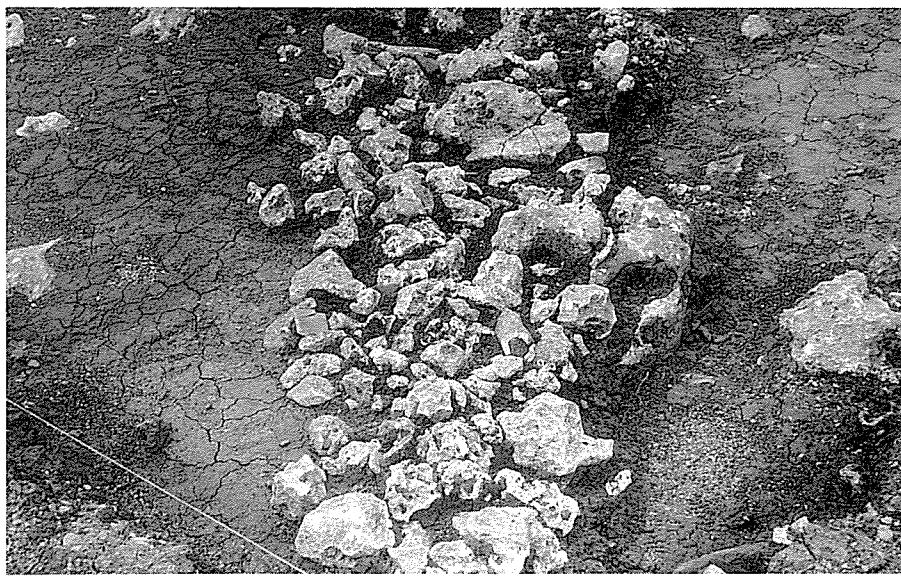
溝跡の断面状況と  
土留め状遺構



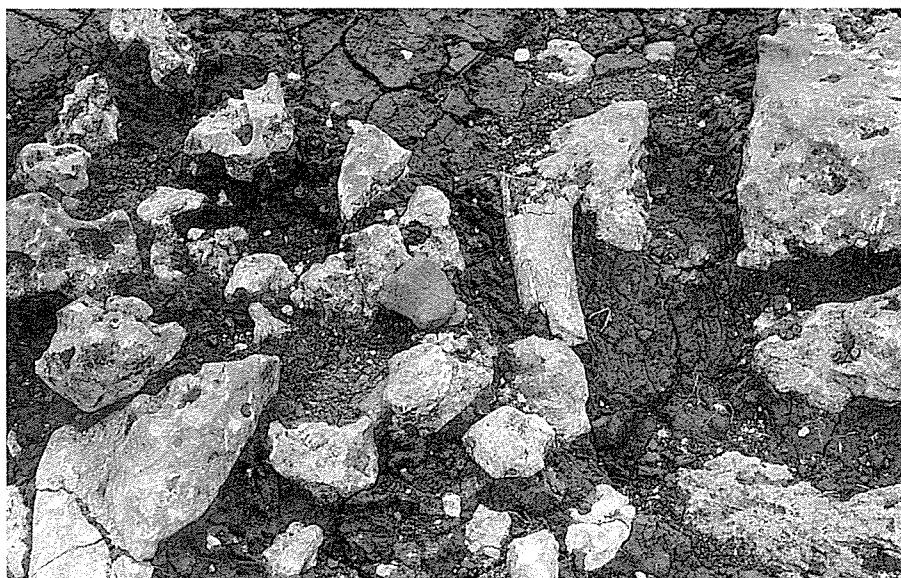
帯状遺構の近景



図版 6 上：遺構完掘状況（北西側より）  
下：遺構完掘状況（北東側より）



土留め状遺構と出土遺物

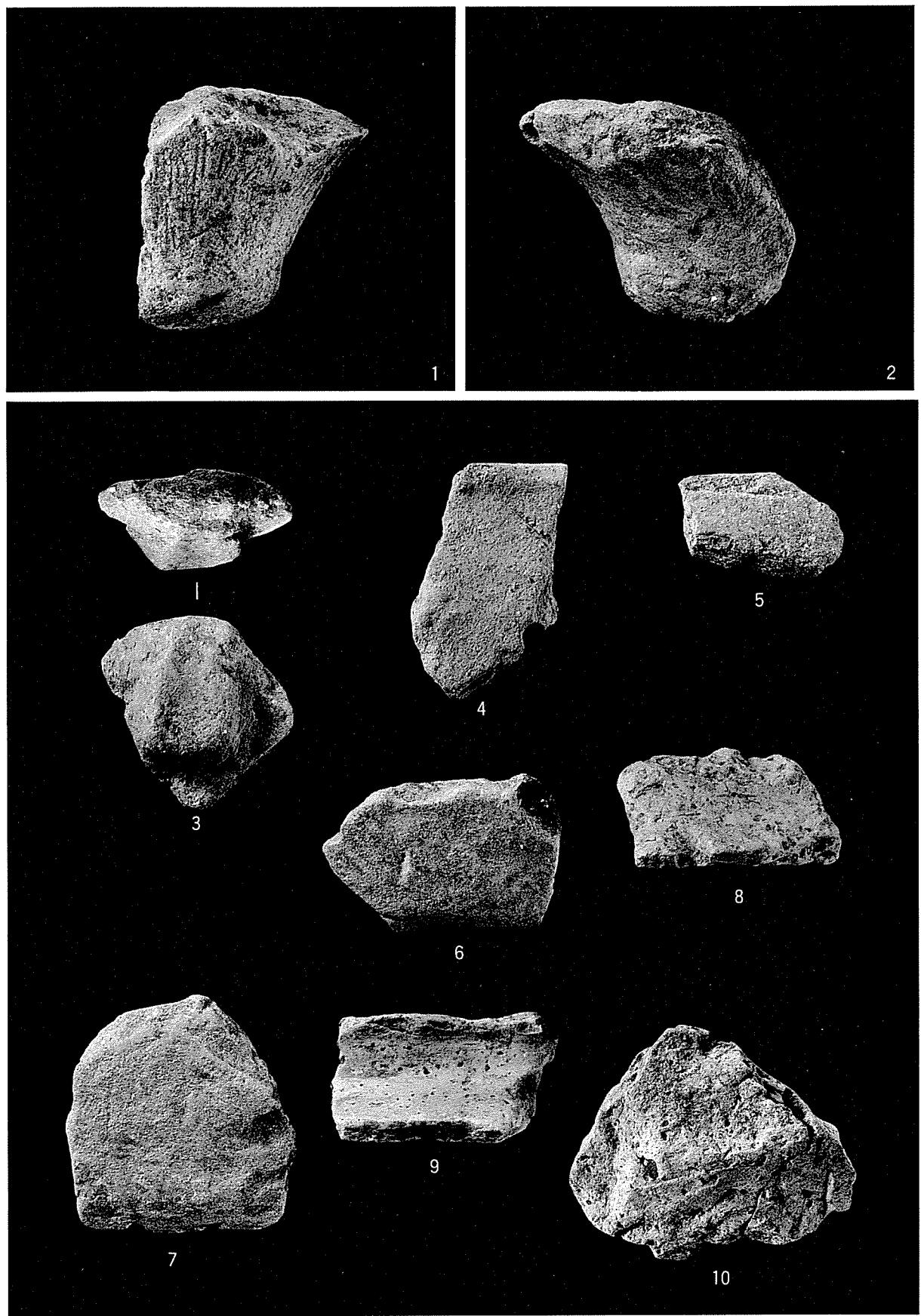


後期土器と牛骨出土状況

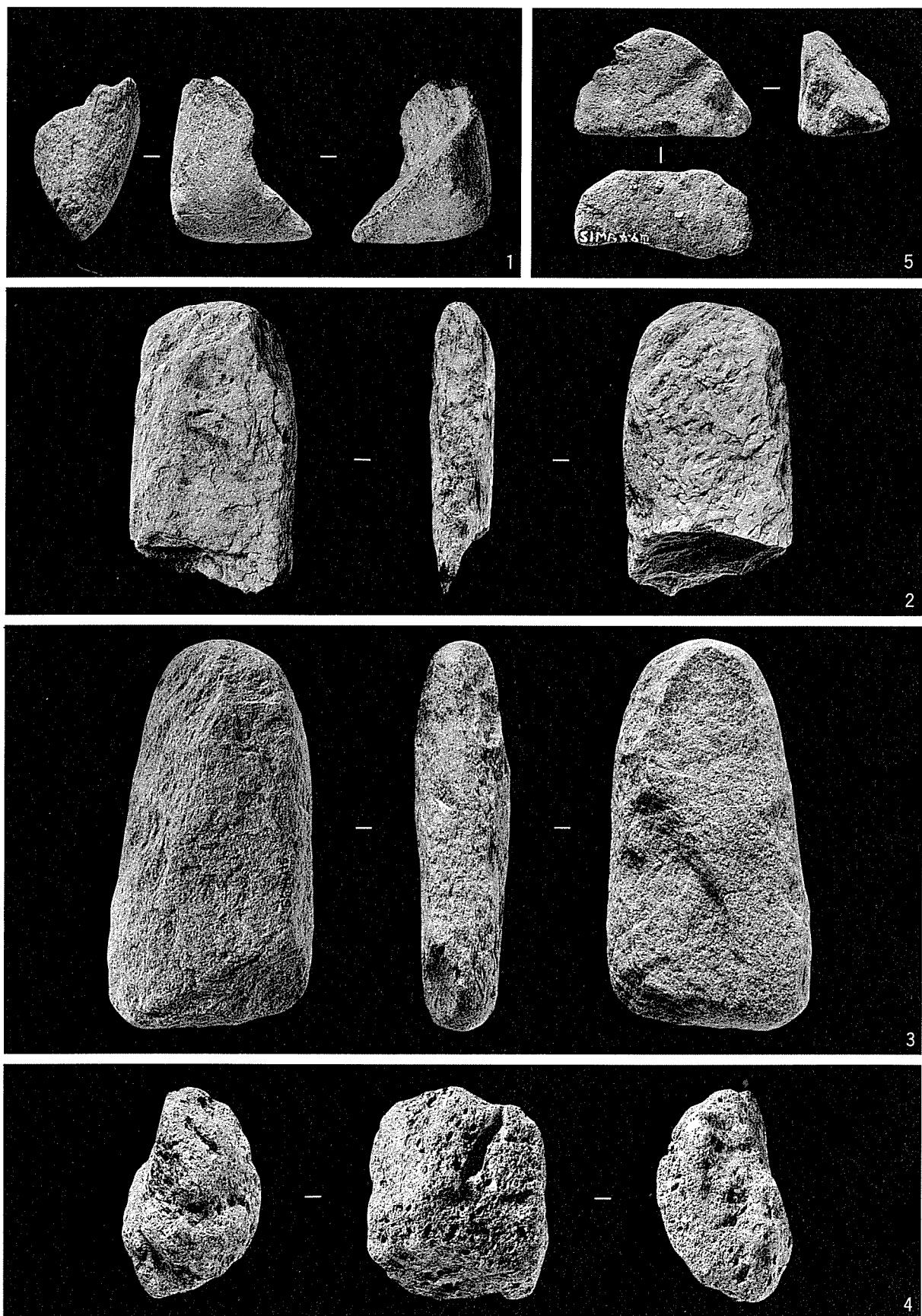


石器（用途不明品）  
出土状況

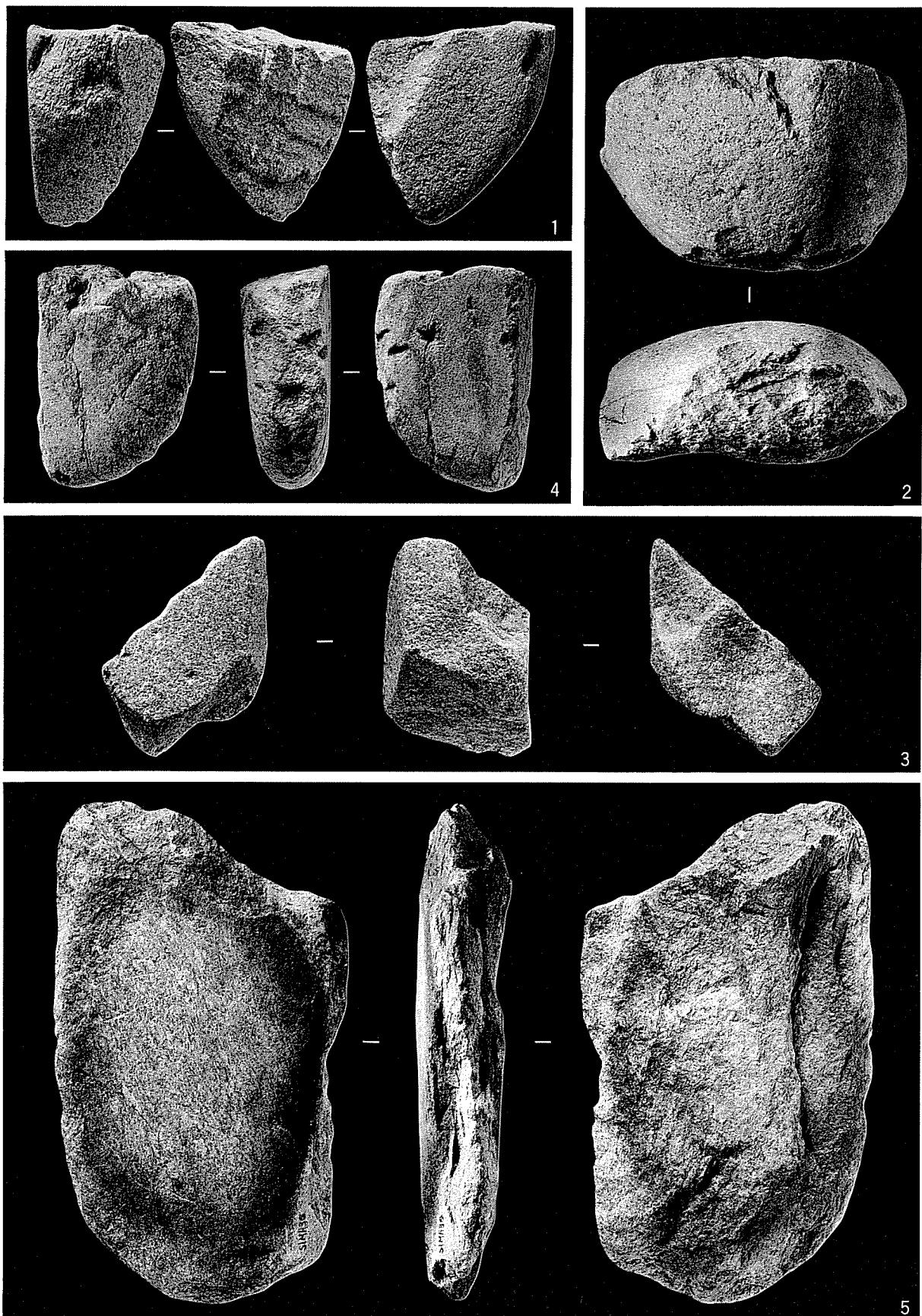
図版 7



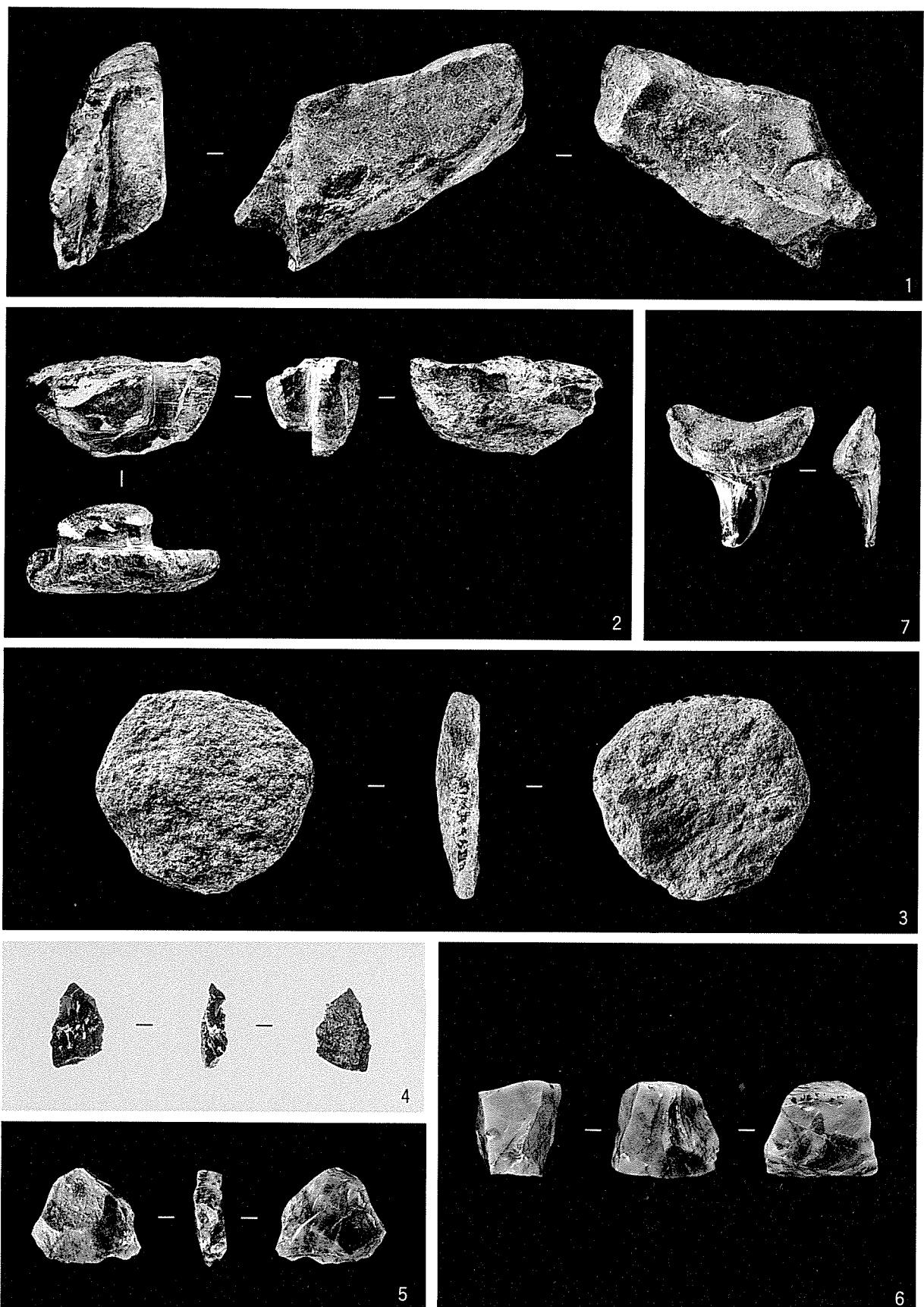
図版 8 (第13図) 土器：後期土器 (1・2)、グスク土器 (3~10)



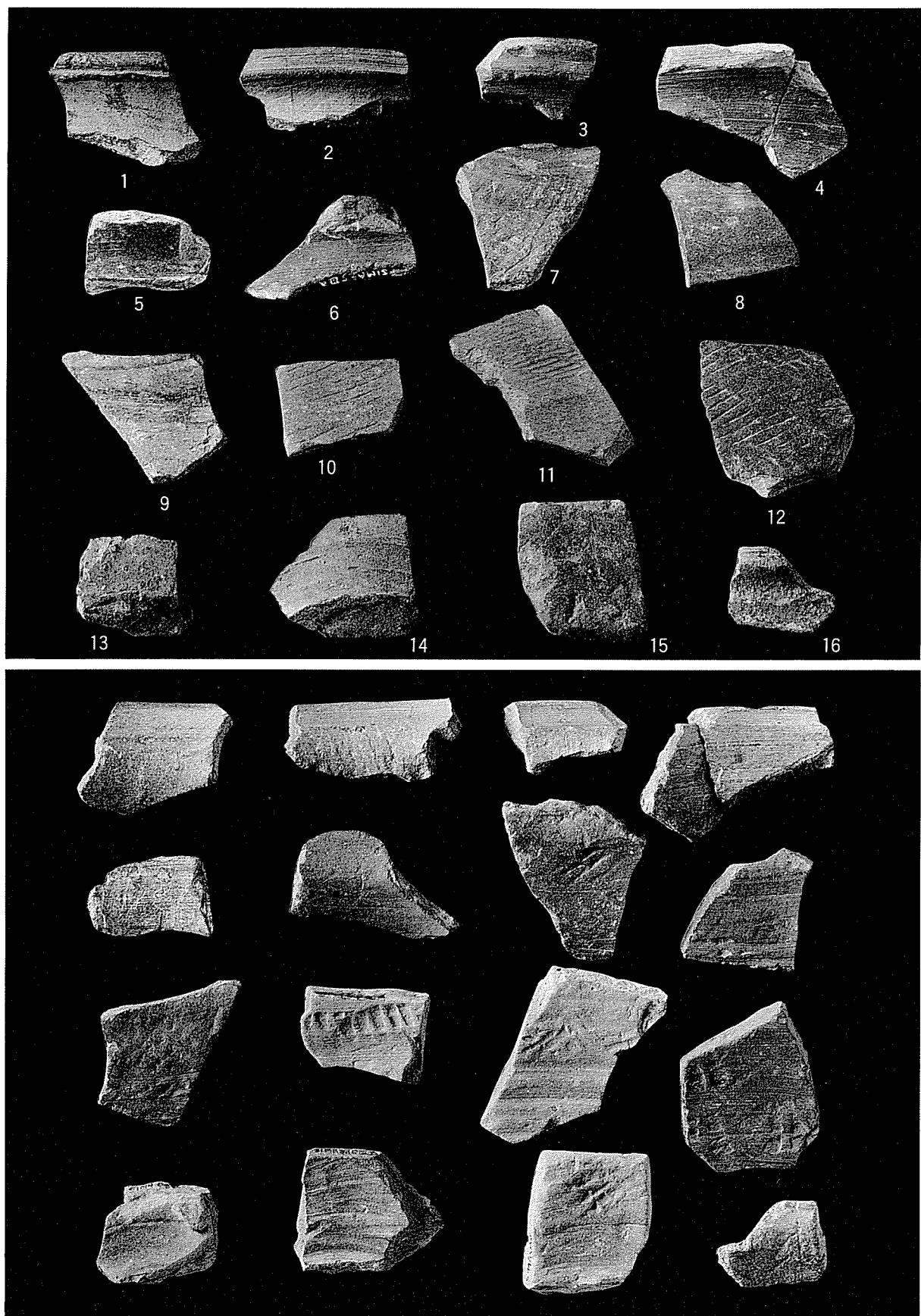
図版9 (第14図) 石器：石斧（1～3）、軽石製品（4・5）



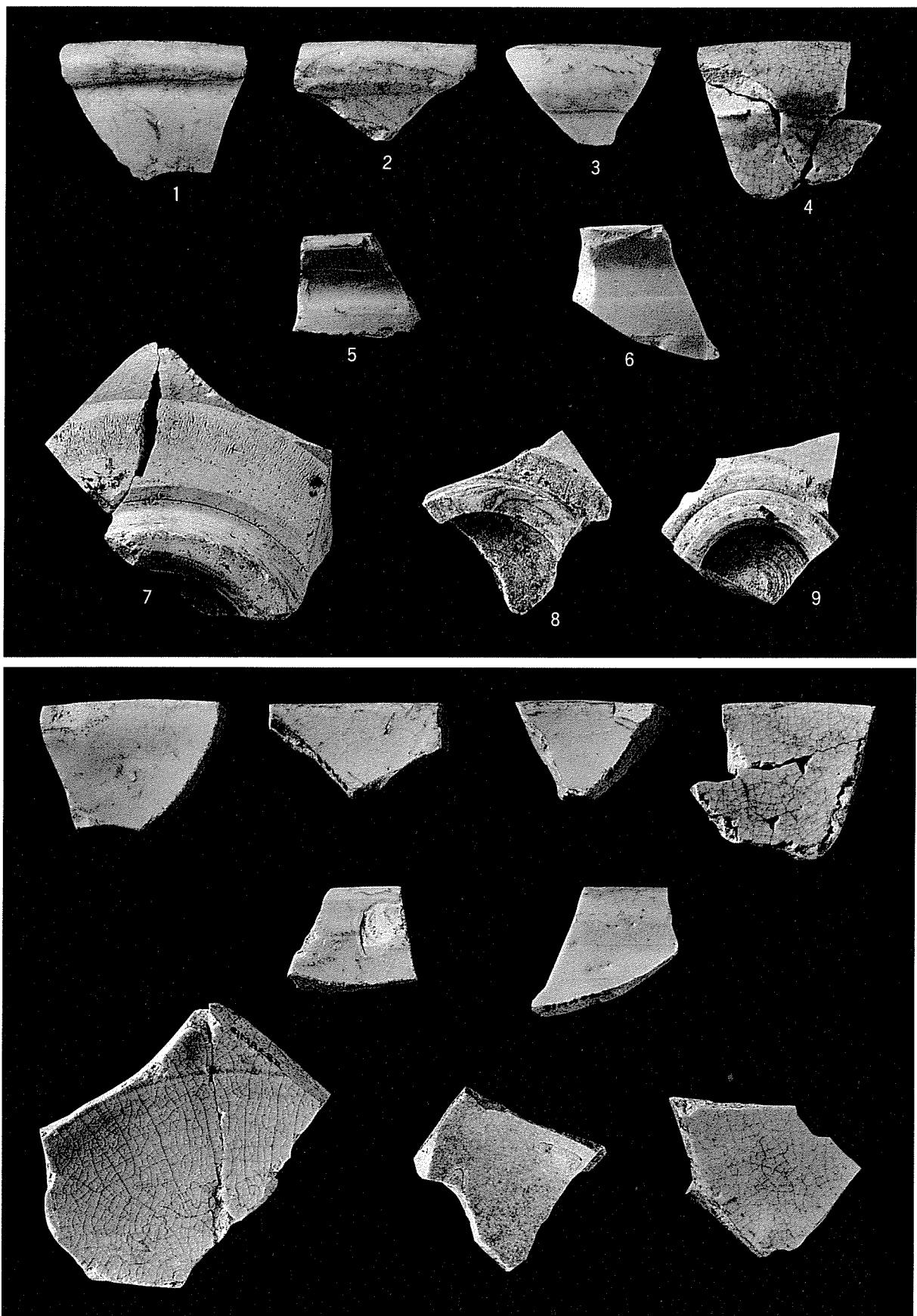
図版10 (第15図) 石器：すり石 (1～4)、用途不明品 (5)



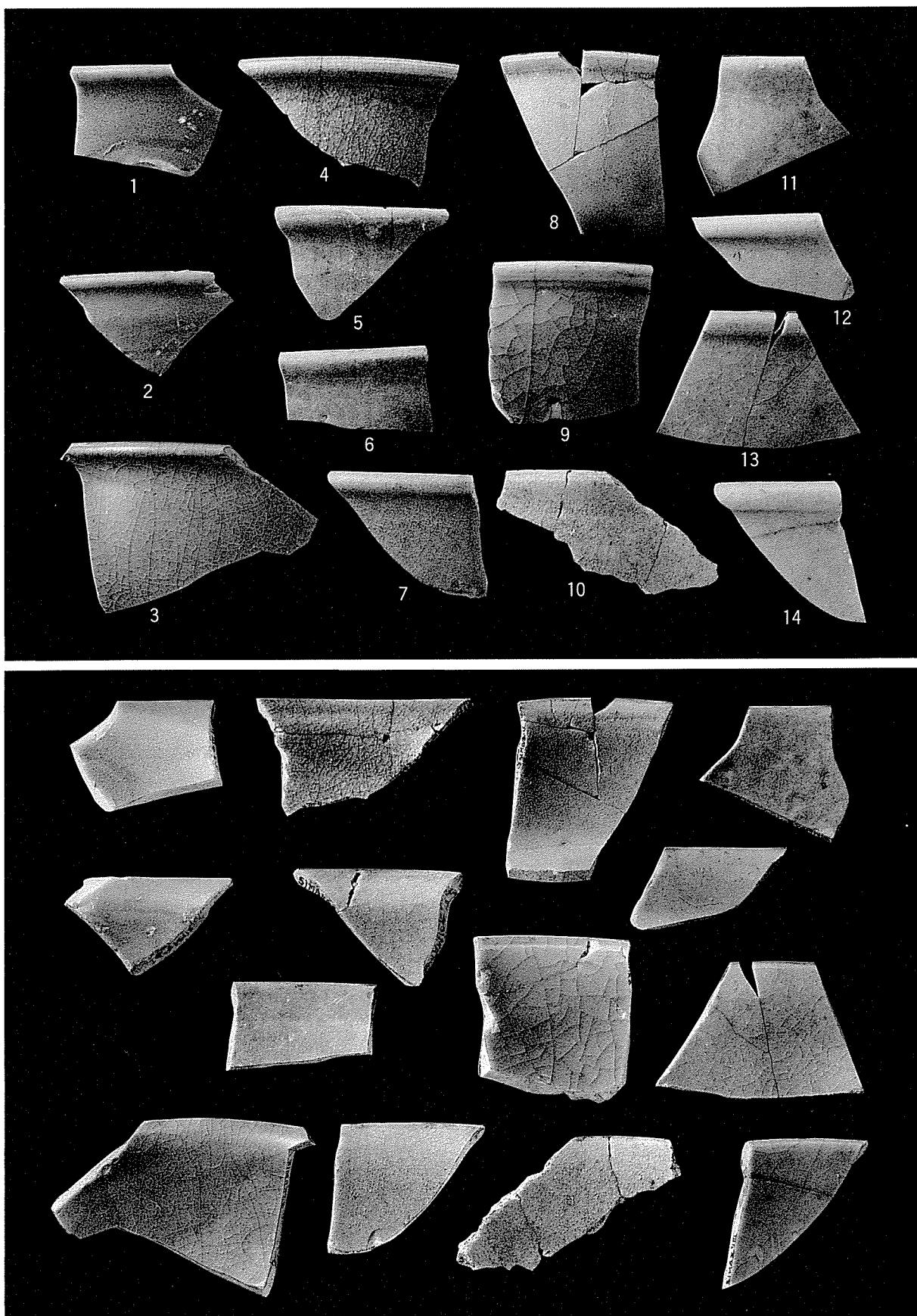
図版11 (第16図) 石器：滑石製品（1・2）、円形石器（3）、黒曜石（4）  
チャート製品（5・6）、化石サメ歯製品（7）



図版12 (第17図) カムイ窯須恵器：壺 (1~15)・鉢 (16)

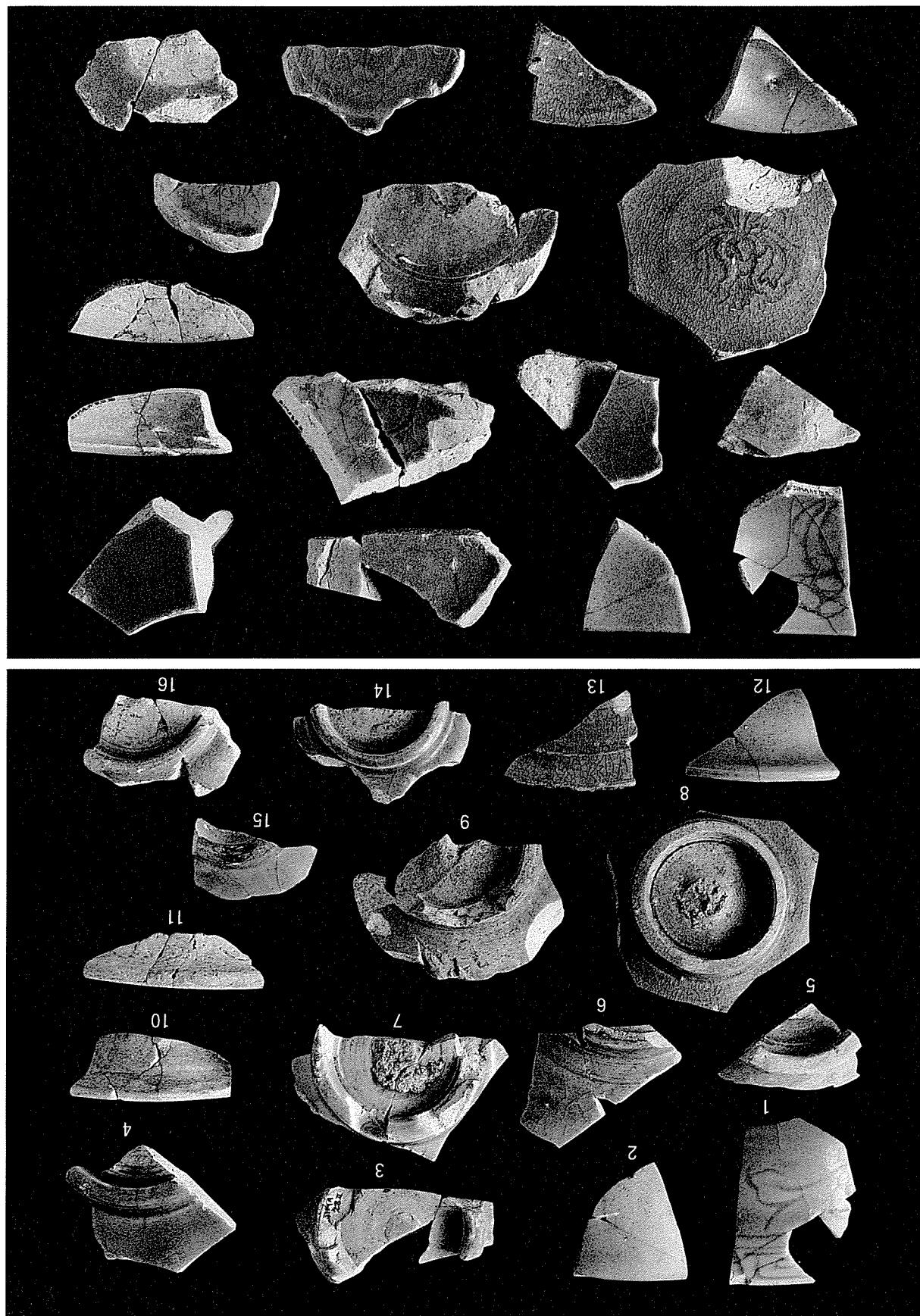


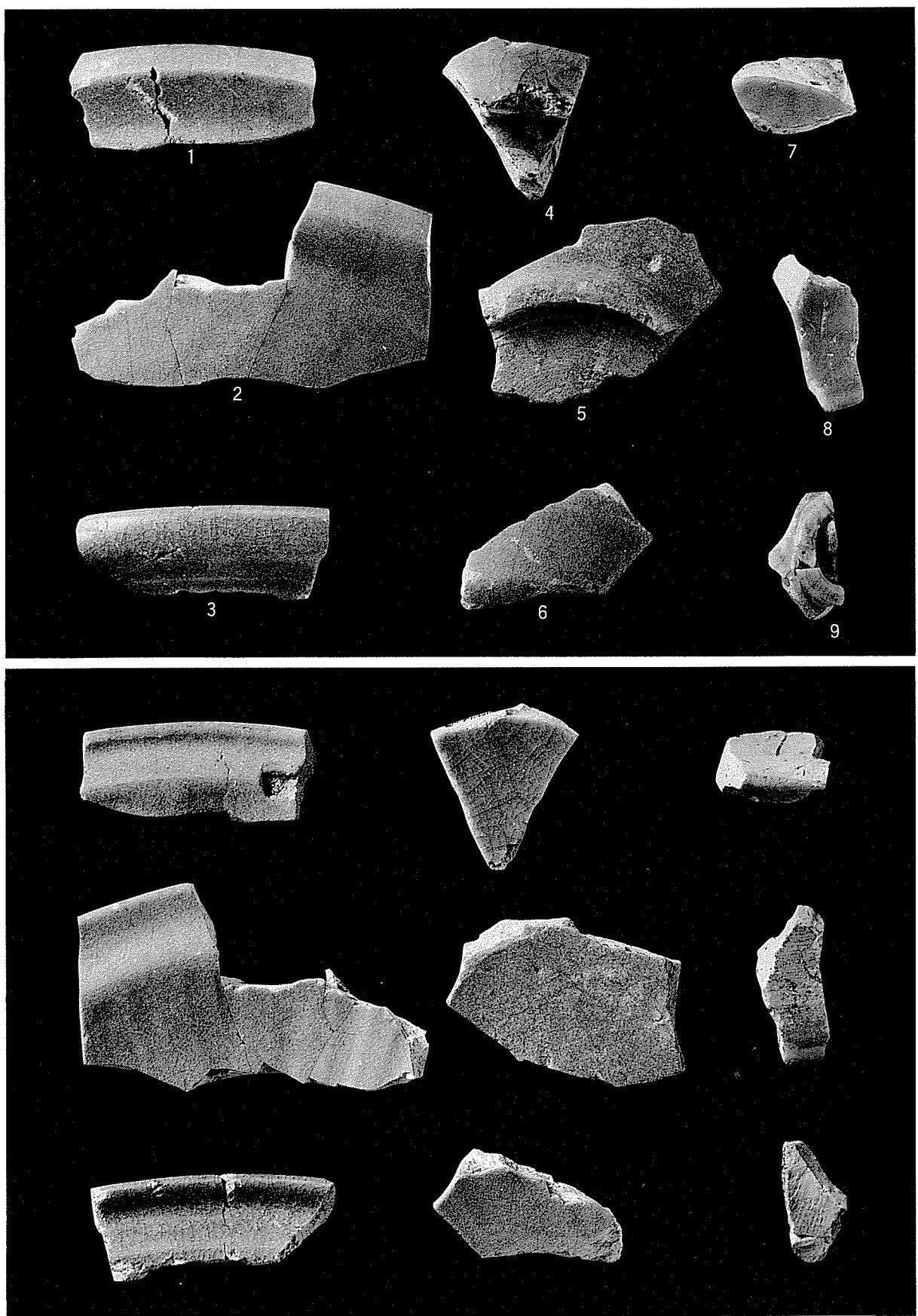
図版13 (第18図) 白磁：碗（1～7）・皿（8・9）



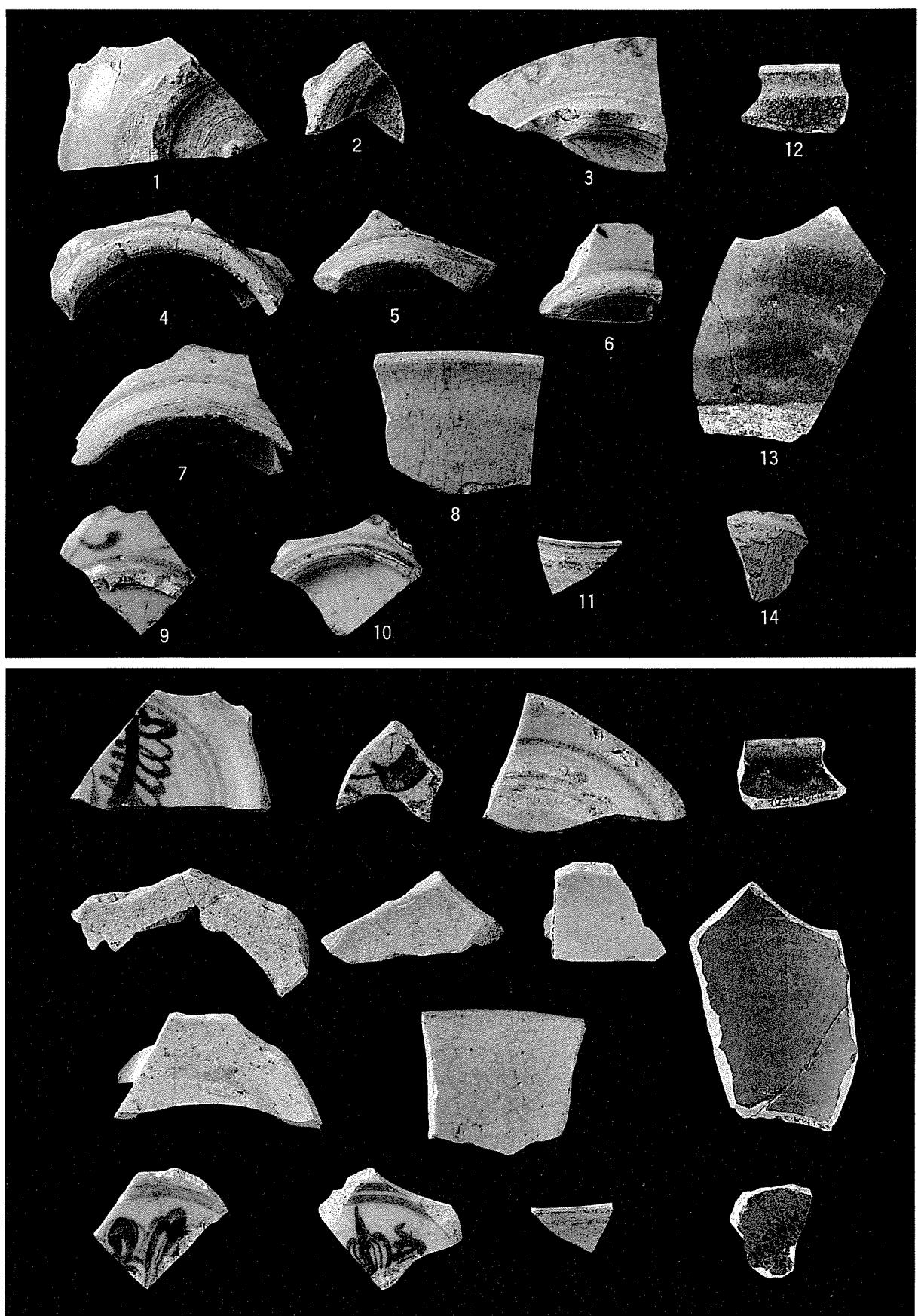
図版14 (第19図) 青磁:碗 (1~14)

図版15 (第20図) 青磁: 鏡 (1~9) · 三 (10~16)

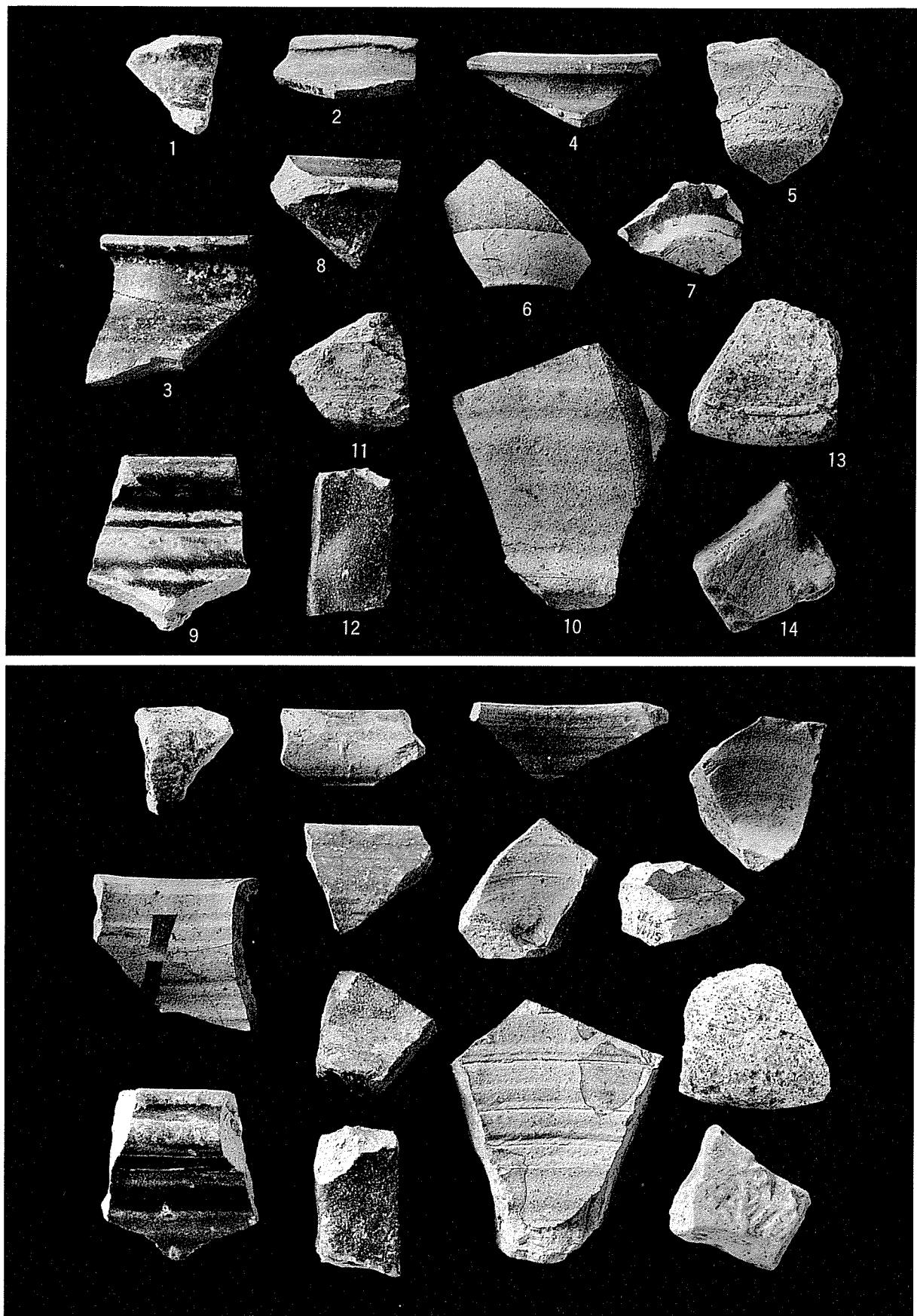




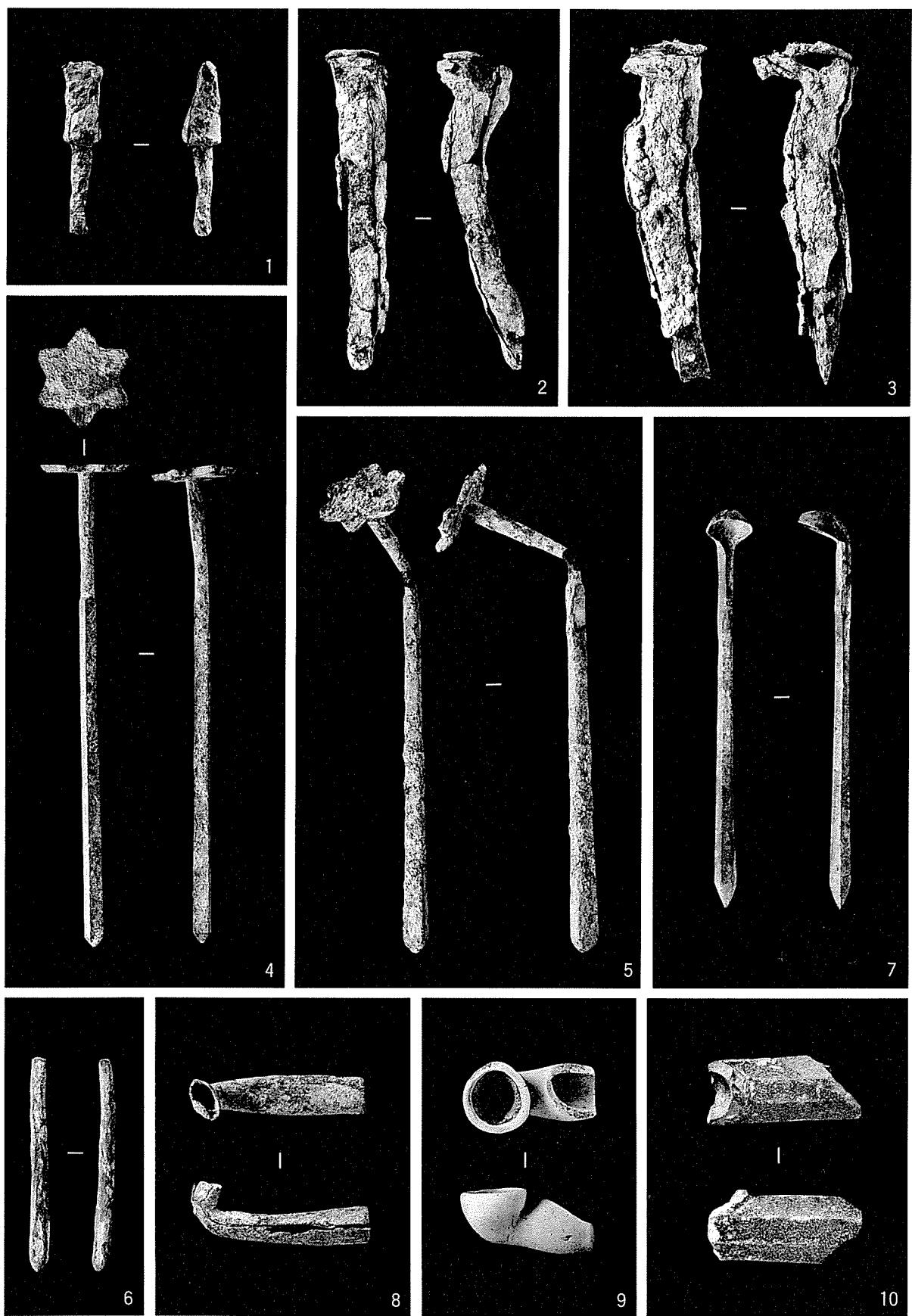
図版16 (第21図) 青磁：盤（1～6）・壺（7・8）・瓶（9）



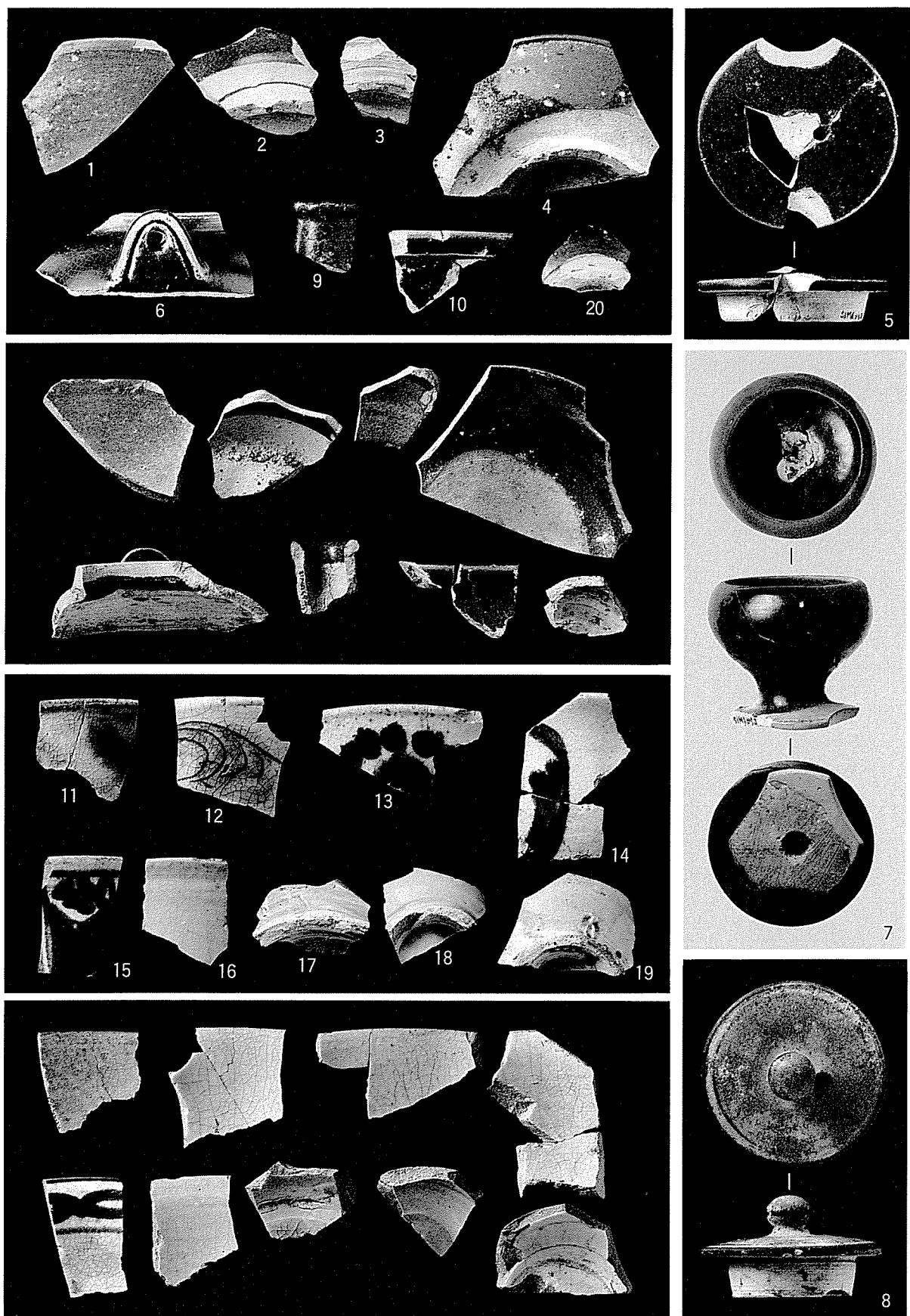
図版17 (第22図) 青花:碗 (1~8) · 皿 (9·10) · 壺 (11)  
天目:碗 (12~14)



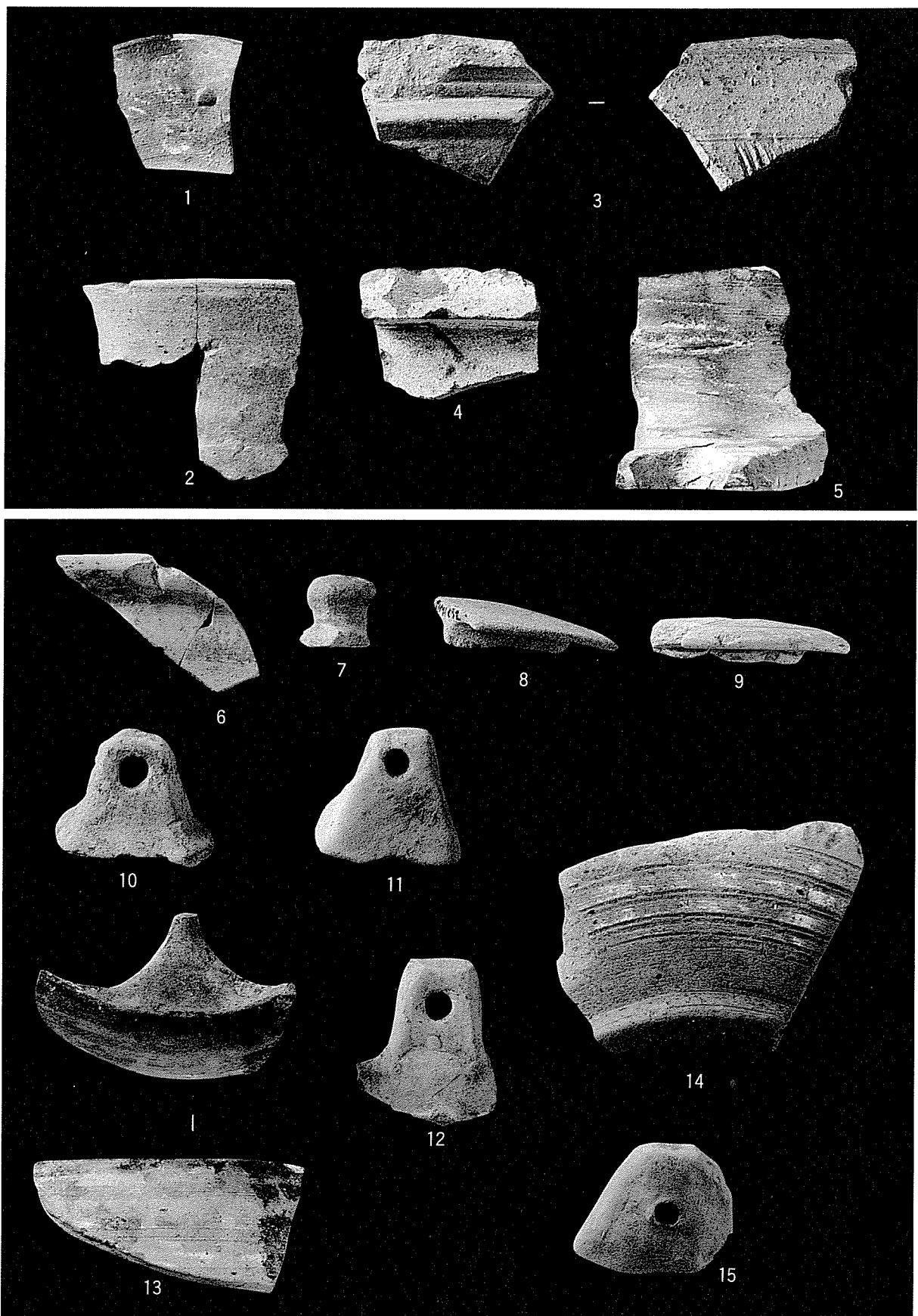
図版18 (第23図) 褐釉陶器：壺 (1~11) 高麗系瓦：平瓦 (14)  
タイ産土器：蓋 (13) 把手？ (12)



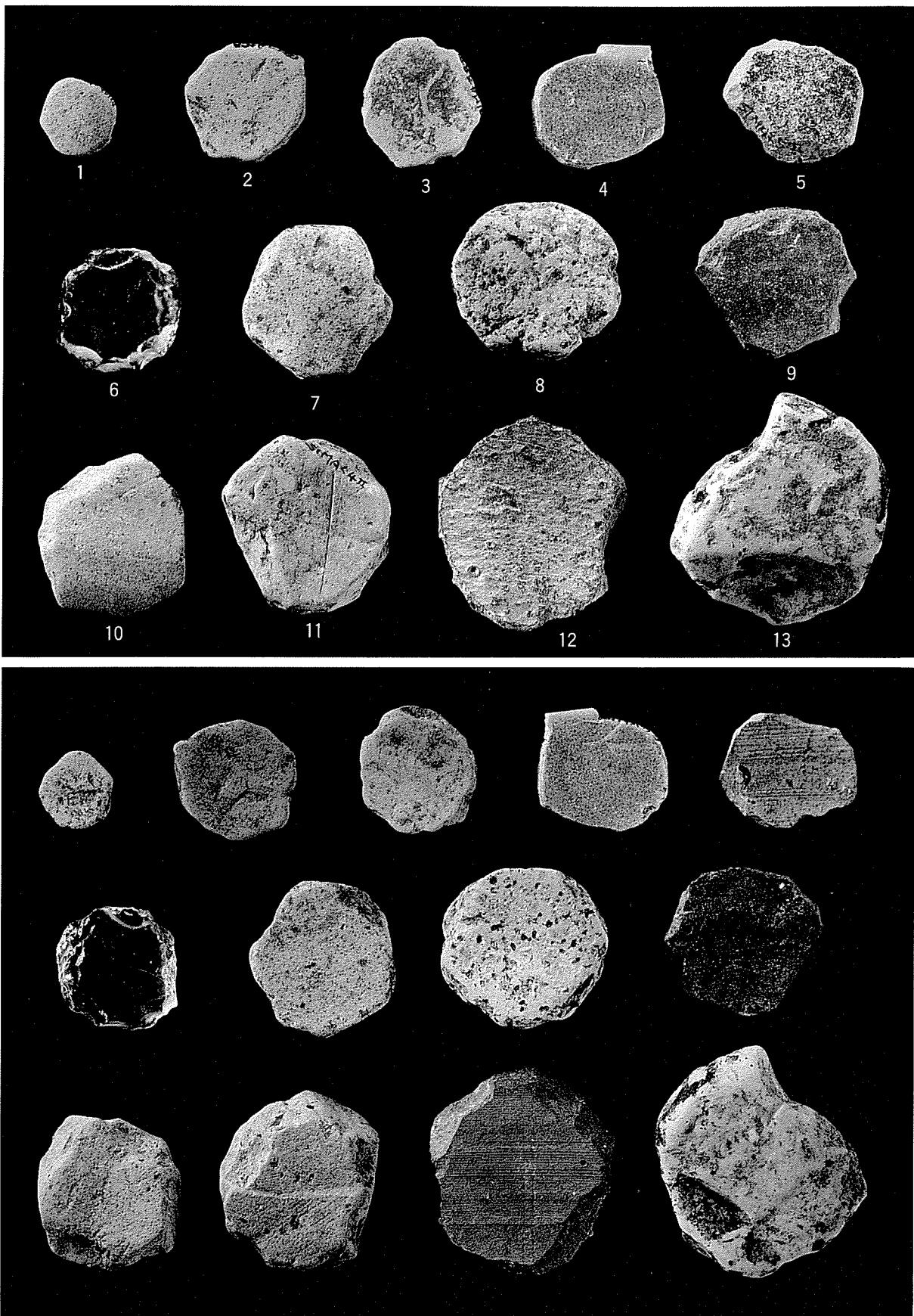
図版19 (第24図) 鉄鎌 (1)、鉄釘 (2・3)、カンザシ (4~7)、煙管 (8~10)



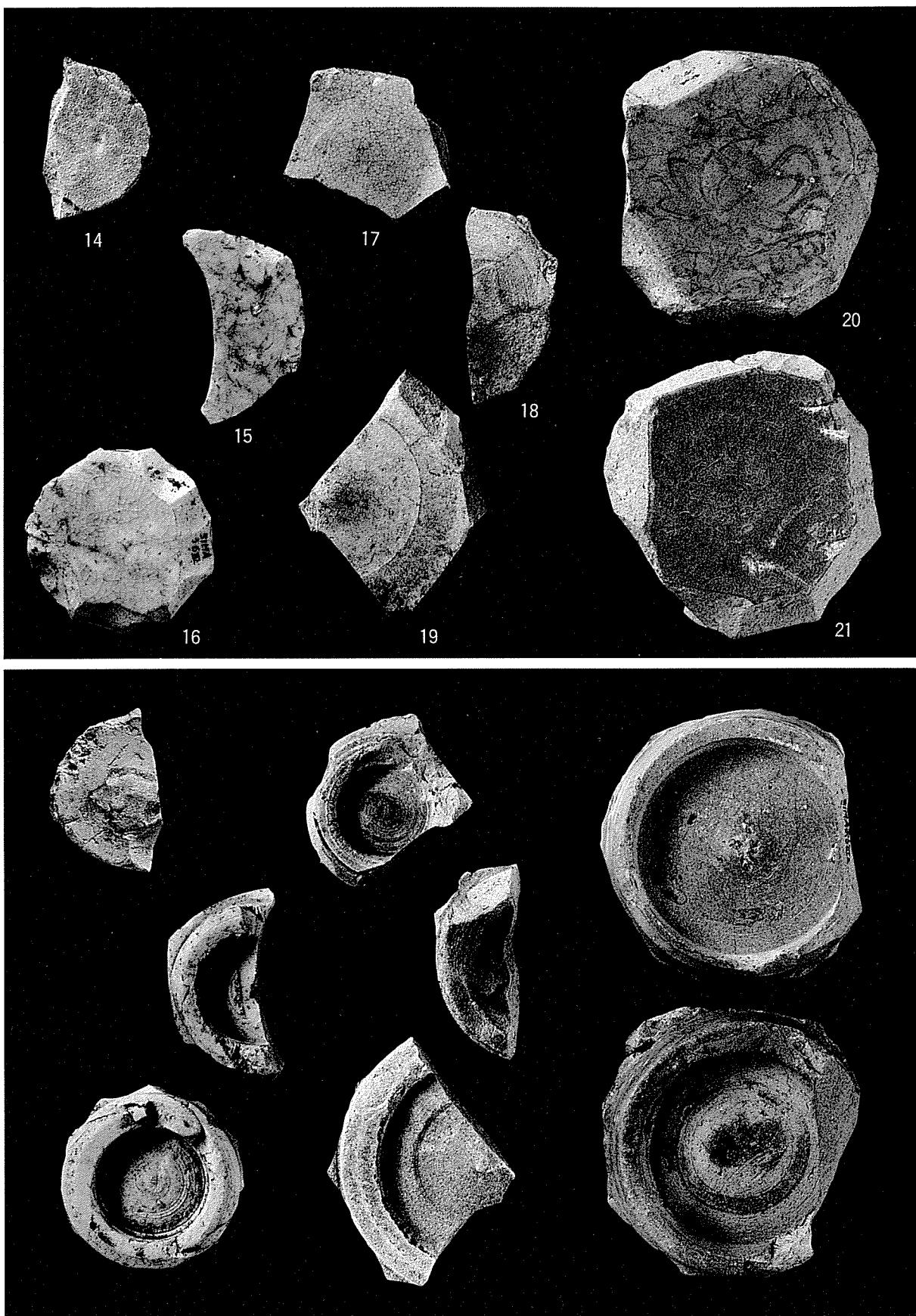
図版20 (第25図) 施釉陶器：碗（1～3・11～17）・皿（4）・水注（5・6・8）  
秉燭（7）・壺（9）・鉢（10）・小碗（18～20）



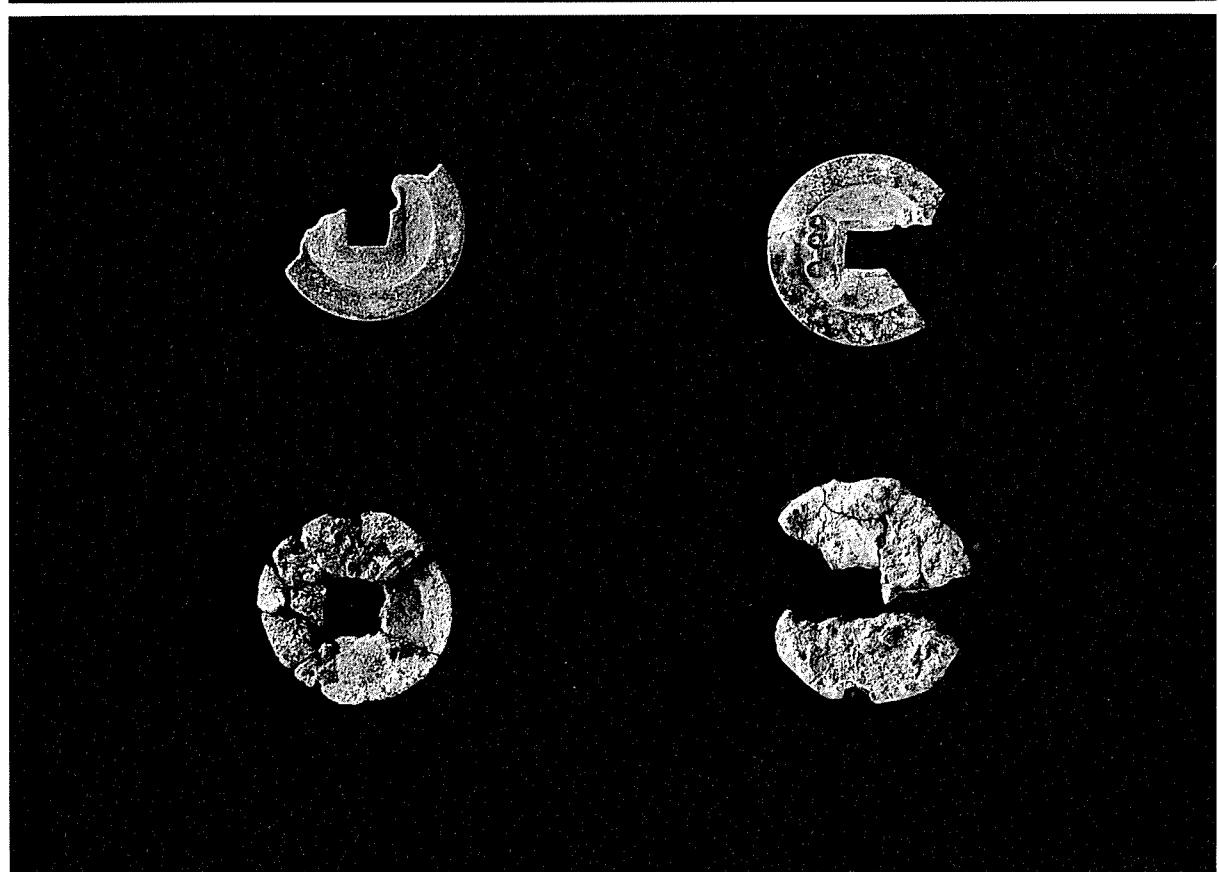
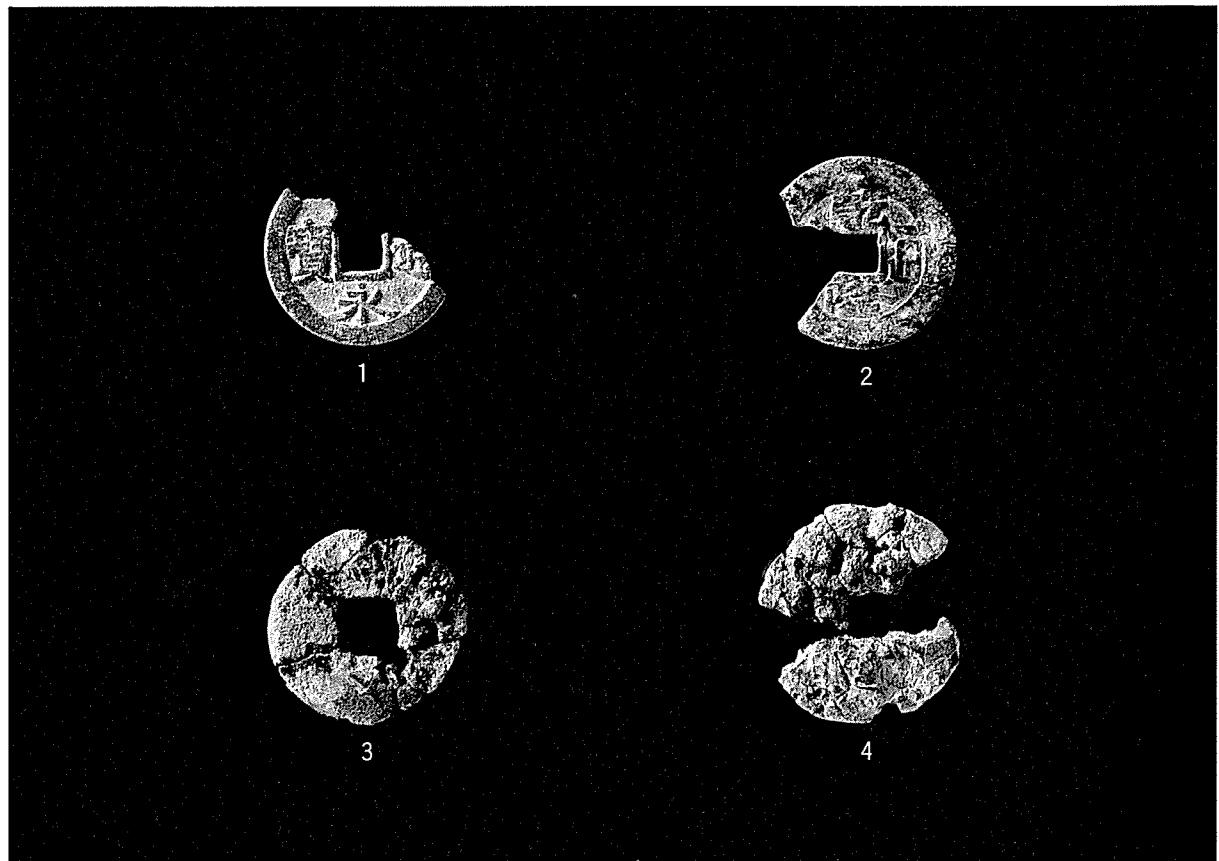
図版21 (第26図) 無釉陶器：皿（1）・火入れ（2）・擂鉢（3）・鉢（4）・厨子甕（5）  
陶質土器：鍋（6）・土瓶（7～12）・炉（13・14）・フライパン状製品（15）



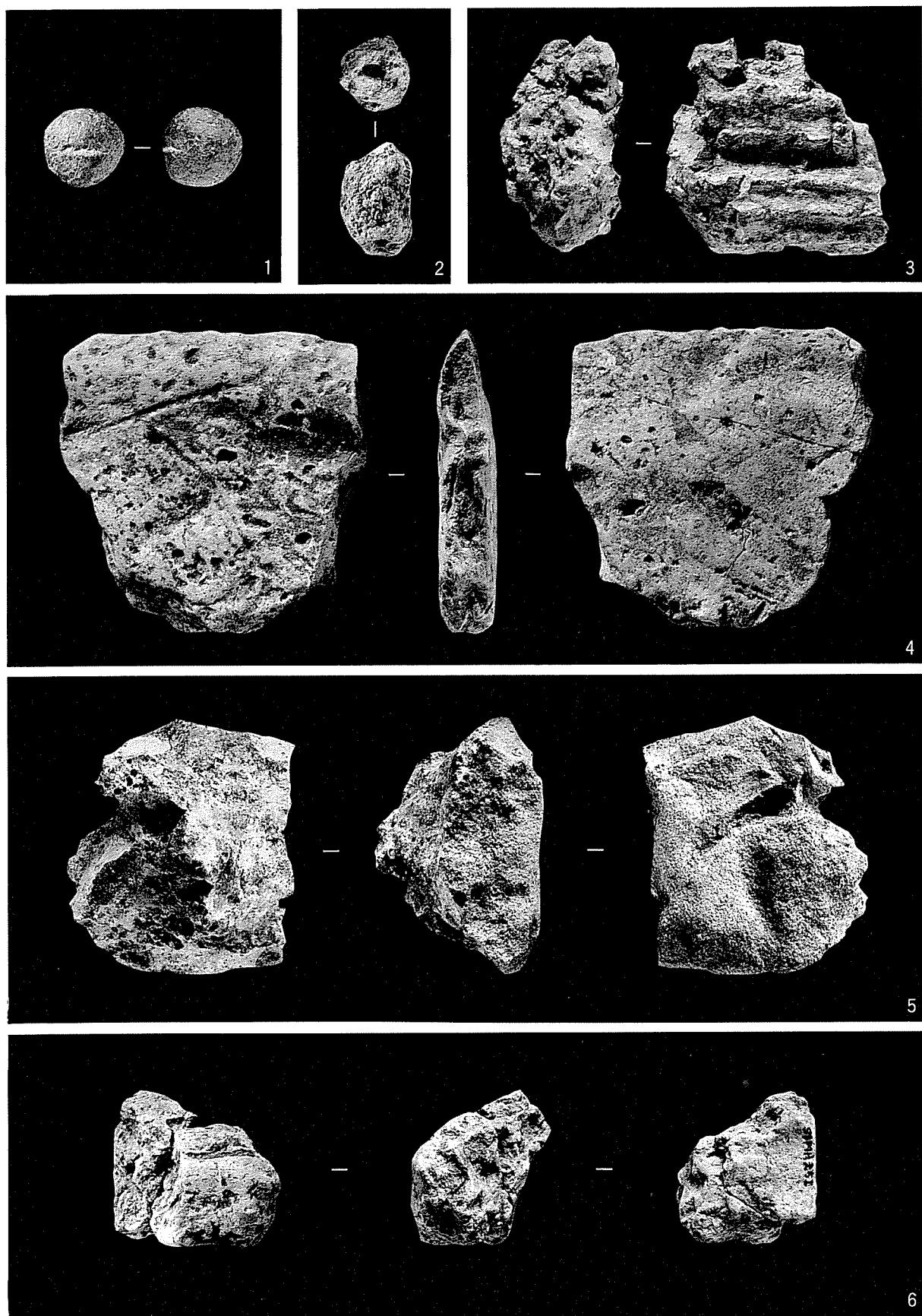
図版22 (第27図) 円盤状製品 (1~13)



図版23 (第28図) 円盤状製品 (14~21)

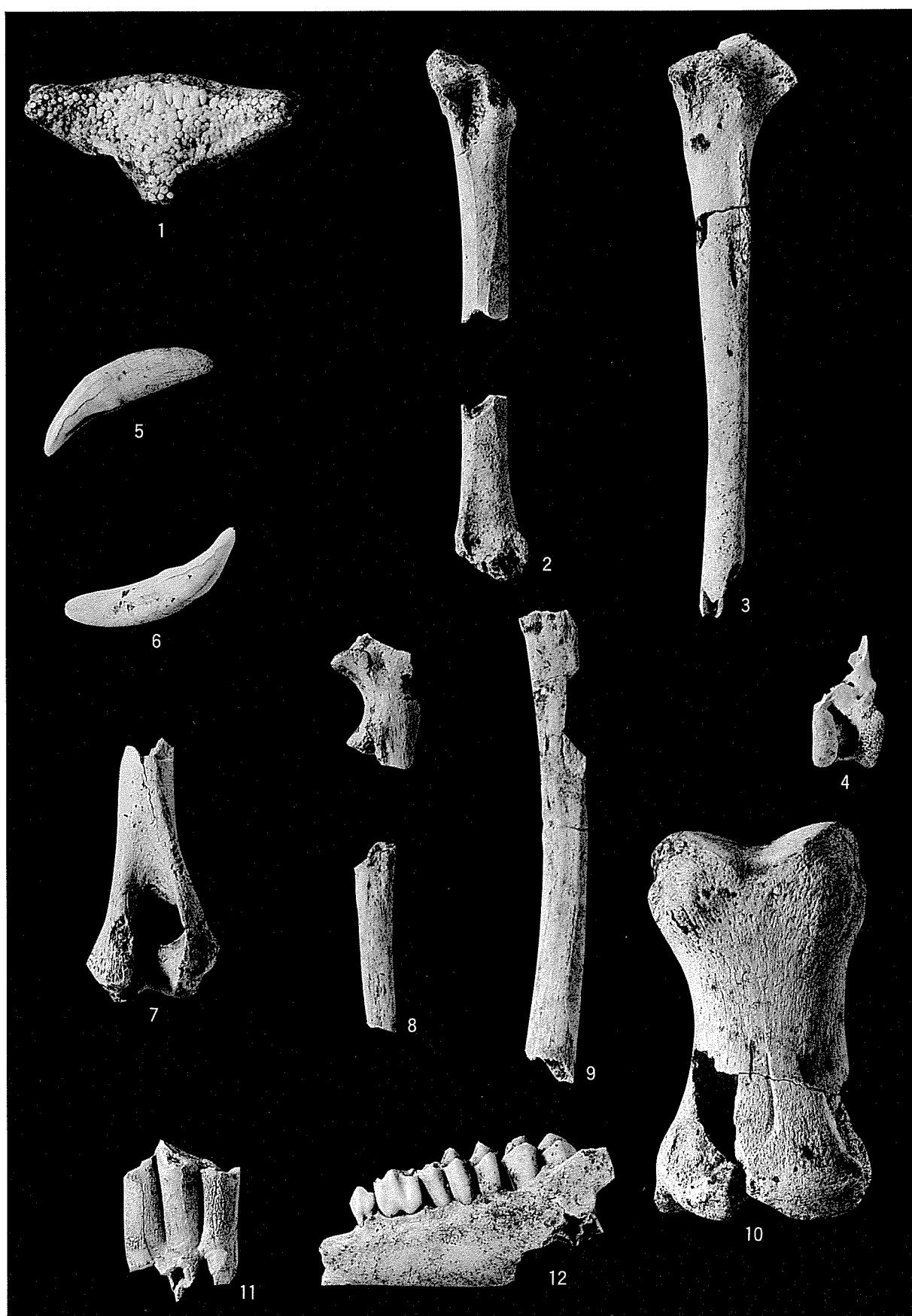


図版24 (第29図) 錢貨 (1 ~ 4)



図版25 (第30図) 土製品：土玉 (1・2)、羽口 (5・6)、不明 (3・4)

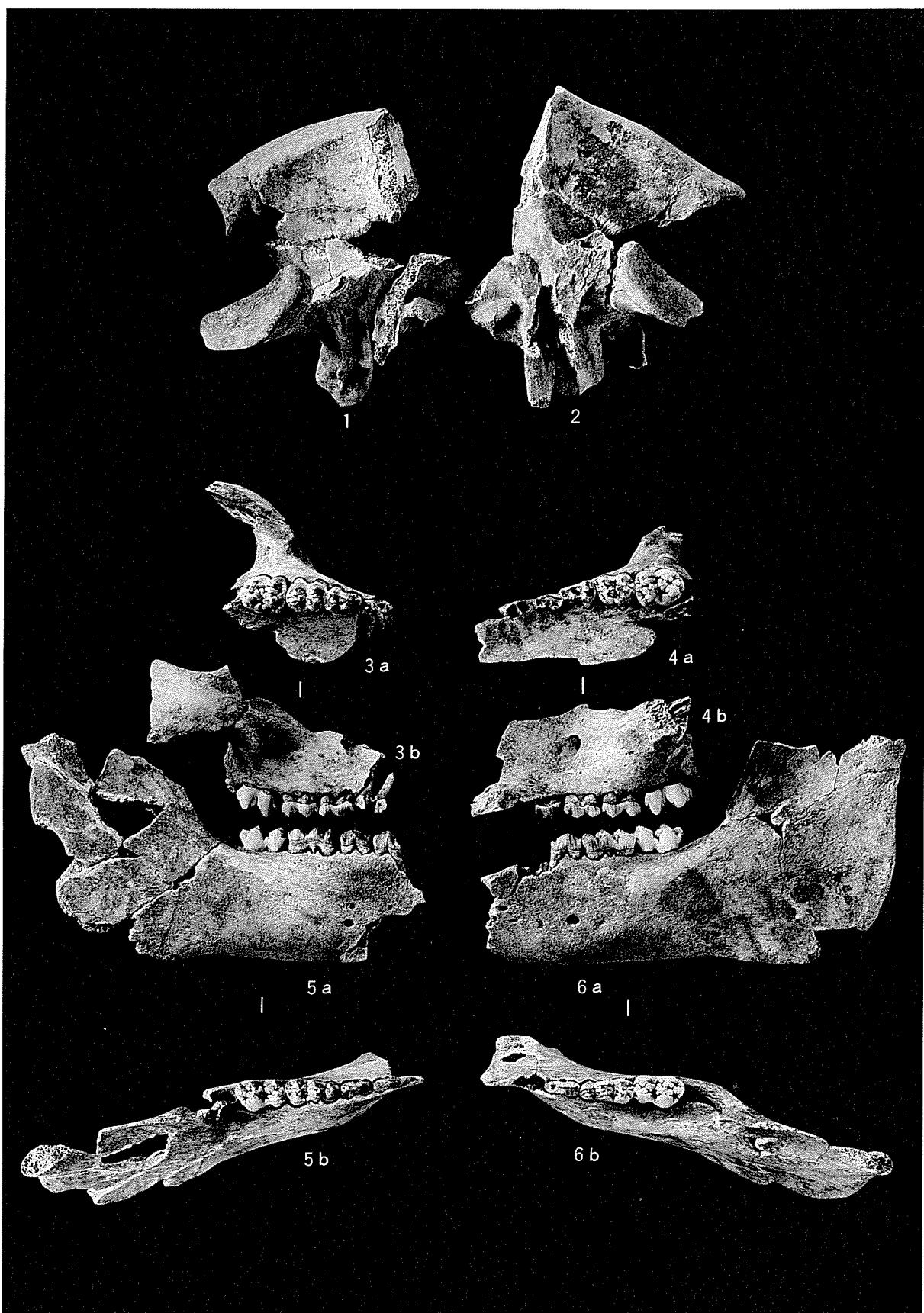
1. コブダイ (ベラ科) 下咽頭骨
2. ニワトリ 大腿骨 R
3. タ 脛骨 R
4. タ タ L
5. イヌ 上顎犬歯 L
6. タ 下顎犬歯 R
7. タ 上腕骨 R
8. タ 尺骨 L
9. タ 桡骨 L
10. ウマ 基節骨
11. ヤギ 下顎歯 R M<sub>3</sub>
12. タ 下顎骨 L (dm<sub>2,3,4</sub>, M<sub>1</sub>)



図版26 獣・魚骨類：魚（1）・ニワトリ（2～4）・  
イヌ（5～9）・ウマ（10）・ヤギ（11・12）

0 5cm

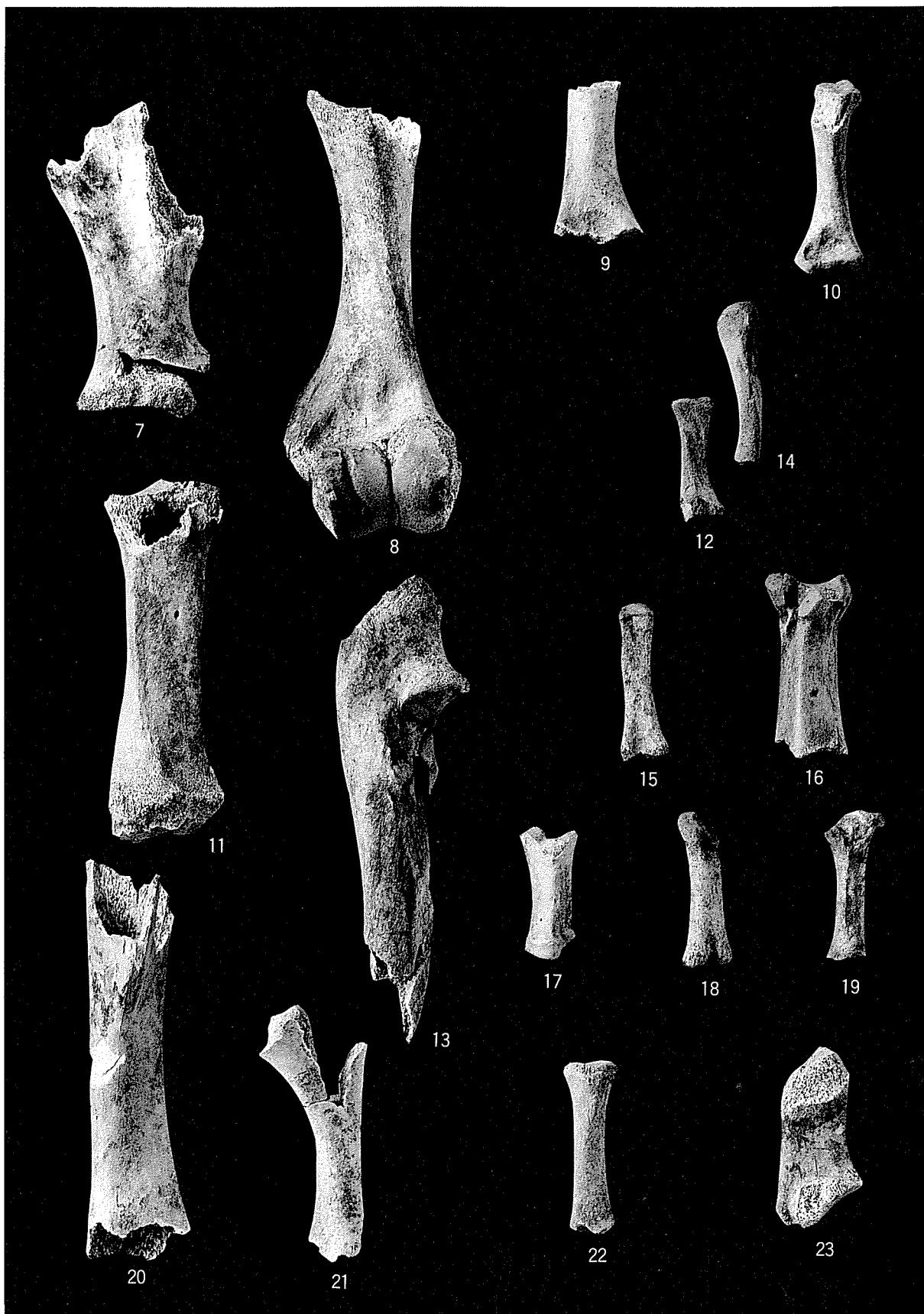
1.	ブ タ	頭蓋骨	L
2.	タ	タ	R
3.	タ	上顎骨	R (d m <sup>3・4</sup> , M <sup>1・2</sup> )
4.	タ	タ	L (d m <sup>3・4</sup> , M <sup>1・2</sup> )
5.	タ	下顎骨	R (d m <sub>2</sub> , m <sub>3・4</sub> , M <sub>1</sub> , (M <sub>2</sub> ))
6.	タ	タ	L (d m <sub>3・4</sub> , M <sub>1</sub> , (M <sub>2</sub> ))



図版27 獣・魚骨類：ブタ（1～6）

0 5cm

7.	ブ タ	肩 甲 骨	R
8.	ク	上 腕 骨	R (大)
9.	ク	ク	L (中)
10.	ク	ク	R (小)
11.	ク	橈 骨	R (大)
12.	ク	ク	R (小)
13.	ク	尺 骨	R (大)
14.	ク	ク	R (小)
15.	ク	第 2 中 手 骨	L (小)
16.	ク	第 3 中 手 骨	L
17.	ク	第 4 中 手 骨	R (小)
18.	ク	第 5 中 手 骨	L (小)
19.	ク	大 腿 骨	L (小)
20.	ク	脛 骨	L (大)
21.	ク	ク	R (中)
22.	ク	ク	L (小)
23.	ク	踵 骨	L



図版28 獣・魚骨類：ブタ（7～23）

0 5cm

1.	ウ	シ	上 頸 齒	L	M <sup>2</sup>
2.	タ		タ	L	M <sup>2</sup>
3.	タ		下 頸 齒	R	M <sup>2</sup>
4.	タ		上 腕 骨	L	
5.	タ		大 腿 骨	L	
6.	タ		脛 骨	L	
7.	タ		タ	R	
8.	タ		寛 骨	R	
9.	タ		尺 骨	R	
10.	タ		基 節 骨		



図版29 獣・魚骨類：ウシ (1~10)

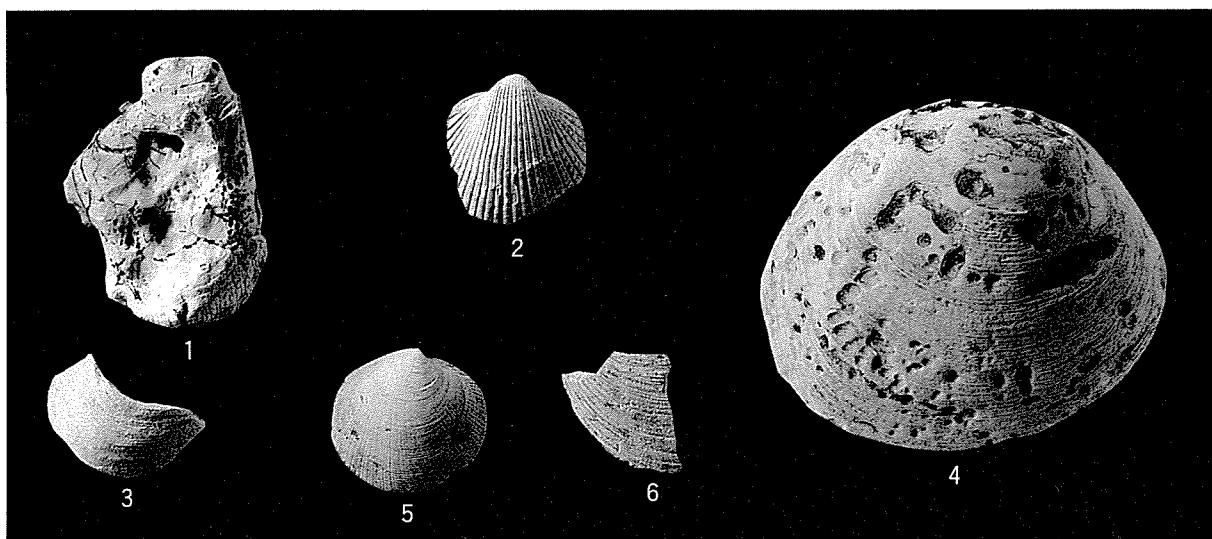
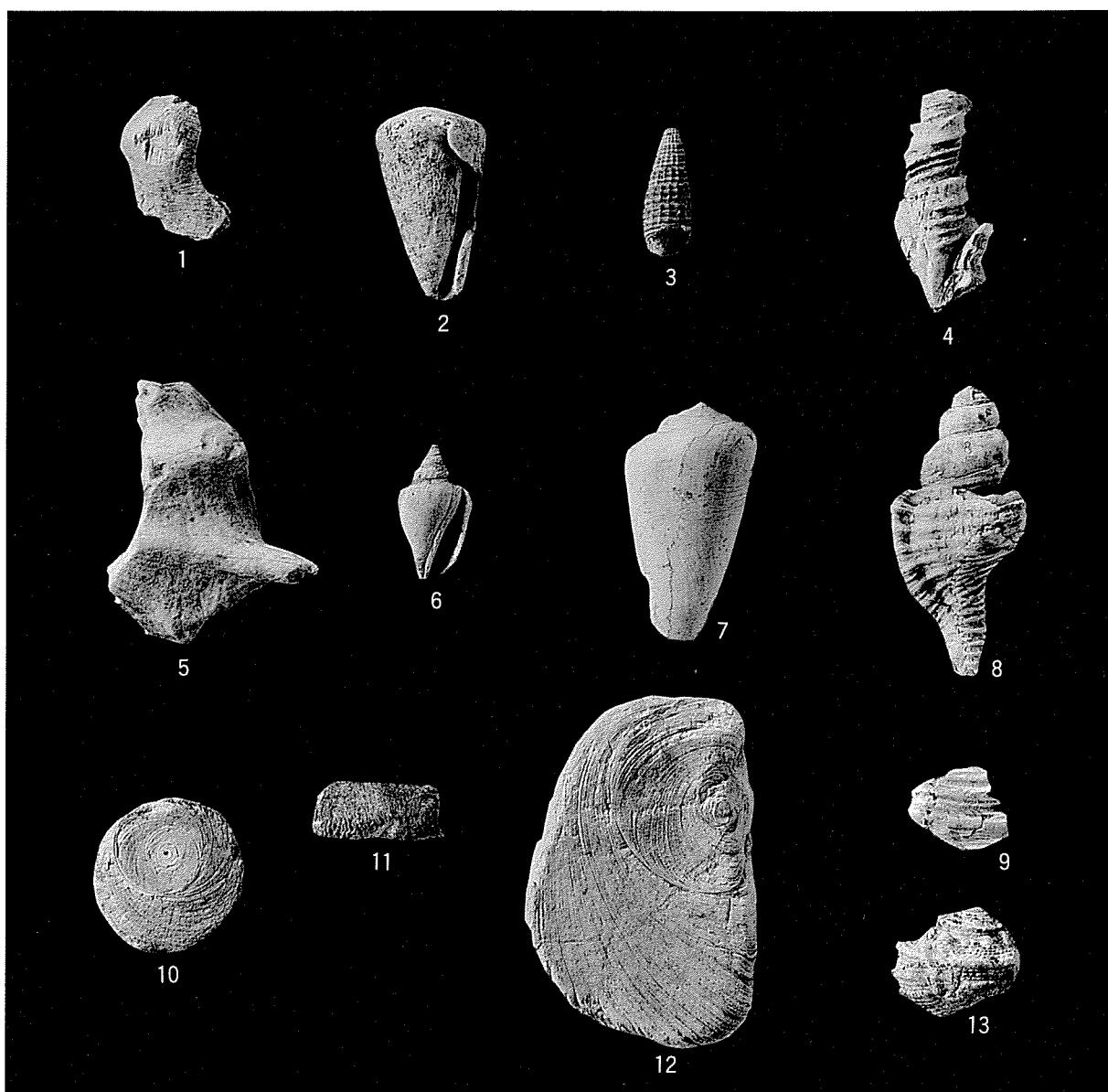
0 5cm

## 卷 貝

- |              |             |
|--------------|-------------|
| 1. イトマキボラ科   | イトマキボラ      |
| 2. イモガイ科     | キヌカツギイモガイ   |
| 3. ウミニナ科     | ヘナタリ        |
| 4. オニコブシガイ科  | コオニコブシ      |
| 5. スイショウガイ科  | クモガイ        |
| 6. タ         | オハグロガイ      |
| 7. タ         | マガキガイ       |
| 8. フジツガイ科    | 不明          |
| 9. リュウテンサザエ科 | チョウセンサザエ    |
| 10. タ        | チョウセンサザエのフタ |
| 11. タ        | ヤコウガイ       |
| 12. タ        | ヤコウガイのフタ    |
| 13. タ        | カンギクガイ      |

## 二枚貝

- |             |         |
|-------------|---------|
| 1. ウミギク科    | 不明      |
| 2. ザルガイ科    | カワラガイ   |
| 3. シャコガイ科   | ヒレジャコ   |
| 4. シジミガイ科   | シレナシジミ  |
| 5. ツキガイ科    | ウラキツキガイ |
| 6. マルスダレガイ科 | オキシジミ   |



図版30 貝類 上：巻貝（1～13）  
下：二枚貝（1～6）

0 5cm

---

那覇市文化財調査報告書第34集

## 識名シーマ御嶽遺跡

—真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告—

発 行 1997年3月

那覇市教育委員会

〒900 沖縄県那覇市樋川2-8-8

編 集 那覇市教育委員会文化課

TEL 098-853-5775

印 刷 有限会社 サン印刷

〒903-11 島尻郡南風原町字兼城577

TEL 098-889-3679

---